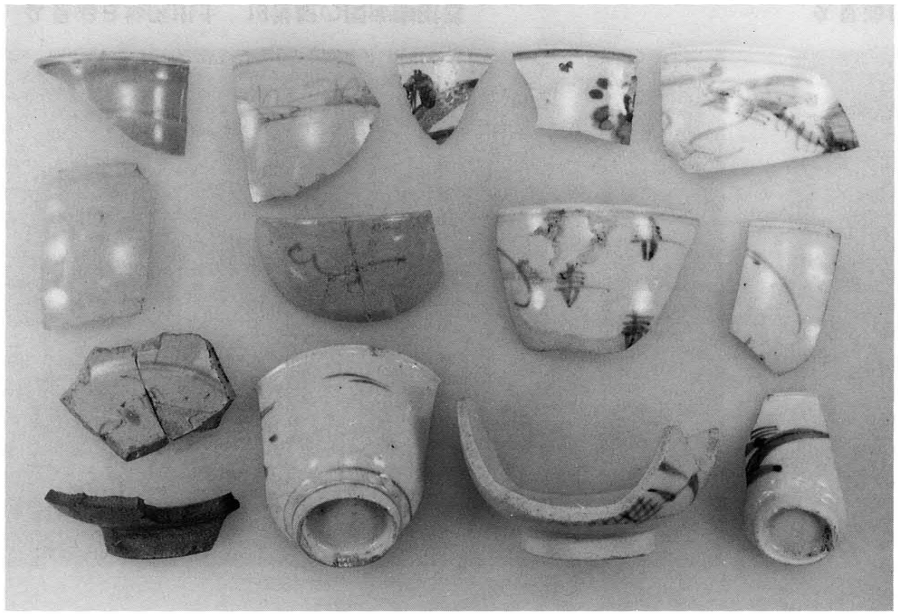
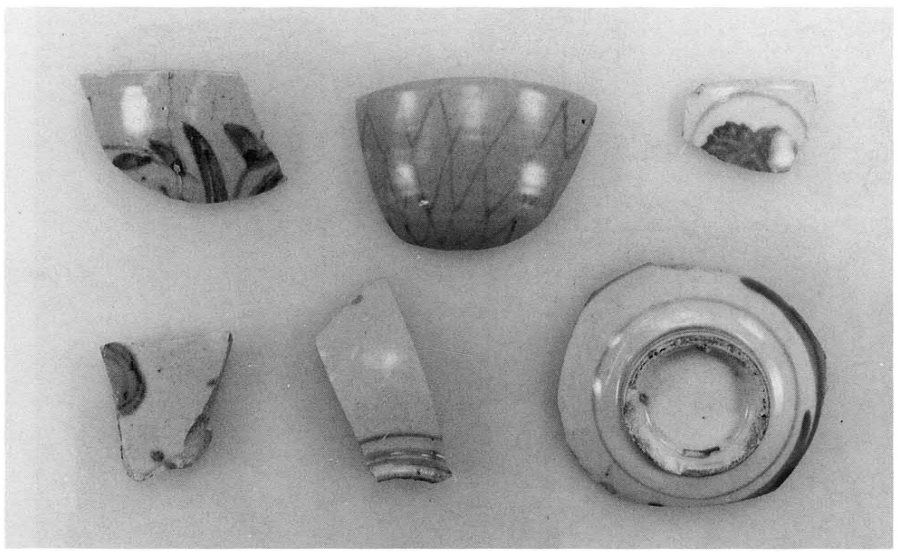


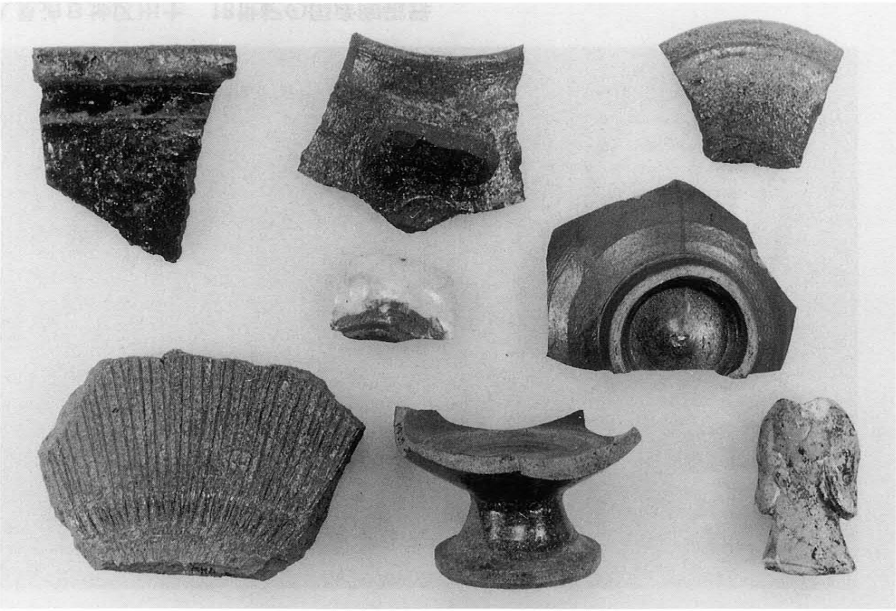
久見迫Ｂ地区出土　17世紀の国産陶磁器（２）

久見迫Ｂ地区出土　17世紀後半～18世紀前半の国産陶磁器

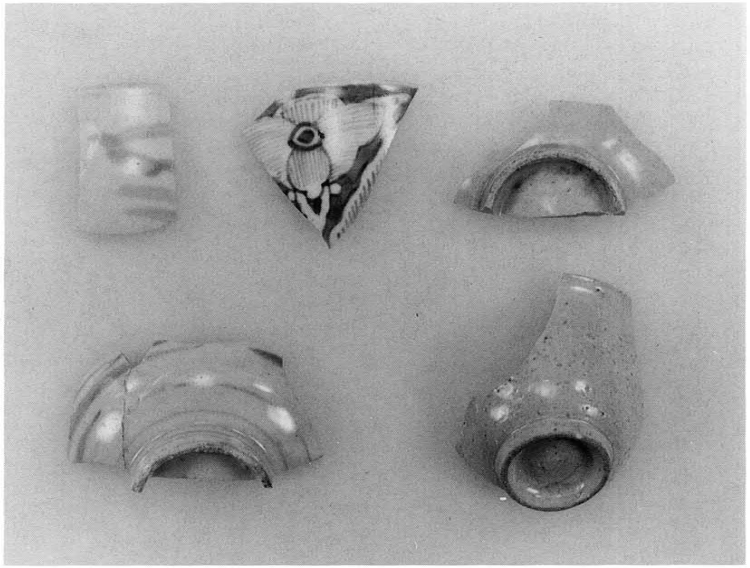


久見迫Ｂ地区出土　18世紀の国産陶磁器

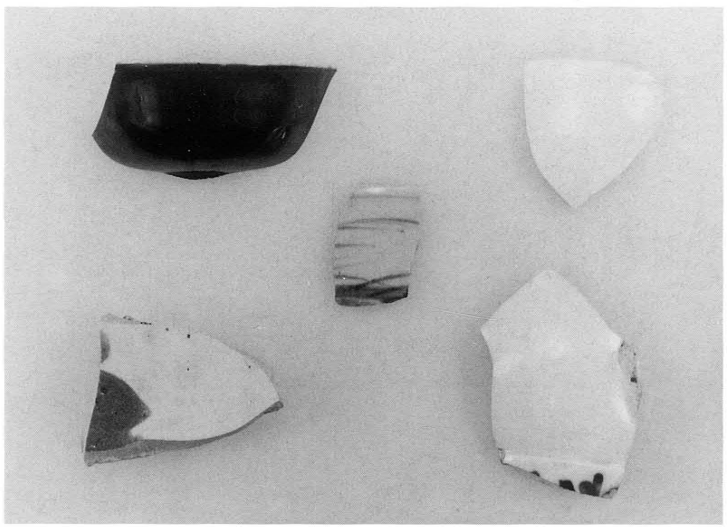
久見迫Ｂ地区出土　18世紀後半～19世紀の国産陶磁器



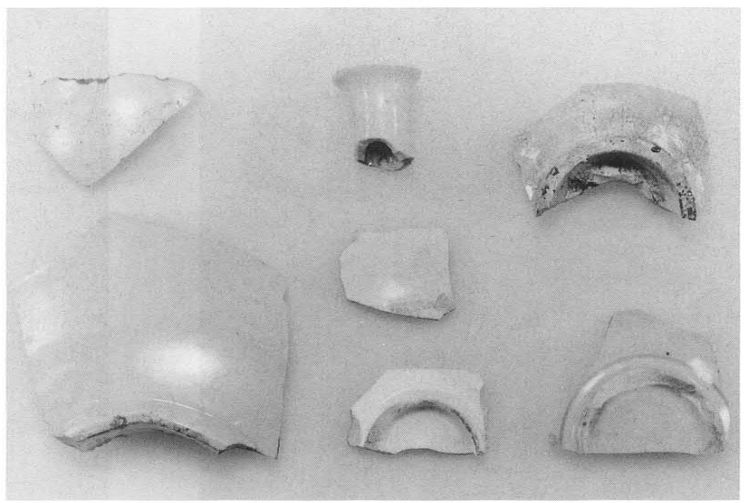
久見迫Ｂ地区出土　18世紀後半～19世紀後半の国産陶器



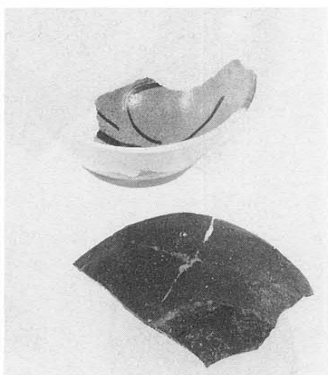
同左　磁器



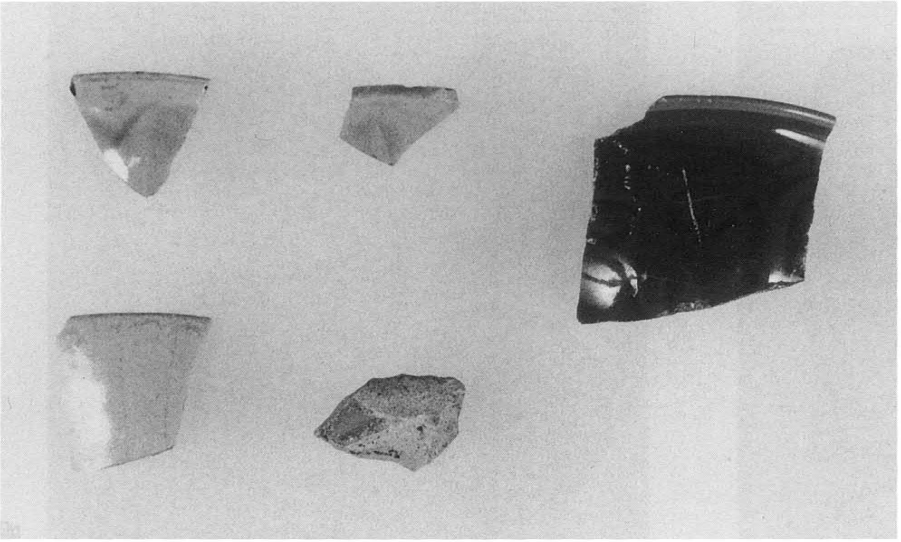
久見迫Ｂ地区出土　19世紀の国産陶磁器



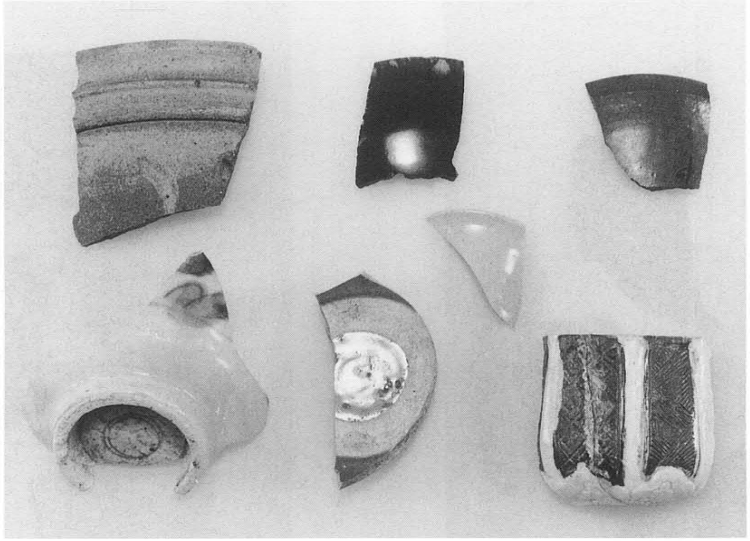
久見迫Ｂ地区　ＳＺ－11出土　国産磁器



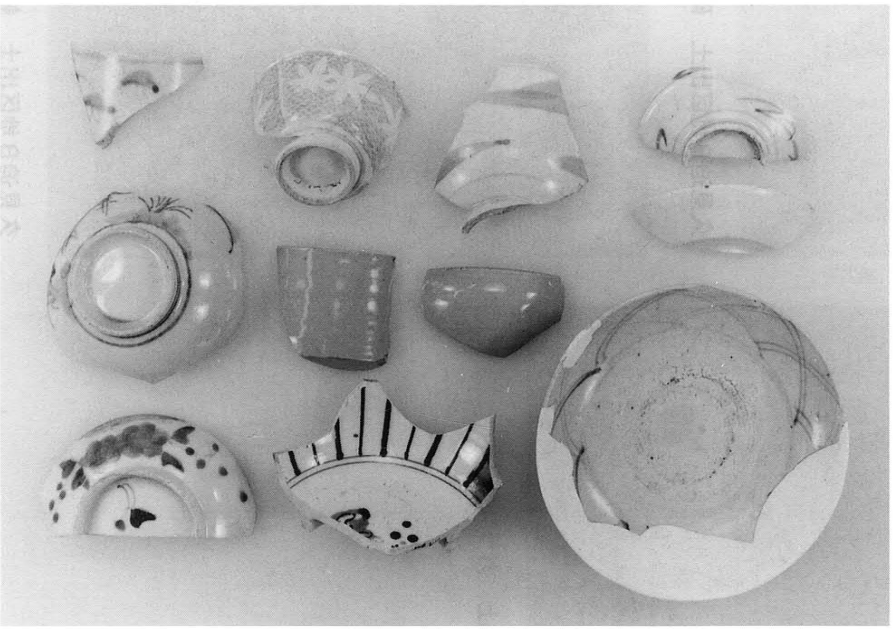
同左　陶器



地主原Ａ地区出土　輸入陶磁器・青磁



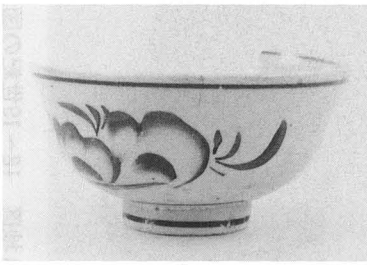
地主原Ａ地区出土　17世紀～18世紀前半の国産陶磁器



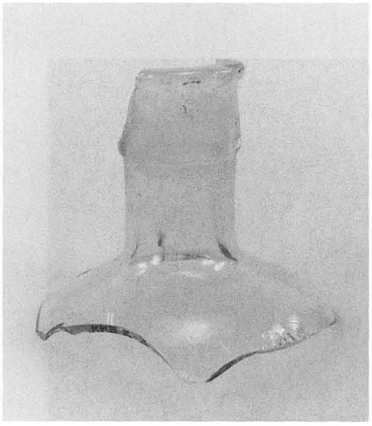
地主原Ａ地区　18世紀以降の国産磁器

地主原Ａ地区　18～19世紀の国産陶器

地主原Ａ地区出土　19世紀後半の国産陶器

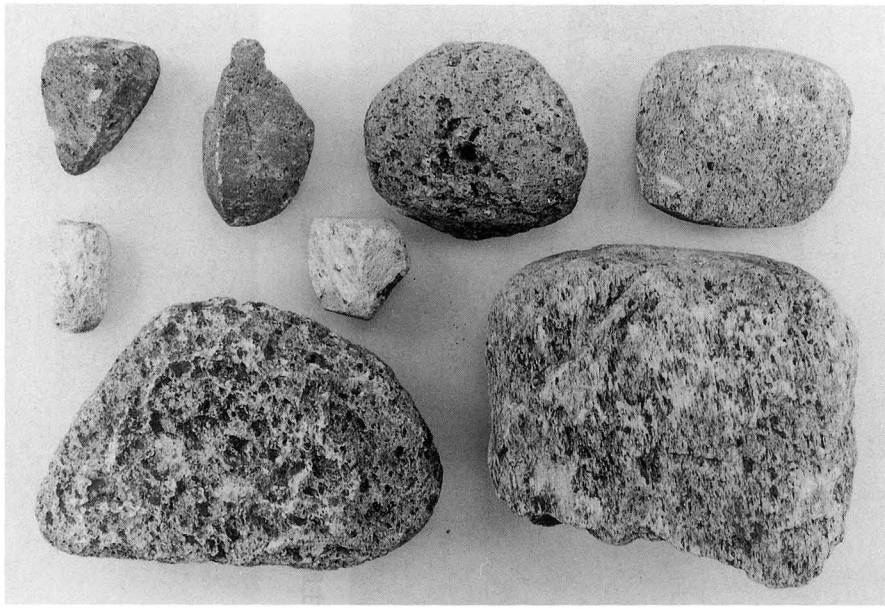


地主原Ａ地区　ＳＡ－01出土
磁器碗

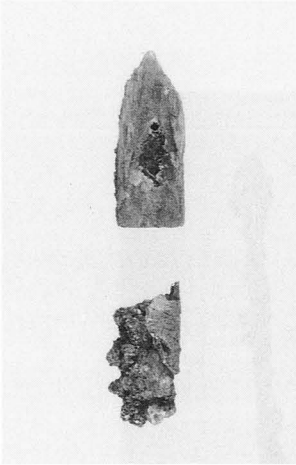


同上　ガラス瓶

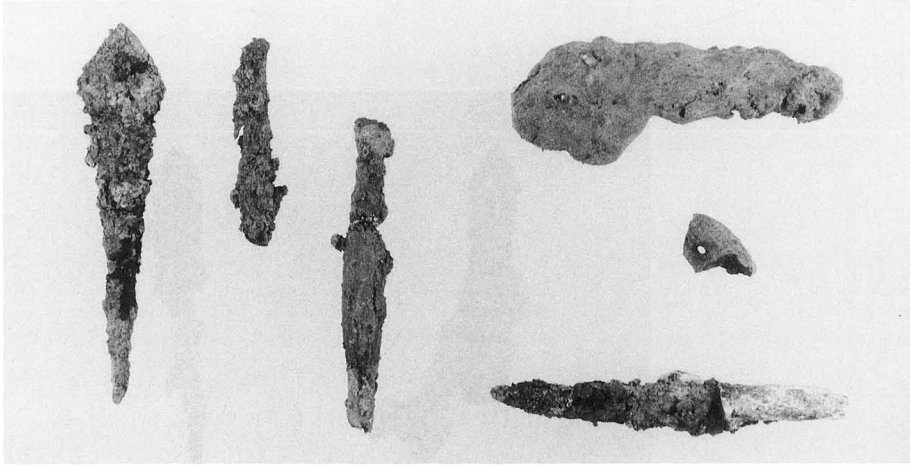
久見迫Ｂ地区出土　砥石



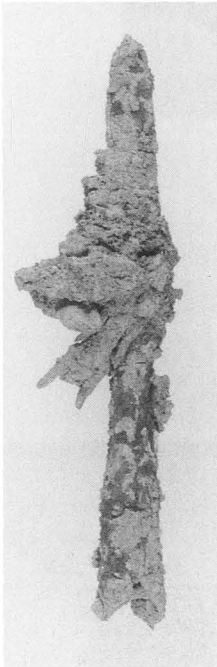
久見迫Ｂ地区出土　軽石加工品



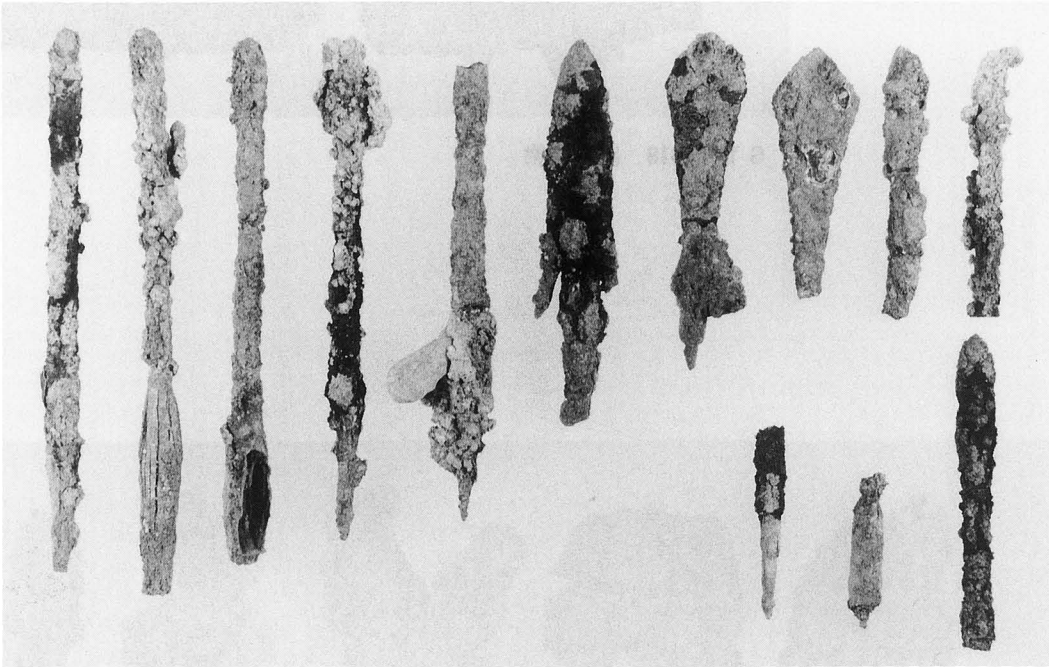
ＳＴ－3009　出土遺物



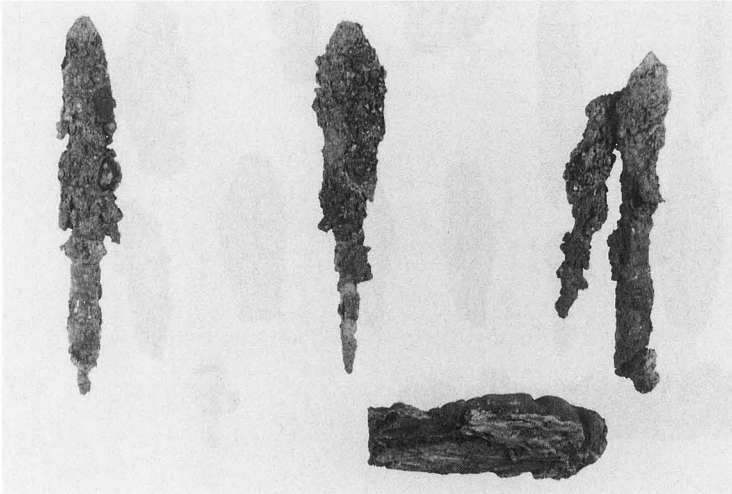
ＳＴ－3013　出土遺物



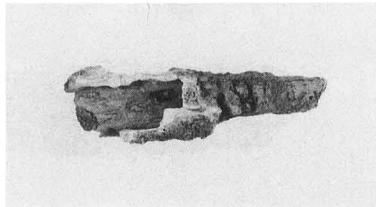
ＳＴ－3016
出土遺物（１）



ＳＴ－3014　出土遺物

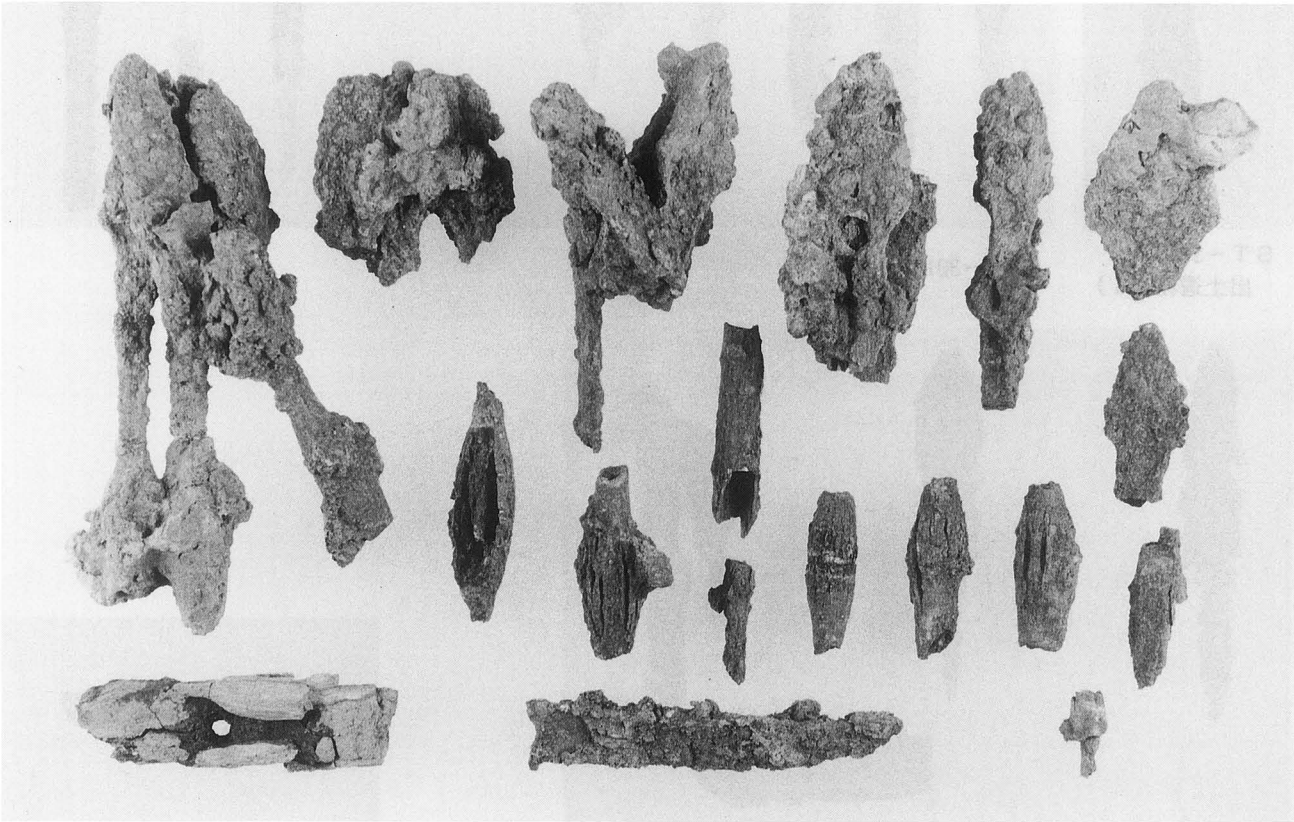


ＳＴ－3016　出土遺物（２）



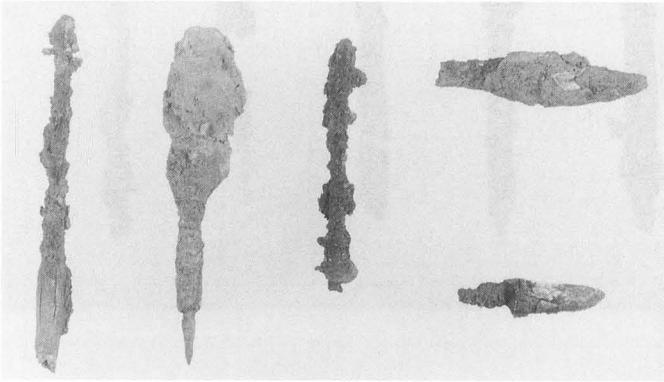
ＳＴ－3020　出土遺物

ＳＴ－3018　出土遺物



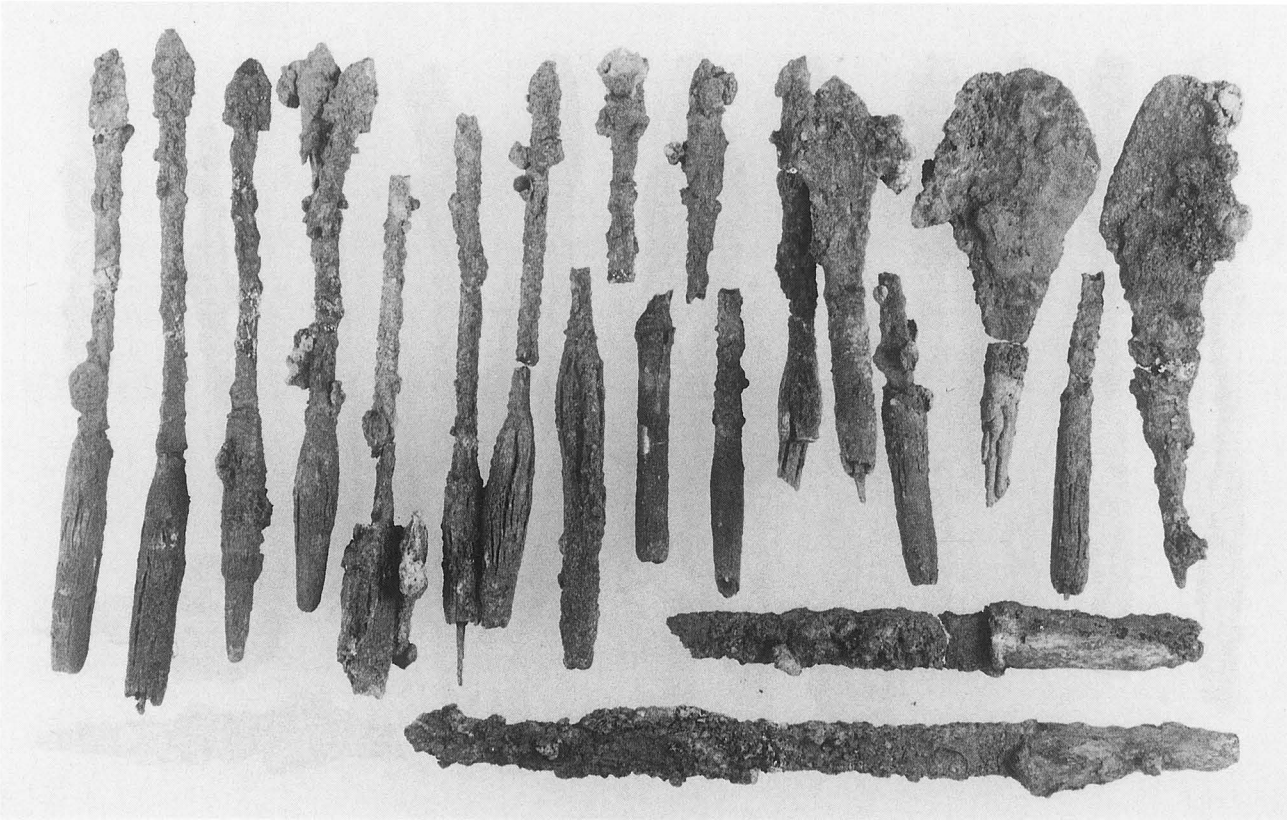
ＳＴ－4001　出土遺物

ＳＴ－4002　出土遺物

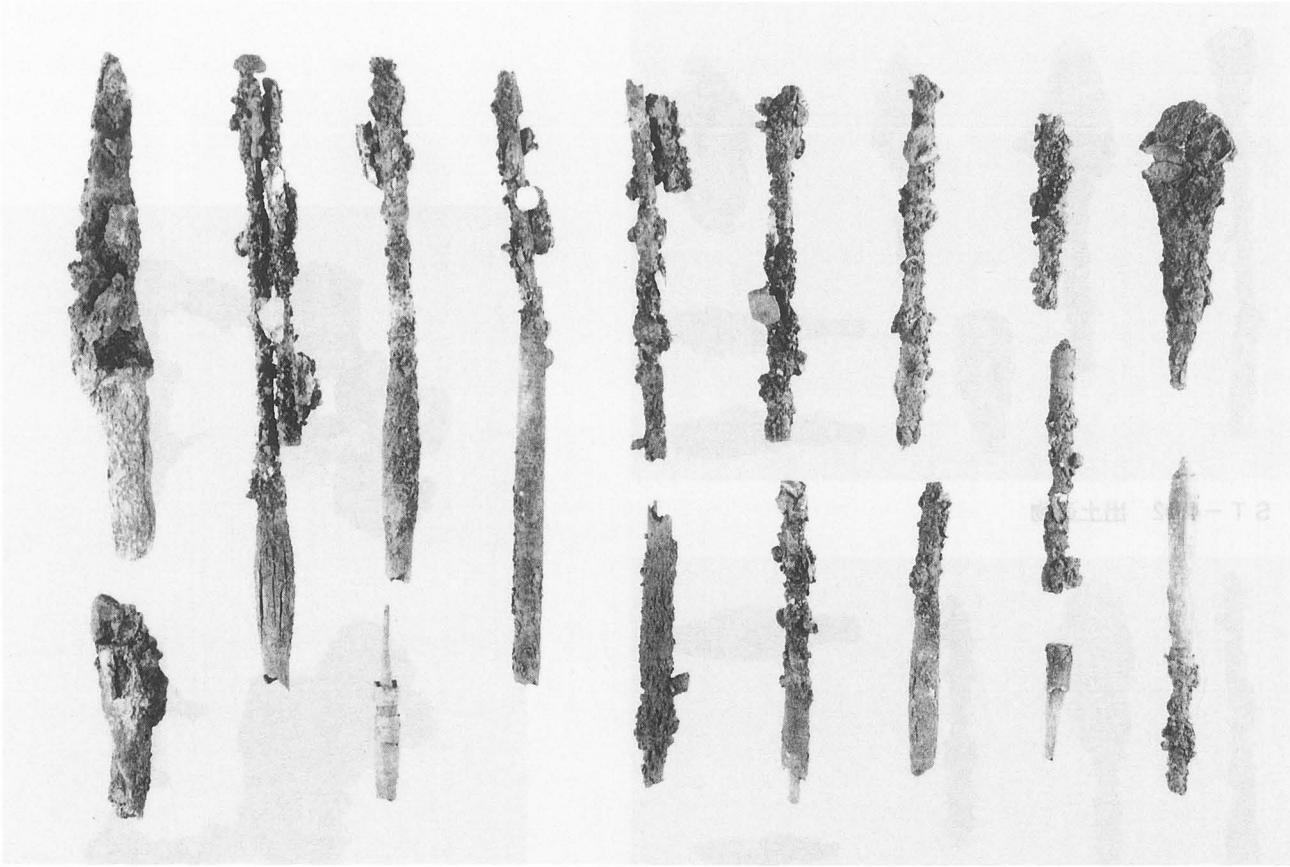


ＳＴ－4003　出土遺物

ＳＴ－4004　出土遺物（1）

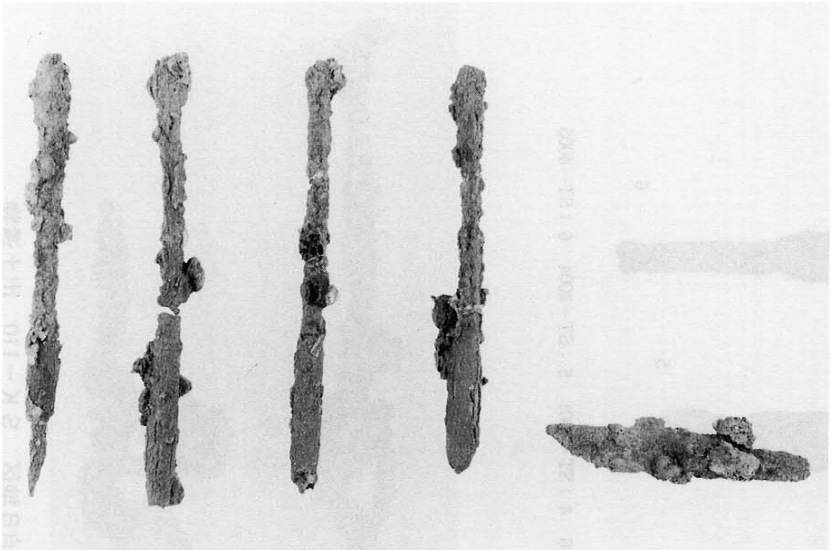


ＳＴ－4004　出土遺物（2）

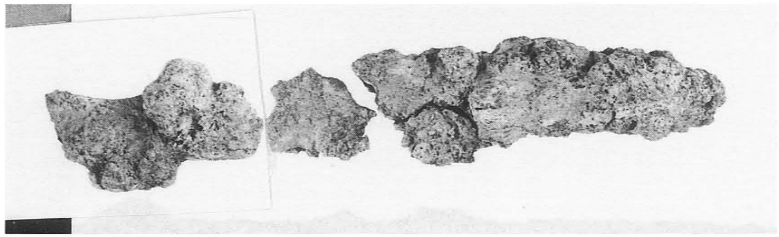


ＳＴ－4005　出土遺物

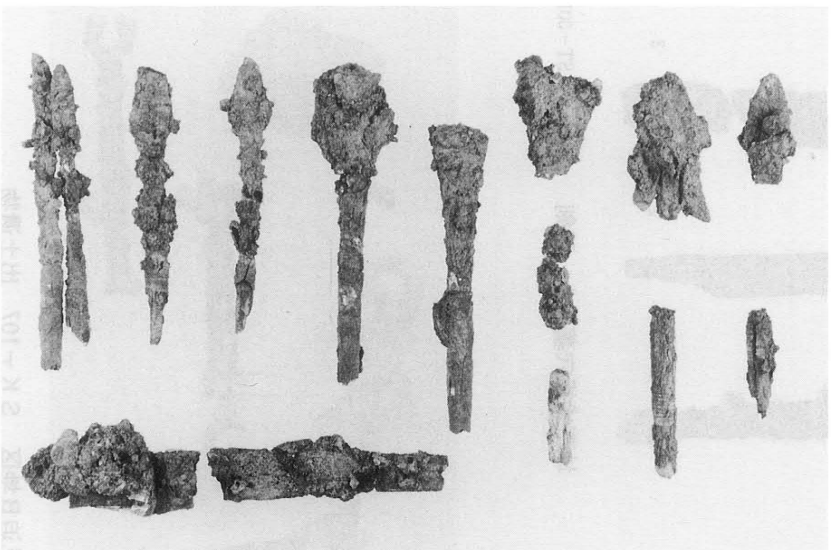
ＳＴ－4006　出土遺物



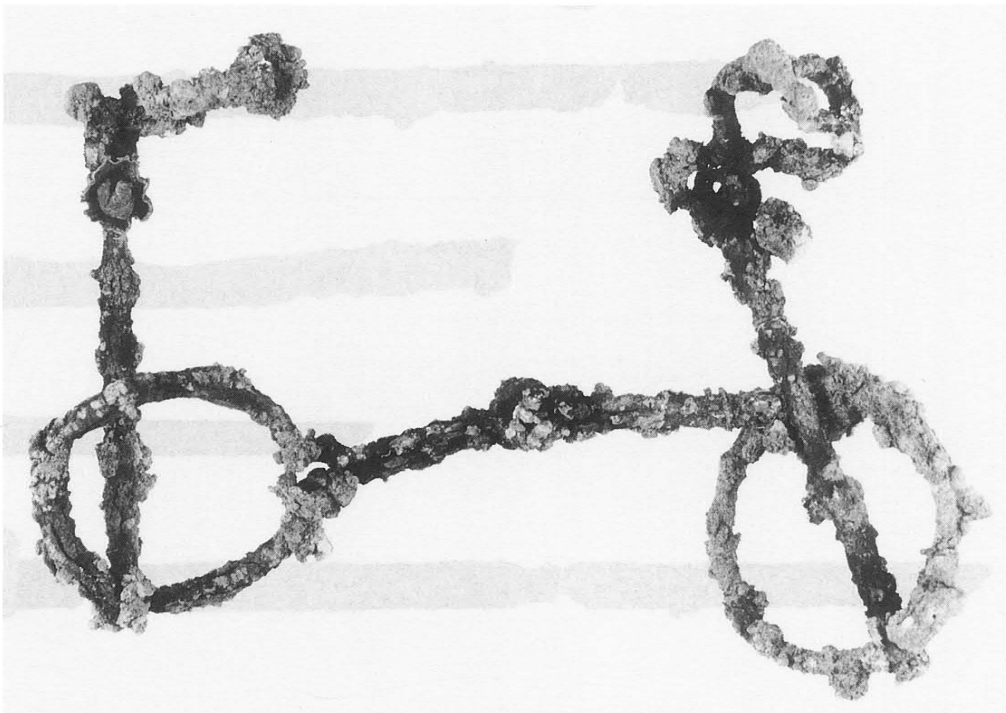
ＳＴ－4008　出土遺物



ＳＴ－4010　出土遺物



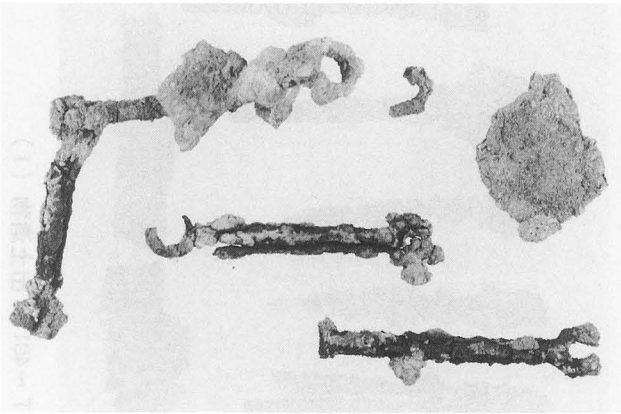
ＳＴ－4011　出土遺物（１）



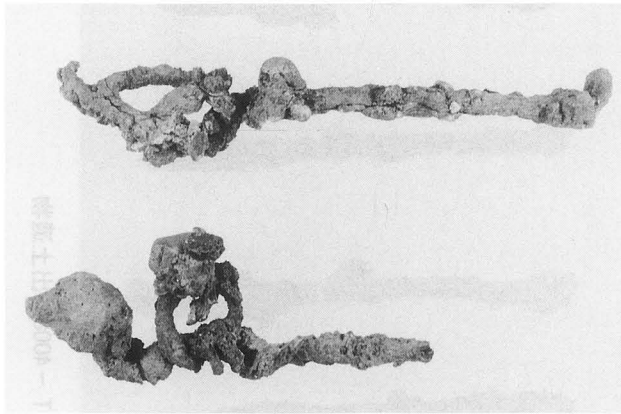
同左　（２）

図版59

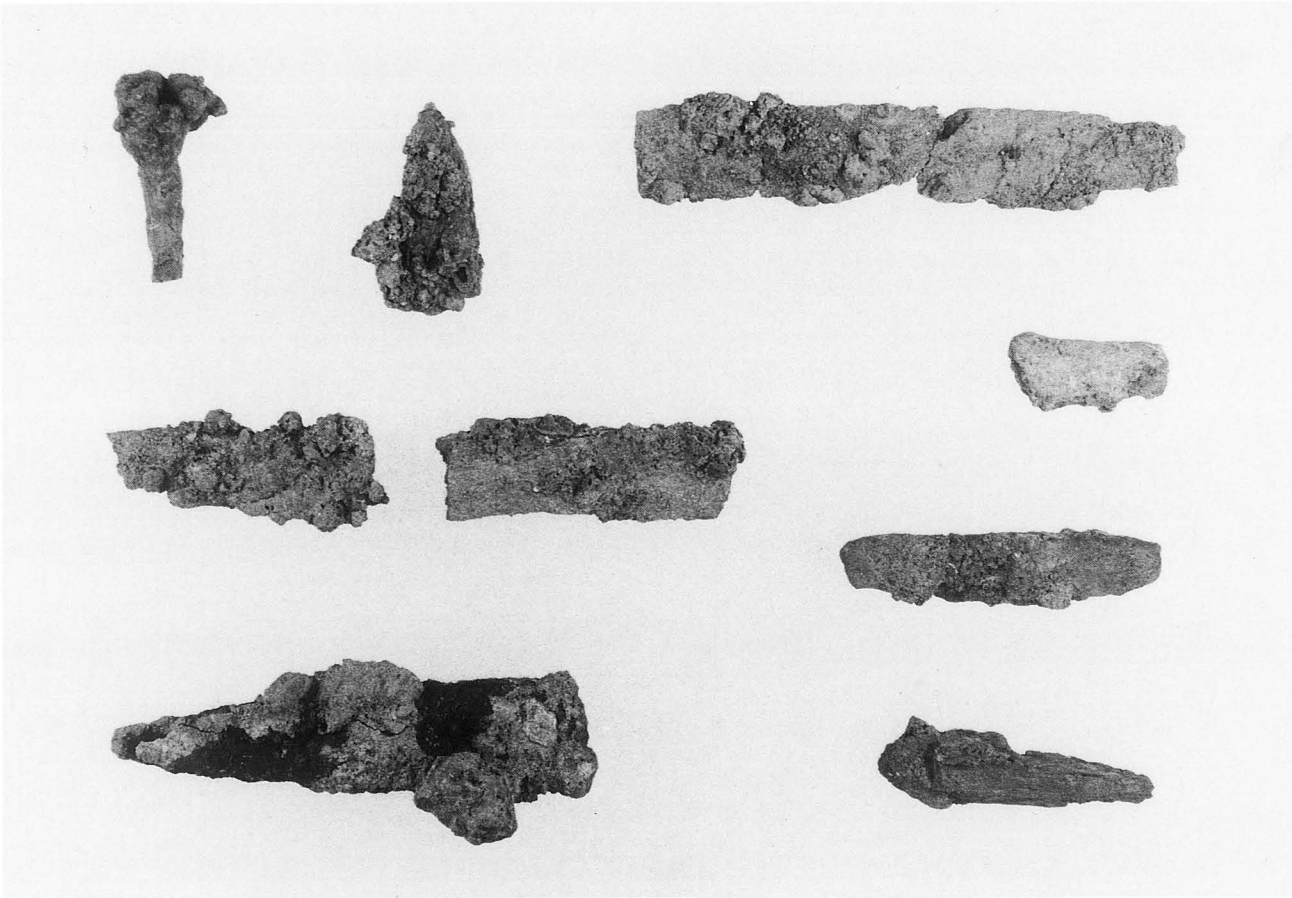
地下式横穴墓出土　刀剣　　1・2：ST－3014　3：ST－3016　4：ST－4001　5：ST－4004　6：ST－4005



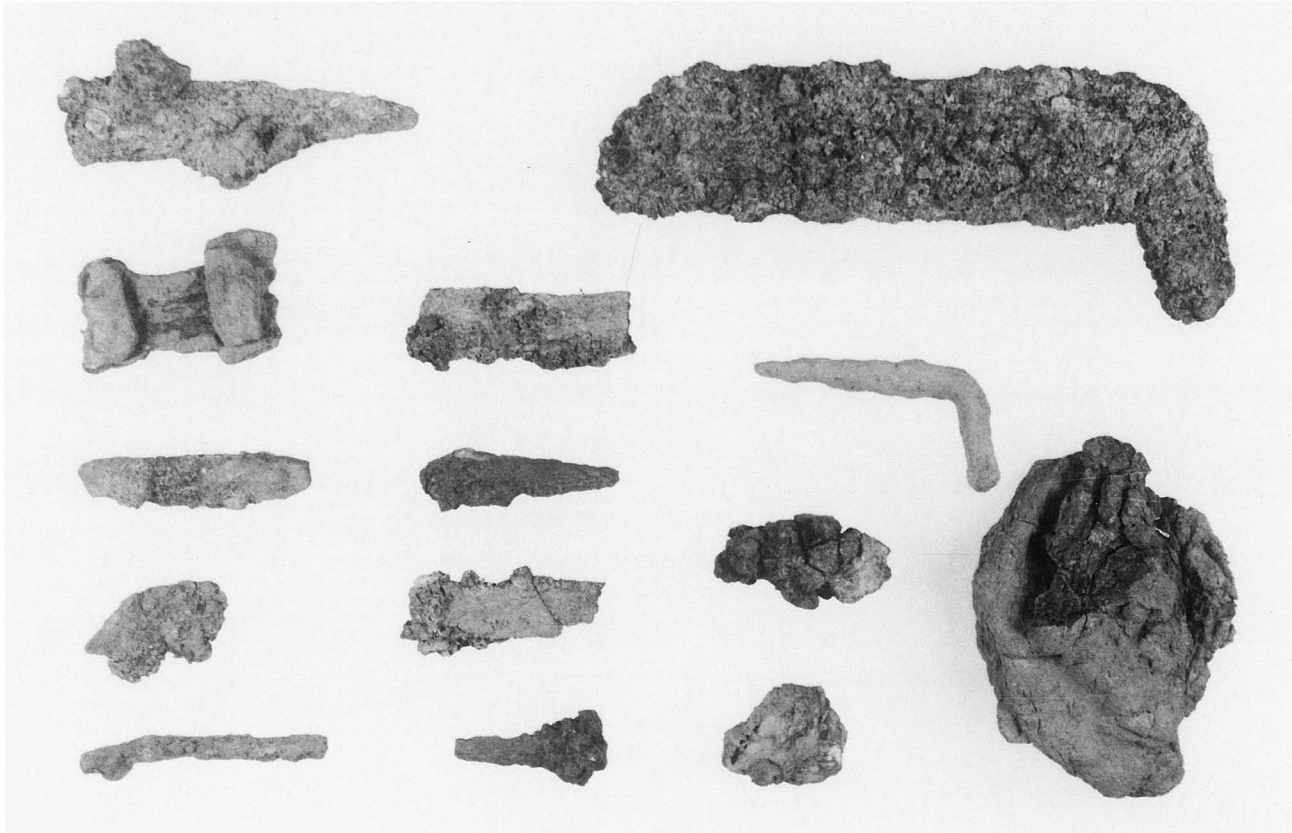
久見迫Ｂ地区　ＳＫ－107　出土遺物



久見迫Ｂ地区　ＳＫ－110　出土遺物



久見迫Ｂ地区　中世以降の遺構出土鉄製品



地主原Ａ地区出土　鉄製品

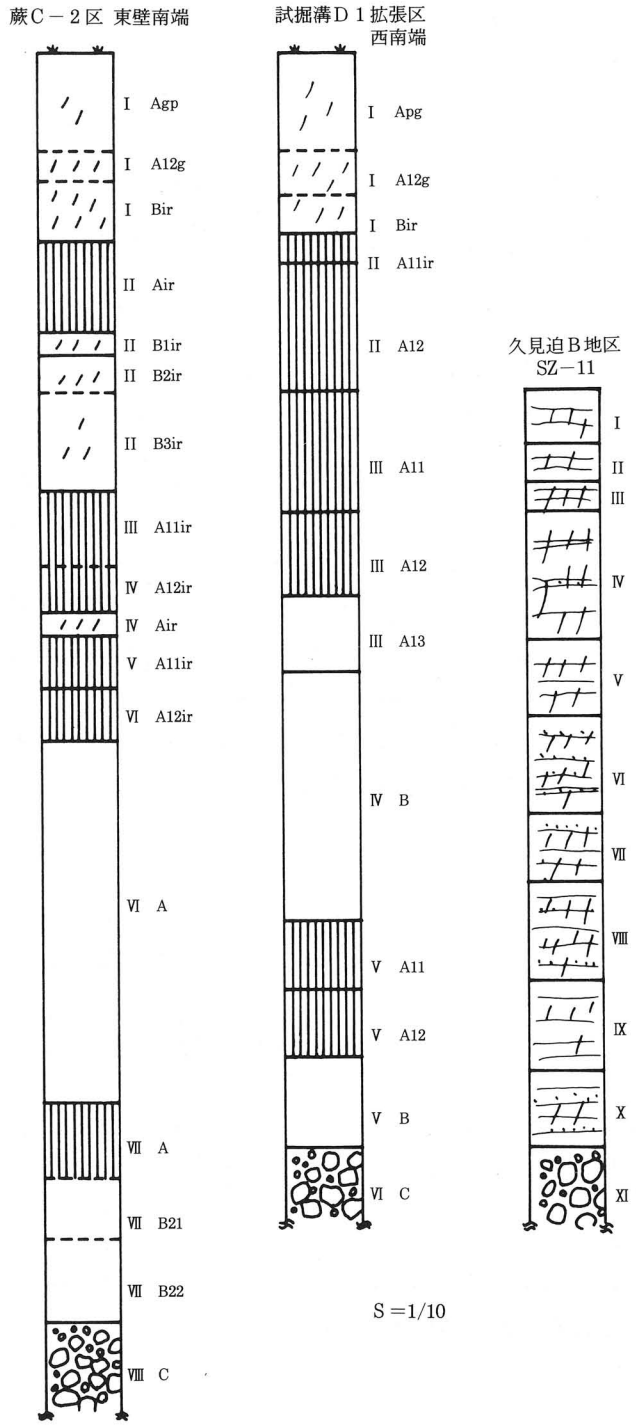
小木原遺跡群の土壌調査

宮崎県総合農業試験場　　有村　玄洋

はじめに

本稿は、本年度の発掘調査において中世～近世の埋没表土と思われる地層が確認された蕨Ｃ地区の東壁南端部と試掘坑南壁南端部と、試掘坑Ｄ１地区拡張区の西南端、さらに近世末の溜池状遺構（ＳＺ－11）の埋土について、土壌分析を実施した結果報告である。

３地点の土壌柱状図



土壌層位の区分　　土壌断面は上から順にＡ層・Ｂ層・Ｃ層の３つの主層位から成立している。

Ａ層　腐植で暗色に汚染され、有機物が無機物と結びついた腐植が多量に集積している層で、この層の質的特徴（土色・構造など）によって、細分するときはＡ11・Ａ12のように記す。また補助記号としてＰ（作土層でplowingの略）、ｇ（斑文の存在）を用いて、水田の作土層はＡｐｇ、また畑の作土層はA_Pで示される。

Ｂ層　母材の風化により生成された遊離鉄によって赤褐色・黄褐色を呈する風化層、あるいはＡ層から洗脱された物質の集積層で、構造が発達していることが多い。B_1層はＡ層とＢ層の漸移層でＢ層の性質が優越している層である。形態的特徴（土色・構造・土性など）により、Ｂ２層、Ｂ2_1層などに細分される。

Ｃ層　風化作用を受けてもろくなっているが、母岩の組織を残している。土壌化はほとんど進行せずに無構造、いくつかの層に区分されるときは上から順にＣ１・Ｃ２のように細分する。

埋没層　現在の土壌下に埋没した土壌については、現在の土壌をI_A、I_B、埋没土をII_A、II_B…以下III_A…IV_A…とする。

1．蕨Ｃ－２区　東壁南端の土壌

層	色調	土性名	発達度・構造	腐植	酸化鉄斑文	礫	細孔隙	可塑性	粘着性	透水性	植物性	ち密度	層界	備考
ⅠApg	黒褐色 10YR3/1	微砂質壌土(ＳｉＬ)	弱度 塊状	富む	糸根状	風化礫	あり	中	中	中	富む	23㎜	漸変	
ⅠA12g	黒褐色 10YR3/1	微砂質壌土(ＳｉＬ)	弱度 塊状	富む	糸根状	風化礫	あり	中	中	中	あり	29㎜ 堅い	漸変	
ⅠBir	黒褐色 10YR3/1	微砂質壌土(ＳｉＬ)	中度 塊状		糸状 富む	風化円礫	あり	中	中	中	あり	28㎜ 堅い	明瞭	
ⅡAir	黒褐色 10YR3/2	壌土（Ｌ）	やや中度 塊状	富む	糸状	風化軽石		中	中	中	あり	25㎜	明瞭	埋没表層
ⅡB1ir	黒褐色 10YR3/2	壌土（Ｌ）		富む	糸状 頗富	風化軽石	あり	中	中	小		31㎜ 堅緻	明瞭	
ⅡB2ir	黒褐色 10YR3/3	壌土（Ｌ）	中度 塊状	富む	糸状 富む		あり	中	中	中		28㎜ 堅い	やや明瞭	
ⅡB3ir	黒褐色 10YR3/2	壌土（Ｌ）	中度 塊状	富む	糸状		あり	中	中	中		27㎜ 堅い	明瞭	埋没表層
ⅢAir	黒色 10YR2/1	埴壌土（ＣＬ）	弱度 塊状	富む	糸状	円礫	あり	中	中	中		24㎜	やや明瞭	埋没表層
ⅣA11ir	黒色 10YR2/1	埴壌土（ＣＬ）	中度 塊状	頗富	糸状	軽石粒	あり	中	中	中		27㎜	漸変	
ⅣA12ir	黒色 10YR2/1	埴壌土（ＣＬ）	中度 塊状		糸状 富む	軽石粒	あり	中	中	中		28㎜ 堅い	明瞭	埋没表層
ⅤAir	黒色 10YR1.7/1	埴壌土（ＣＬ）	弱～中度 塊状	頗富	糸状 富む	軽石粒	富む	中	中	中		24㎜	やや明瞭	軽い 埋没表層
ⅥA	黒色 7.5YR2/1	埴壌土（ＣＬ）	やや中度 塊状	頗富	なし	なし	あり	やや大	やや大	中		23㎜	明瞭	
ⅥB	明褐色 7.5YR5/8	壌土（Ｌ）	中度 塊状	少	なし	下部に軽石粒	富む	やや中	やや中	中		26㎜	明瞭	アカホヤ層
ⅦA	褐色 7.5YR4/3 ＋黒褐色 10YR3/1	モザイク状の軽埴土（Ｌｉｃ）	中度 塊状	富む	なし	なし	富む	大	大	小		26㎜	やや漸変	埋没表層
ⅦB21	褐色 7.5YR4/3	軽埴土（Ｌｉｃ）	弱度 塊状		なし	円礫	なし	大	大	小			漸変	
ⅦB22	褐色 10YR4/4	埴壌土（ＣＬ）	弱度 塊状	あり			やや多い	大	大	中		18㎜	明瞭	
ⅧC	灰色～黄褐色	砂礫												

本断面は、６枚の埋没表層（ⅡＡ、ⅢＡ、ⅣＡ、ⅤＡ、ⅥＡ、ⅦＡ）をもつ黒ボク水田（土壌群：多湿黒ボク土）で、Ⅰ～ⅤＡ層まで参加鉄斑文が認められ、水田化生成作用が行なわれていることを示し、ⅥＡ層以下ではその影響が認められなかった。

2．試掘坑Ｄ１拡張区　西南端の土壌

層	色調	土性名	発達度・構造	腐植	酸化鉄斑文	礫	細孔隙	可塑性	粘着性	透水性	ち密度	層界	備考
ⅠApg	黒褐色 10YR2/2	微砂質壌土（ＳｉＬ）	中度 粒状	やや富む	糸状		あり	中	中	中	16㎜	漸変	
ⅠA12g	黒褐色 10YR2/2	微砂質壌土（ＳｉＬ）	弱度 塊状	やや富む	糸状	なし	あり	中	中	中	21㎜	やや漸変	
ⅠBir	黒色 10YR2/1	微砂質壌土（ＳｉＬ）	中度 塊状	やや富む	糸状やや富む	なし	あり	中	中	中	27㎜	明瞭	
ⅡA11ir	黒色 10YR2/1	壌土（Ｌ）	中度 塊状	富む	糸状	軽石粒	あり	中	中	中	30㎜	明瞭	埋没表層
ⅡA12	黒色 10YR2/1	壌土（Ｌ）	中度 塊状	富む	なし	軽石小粒	あり	中	中	中	27㎜	明瞭	
ⅢA11	黒色 10YR1.7/1	埴壌土（ＣＬ）	中度 塊状	頗富	なし	軽石小粒	多い	中	中	やや小	22㎜	漸変	埋没表層
ⅢA12	黒色 10YR1.7/1	埴壌土（ＣＬ）	中度 塊状	頗富	なし		富む	中	大	やや中	21㎜	明瞭	
ⅢA13	黒褐色 10YR2/2	埴壌土（ＣＬ）	中度 塊状	富む	なし		あり	中	中	中	26㎜ 緻密	明瞭	
ⅣB	明褐 7.5YR5/8	壌土（Ｌ）	弱度 塊状	含む	なし		富む	弱	弱	やや大	25㎜	明瞭	アカホヤ層
ⅤA11	黒褐色 7.5YR3/1 ＋暗褐色 7.5YR3/4	モザイク状の軽埴土（Ｌｉｃ）	中度 塊状	富む	なし	なし	富む	大	大	小	30㎜	漸変	埋没表層
ⅤA12	黒褐色 7.5YR3/1	軽埴土（Ｌｉｃ）		やや富む	なし	円礫	あり	大	大	小	24㎜	漸変	
ⅤB	褐色 7.5YR4/3	微砂質埴壌土（ＳｉｃＬ）	弱～中度 塊状	あり		細円礫	あり	大	大	小	22㎜	明瞭	
ⅥC	灰色～黄褐色	砂礫											

本断面は、３枚の埋没表層（ⅡＡ、ⅢＡ、ⅤＡ）をもつ黒ボク水田（土壌群：多湿黒ボク土）で、蕨Ｃ－２区調査地点とよく類似した土壌断面形態を示し、Ⅰ～ⅡＡ１１層までは酸化鉄斑文が認められ、水田化生成作用が行われていることを示し、ⅡＡ１２層以下には、その影響が認められなかった。

3．久見迫Ｂ地区　ＳＺ－11の土壌

層	色調	土性名	発達度・構造	腐植	酸化鉄斑文	礫	可塑性	粘着性	透水性	ち密度	層界
Ⅰ	オリーブ黒色 5Y3/1	砂壌土（ＳＬ）	弱度 塊状	富む	糸状		中	中	中	18㎜	明瞭
Ⅱ	灰色 5Y4/1	細砂質壌土（ＦＳＬ）	極弱度 塊状	やや富む	糸状		やや中	やや中	やや中	16㎜	明瞭
Ⅲ	灰色 5Y4/1	細砂質壌土（ＦＳＬ）	極弱度 塊状	やや富む	糸状		やや中	やや中	中	18㎜	やや明瞭
Ⅳ	灰色 5Y4/1	微砂質壌土（ＳｉｃＬ）	極弱度 塊状	やや富む	糸状		やや中	やや中	中	20㎜	やや明瞭
Ⅴ	灰色 5Y4/1	微砂質埴壌土（ＳｉｃＬ）	極弱度 塊状	やや富む	糸状、膜状、帯状に富む		中	中	中	17㎜	やや明瞭
Ⅵ	灰色 5Y4/1	微砂質埴壌土（ＳｉｃＬ）	極弱度 塊状	やや富む	膜状、管状に富む		中	中	中	18㎜	明瞭
Ⅶ	灰色 5Y4/1	微砂質埴壌土（ＳｉｃＬ）	極弱度 塊状	やや富む	膜状、管状	風化礫	中	中	中	15㎜	やや明瞭
Ⅷ	灰色 5Y4/1	微砂質埴壌土（ＳｉｃＬ）	極弱度 塊状	やや富む	膜状に富む		中	中	中	17㎜	明瞭
Ⅸ	黒色 N 15/1	微砂質埴土（Ｓｉｃ）＋極砂質埴土（Ｓｉｃ）	極弱度 塊状	頗富	膜状に富む		大	大	小	15㎜	明瞭
Ⅹ	黒色 N 15/0	微砂質埴土（Ｓｉｃ）	極弱度 塊状	頗富	膜状		大	大	小	14㎜	明瞭
Ⅺ	灰色～黄褐色	砂礫									

本断面は、水積性断面で微砂質粘土層／細砂の互層をなし、全体的にかなり湿っている。

小木原遺跡群におけるプラント・オパール分析

宮崎大学　農学部
教授　藤原　宏志

分　析　結　果

1．両地点ともⅢ層より上層で多量のイネが検出される。

2．C－2区の溝状遺構の中からイネが検出され、この溝が稲作に伴う遺構である可能性が高いと判断された。

3．Ⅳ層より下層では、両地点ともイネは認められなかった。

4．Ⅳ′層（アカホヤ）を除く各層でキビ族植物が大量に検出された。キビ族植物には野草の他にヒエ、アワ、キビなどの雑穀類が含まれており、これらの作物が栽培されていた可能性もある。

5．Ⅳ層（アカホヤ）を境にして明らかな植生変化が認められる。すなわち、Ⅳ層より下層ではヨシが検出され、比較的湿潤な環境であったと推定されるのに対しそれより上層ではタケ類が優先種になり乾燥した環境に変化したものと思われる。

この変化がアカホヤの堆積によるものか、あるいは後氷期の温暖化現象とその後の冷涼化現象によるものかは定かでない。

蕨C－2区東壁南端における定量分析　一覧表　　コキバル　12/20 '88　（C－2）

層名	深さ (cm)	層厚 (cm)	GB数／g	植物名	PO／GB	PO数／g	仮比重	PO数／cc	地上部乾重 (t/10a.cm)	種実重 (t/10a.cm)	種実生産総数 (t/10a)
I	0	15	297069	イネ	41/106	114904	0.799	91774	26.982	9.453	141.791
				キビ族	17	47643		38053	46.424	21.081	316.217
				ヨシ	2	5605		4477	3.102		
				タケ	73	204585		163402	7.843		
				ススキ	8	22420		17907	2.220		
IIa－1	15	10	294473	イネ	26/ 73	104881	0.834	87471	25.716	9.009	90.095
				キビ族	10	40339		33643	41.044	18.638	186.380
				ヨシ	2	8068		6729	4.663		
				タケ	35	141186		117749	5.652		
				ススキ	9	36305		30278	3.755		
IIa－2	25	13	296654	イネ	32/104	91278	0.873	79658	23.420	8.205	106.663
				キビ族	9	25672		22404	27.333	12.412	161.353
				ヨシ	2	5705		4979	3.450		
				タケ	38	108393		94594	4,541		
				ススキ	13	37082		32361	4.013		
IIb－1	38	8	296802	イネ	20/119	49883	0.844	42121	12.384	4.338	34.708
				キビ族	10	24941		21061	25.694	11.668	93.340
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	47	117224		98984	4,751		
				ススキ	13	32424		27379	3.395		
IIb－2	46	8	298246	イネ	19/ 64	88542	0.685	60660	17.834	6.248	49.984
				キビ族	11	51261		35119	42.845	19.456	155.647
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	62	288926		197943	9.501		
				ススキ	21	97862		67045	8.314		
III'a	54	10	292947	イネ	8/108	21700	0.654	14194	4.173	1.462	14.620
				キビ族	9	24412		15968	19.481	8.846	88.463
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	66	179023		117099	5.621		
				ススキ	24	65099		42582	5.280		
III'b－2	64	9	302437	イネ	10/102	29651	0.689	20420	6.004	2.103	18.930
				キビ族	17	50406		34715	42.352	19.232	173.088
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	92	272786		187868	9.018		
				ススキ	13	38546		26547	3.292		
SD	73	8	297425	イネ	3/102	8748	0.666	5828	1.713	0.600	4.802
				キビ族	12	34991		23311	28.440	12.914	103.315
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	120	349912		233111	11.189		
				ススキ	11	32075		21369	2.650		
IIIC	81	6	296300	イネ	0/ 97	0	0.407	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	1	3055		1243	1.517	0.689	4.133
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	55	168005		68378	3.282		
				ススキ	27	82475		33567	4.162		
IV'	87	6	296002	イネ	0/105	0	0.367	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	0	0		0	0.000	0.000	0.000
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	27	76115		27942	1.341		
				ススキ	15	42286		15523	1.925		
IV	93	35	294921	イネ	0/ 61	0	0.454	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	0	0		0	0.000	0.000	0.000
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	1	4835		2197	0.105		
				ススキ	0	0		0	0.000		
V	128	8	273031	イネ	0/ 29	0	0.613	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	9	84734		51925	63.348	28.766	230.131
				ヨシ	3	28245		17308	11.995		
				タケ	1	9415		5769	0.277		
				ススキ	15	141223		86541	10.731		
VI	136	5	278430	イネ	0/136	0	0.789	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	2	4095		3231	3.941	1.790	8.949
				ヨシ	7	14331		11307	7,836		
				タケ	4	8189		6461	0.310		
				ススキ	41	83939		66227	8.212		
VII	141	7	286783	イネ	0/128	0	0.971	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	8	17924		17402	21.231	9.641	67.486
				ヨシ	3	6721		6526	4.522		
				タケ	4	8962		8701	0.418		
				ススキ	28	62734		60908	7.553		
VIII	148	－	292910	イネ	1/190	0	1.147	0	0.000	0.000	－
				キビ族	1	1542		1767	2.156	0.979	－
				ヨシ	1	1542		1767	1.225		
				タケ	7	10791		12372	0.594		
				ススキ	9	13875		15907	1.973		

試掘坑Ｄ１拡張区西南端における定量分析　一覧表

層　名	深さ (cm)	層厚 (cm)	GB数／g	植物名	PO／GB	PO数／g	仮比重	PO数／cc	地上部乾重 (t/10a.cm)	種実重 (t/10a.cm)	種実生産総数 (t／10a)
I	0	21	291995	イネ	5/ 84	17381	0.663	11515	3.385	1.186	24.906
				キビ族	13	45190		29938	36.525	16.586	348.301
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	99	344137		227991	10.944		
				ススキ	16	55618		36847	4.569		
II a	21	4	304005	イネ	9/ 63	43429	0.757	32889	9.669	3.388	13.550
				キビ族	4	19302		14617	17.833	8.098	32.392
				ヨシ	1	4825		3654	2.532		
				タケ	127	612836		464100	22.277		
				ススキ	17	82033		62124	7.703		
II b	25	17	317377	イネ	6/ 71	26821	0.700	18780	5.521	1.934	32.883
				キビ族	12	53641		37560	45.823	20.808	353.736
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	286	1278450		895169	42.968		
				ススキ	19	84932		59469	7.374		
III′ a	42	18	311681	イネ	6/ 83	22531	0.450	10137	2.980	1.044	18.794
				キビ族	10	37552		16895	20.611	9.360	168.473
				ヨシ	1	3755		1689	1.171		
				タケ	217	814877		366613	17.597		
				ススキ	17	63838		28721	3.561		
III b	60	11	304552	イネ	0/ 29	0	0.450	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	1	10502		4726	5.765	2.618	28.799
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	170	1785300		803387	38.563		
				ススキ	23	241541		108694	13.478		
IV′	71	4	296153	イネ	1/ 84	3526	0.400	1410	0.415	0.415	0.581
				キビ族	2	7051		2820	3.440	1.562	6.249
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	54	190384		76135	3.654		
				ススキ	11	38782		15509	1.923		
IV′	75	4	297803	イネ	0/ 47	0	0.393	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	0	0		0	0.000	0.000	0.000
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	14	88707		34871	1.674		
				ススキ	6	38017		14945	1.853		
IV	79	35	296536	イネ	0/ 54	0	0.507	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	0	0		0	0.000	0.000	0.000
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	4	21966		11126	0.534		
				ススキ	4	21966		11126	1.380		
V	114	9	299227	イネ	0/101	0	0.530	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	1	2963		1570	1.915	0.870	7.828
				ヨシ	0	0		0	0.000		
				タケ	38	112580		59656	2.864		
				ススキ	7	20739		10989	1.363		
VI	123	8	303311	イネ	0/ 88	0	0.587	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	10	34467		20243	24.696	11.214	89.715
				ヨシ	1	3447		2024	1.403		
				タケ	9	31020		18218	0.874		
				ススキ	16	55148		32388	4.016		
VI b	131	9	296684	イネ	0/110	0	0.731	0	0.000	0.000	0.000
				キビ族	0	0		0	0.000	0.000	0.000
				ヨシ	7	18880		13805	9.567		
				タケ	16	43154		31554	1.515		
				ススキ	34	91702		67053	8.315		
VII	140	—	298879	イネ	0/119	0	0.722	0	0.000	0.000	—
				キビ族	0	0		0	0.000	0.000	—
				ヨシ	3	7535		5439	3.769		
				タケ	14	35162		25384	1.218		
				ススキ	26	65301		47141	5.845		

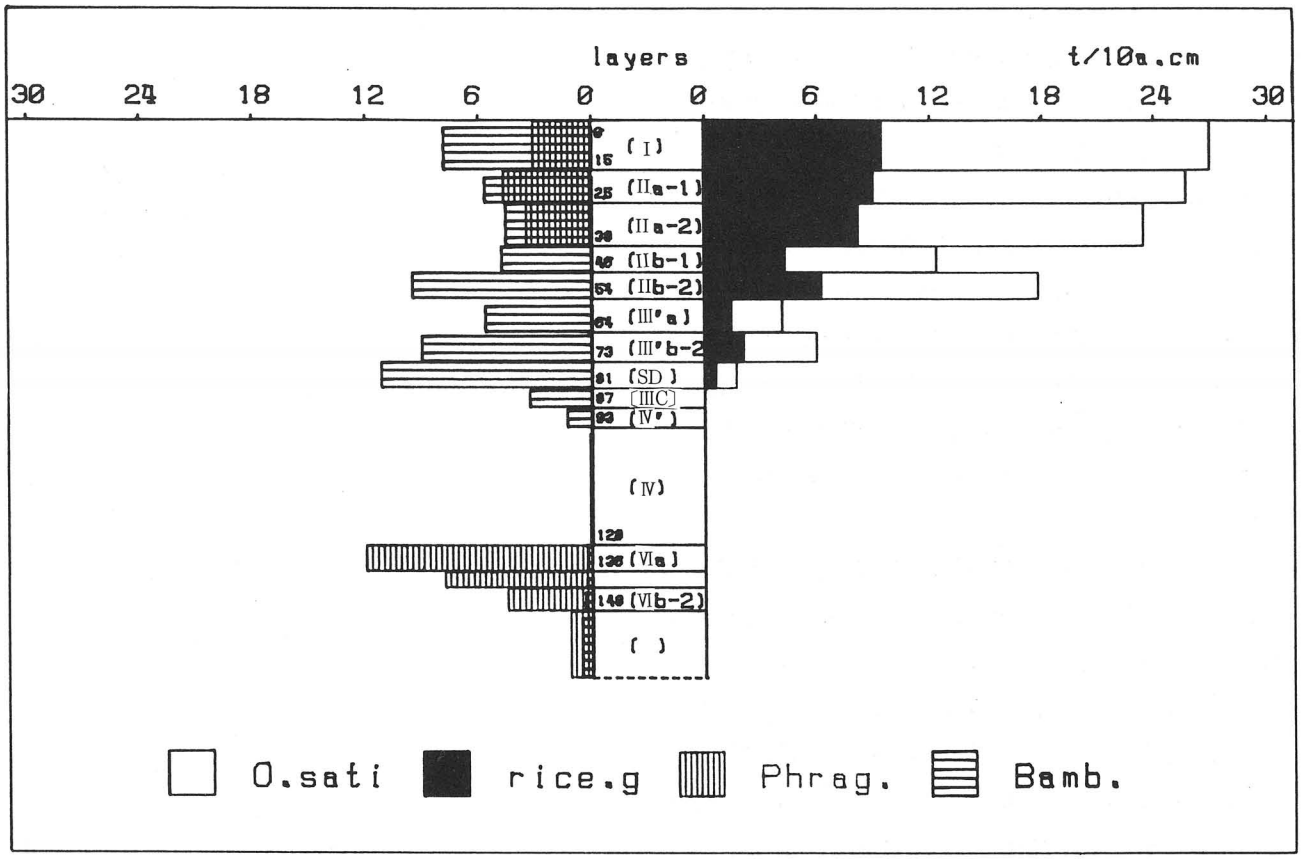
蕨Ｃ－２区東壁南端における定量分析（植物体乾重）

層名	植物体乾重（t/10a.cm）						
	イネ (O.sati.)	イネ籾 (rice g.)	キビ族 (pani.)	キビ族種実 (pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
Ⅰ	26.982	9.453	46.424	21.081	3.102	7.843	2.220
Ⅱa－1	25.716	9.009	41.044	18.638	4.663	5.652	3.755
Ⅱa－2	23.420	8.205	27.333	12.412	3.450	4.541	4.013
Ⅱb－1	12.384	4.338	25.694	11.668	0.000	4.751	3.395
Ⅱb－2	17.834	6.248	42.845	19.456	0.000	9.501	8.314
Ⅲ′a	4.173	1.462	19.481	8.846	0.000	5.621	5.280
Ⅲ′b－2	6.004	2.103	42.352	19.232	0.000	9.018	3.292
SD	1.713	0.600	28.440	12.914	0.000	11.189	2.650
Ⅲc	0.000	0.000	1.517	0.689	0.000	3.282	4.162
Ⅳ′	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	1.341	1.925
Ⅳ	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.105	0.000
Ⅴ	0.000	0.000	63.348	28.766	11.995	0.277	10.731
Ⅵa	0.000	0.000	3.941	1.790	7.836	0.310	8.212
Ⅵb	0.000	0.000	21.231	9.641	4.522	0.418	7.553
Ⅶa	0.000	0.000	2.156	0.979	1.225	0.594	1.973

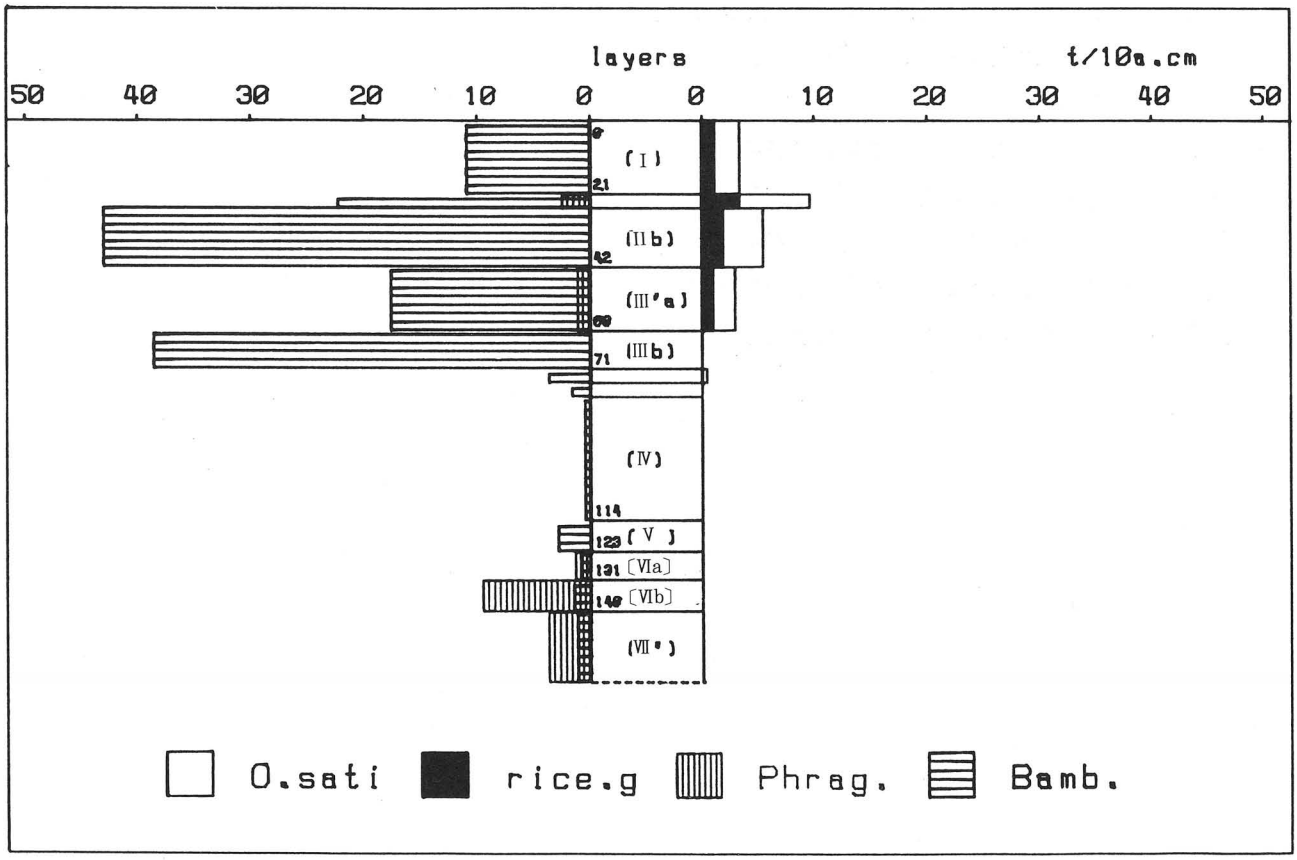
試掘坑Ｄ１拡張区西南端における定量分析（植物体乾重）

層名	植物体乾重（t/10a.cm）						
	イネ (O.sati.)	イネ籾 (rice g.)	キビ族 (pani.)	キビ族種実 (pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
Ⅰ	3.385	1.186	36.525	16.686	0.000	10.944	4.569
Ⅱa	9.669	3.388	17.833	8.098	2.532	22.277	7.703
Ⅱb	5.521	1.934	45.823	20.808	0.000	42.968	7.374
Ⅲ′a	2.980	1.044	20.611	9.360	1.171	17.597	3.561
Ⅲb	0.000	0.000	5.765	2.618	0.000	38.563	13.478
Ⅳ′	0.415	0.145	3.440	1.562	0.000	3.654	1.923
Ⅳ″	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	1.674	1.853
Ⅳ	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.534	1.380
Ⅴ	0.000	0.000	1.905	0.870	0.000	2.864	1.363
Ⅳ	0.000	0.000	24.696	11.214	1.403	0.874	4.016
Ⅳb	0.000	0.000	0.000	0.000	9.567	1.515	8.315
Ⅶ′	0.000	0.000	0.000	0.000	3.769	1.218	5.845

蕨Ｃ－２区東壁南端の土壌における植物乾物量



試掘坑Ｄ１拡張区西南端の土壌における植物乾物量



補足）　グラフの見方について

1．1ayers：採取地点の土層模式図。（　）内の数字は土層番号、左隅の小数字は表層からの深さをcmで表したもの。

2．O.sati：Oryza　sativa。栽培稲の地上乾物重

rice.g：Oryza　sativaの穎果（籾）乾物重

Phrag：Phragmites communis。ヨシの地上部乾物重

Bamb：Bambsaceae。タケ亜科の地上部乾物重

各植物体重はそれぞれの植物により異なる珪酸体密度係数と土壌中から検出された各植物に由来するプラント・オパール密度をもとに算出されたものである。

3．土柱模式図の右側に栽培植物、同左側に野・雑草を示している。単位t/10a•cmは、その土層の厚さ1cm面積10a(1,000m²)に包含されるプラント・オパールの数から推定した各植物の乾物量をt（トン.1×10³kg）で表したものである。例えば、その土層が10cmの厚みであると、グラフに示された値に10を乗じた量の植物体がその土層の堆積期間中に生産されたことになる。生産量が年間生産量ではないことに注意。

4．水田址が埋蔵されている土層では、O．satiの値がピークを形成する場合が多い。土層の堆積状況により一概にいえないが、水田址の層位はこのピークと一致するのが通例である。

5．Phrag（ヨシ）、Bamb（タケ）の乾物量変遷は、その地点における土壌水分状況の時代的変遷を知るうえに役立つ。ヨシは比較的水分の多い湿った環境に生育し、タケ（ササ）は比較的乾燥した環境下で繁茂する。両者の消長をみると、その地点の乾燥変化を推定できる。

ROKUBUICHI SITE

六部市遺跡

例　　言

1　発掘調査は平成２年12月４日から平成３年２月８日まで行った。

2　発掘調査は県文化課主事東憲章が担当し、図面の作成については、東の他に作業員の援助を受けた。写真の撮影は東が行った。

3　遺物、図面の整理は、宮崎県総合博物館埋蔵文化財センターで行い、遺物の実測・拓本・製図等は東のほか整理補助員の協力を得た。

4　本文中で使用する略号は、以下のとおりである。

　　ＳＡ・・・竪穴状遺構　ＳＢ・・・掘建柱建物

　　ＳＤ・・・溝状遺構　　ＳＫ・・・土坑、土壙墓

5　図中の方位は磁北である。レベルは海抜絶対高である。

6　土器の色調は新版「標準土色帖」に拠った。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の概要
　1　調査の経過…… 167
　2　層序…… 167
Ⅱ　調査の結果
　1　A区の遺構と遺物…… 167
　(1)　竪穴状遺構…… 167
　(2)　掘建柱建物…… 169
　(3)　土坑・土壙墓…… 178
　(4)　溝状遺構…… 181
　(5)　その他の遺物…… 188
　2　B区の遺構と遺物…… 188
　(1)　掘建柱建物…… 188
　(2)　土坑・土壙墓…… 188
　(3)　溝状遺構…… 193
　(4)　その他の遺物…… 193
　3　C区の遺構と遺物…… 193
Ⅲ　まとめ
　1　遺物について…… 193
　2　遺構について…… 194
おわりに ― 遺跡の名称について ―…… 195

表　目　次

第1表　出土土器観察表(1)…… 197
第2表　出土土器観察表(2)…… 198
第3表　出土土器観察表(3)…… 199
第4表　竪穴状遺構一覧表…… 200
第5表　掘建柱建物一覧表…… 200

挿　図　目　次

第１図　六部市遺跡周辺地形図…… 168
第２図　六部市遺跡Ａ区遺構分布図…… 170
第３図　六部市遺跡Ｂ区遺構分布図……171～172
第４図　六部市遺跡Ｃ区遺構分布図…… 173
第５図　ＳＡ１～４実測図…… 174
第６図　ＳＡ５実測図……175～176
第７図　ＳＡ６・７実測図…… 177
第８図　ＳＡ８・12実測図…… 178
第９図　ＳＡ９・10・11・13・14実測図…… 179
第10図　ＳＡ15・16実測図…… 180
第11図　ＳＤ２土層断面実測図…… 180
第12図　ＳＢ１・２実測図…… 181
第13図　ＳＫ１～６実測図…… 182
第14図　出土遺物実測図(1)…… 183
第15図　出土遺物実測図(2)…… 184
第16図　出土遺物実測図(3)…… 185
第17図　出土遺物実測図(4)…… 186
第18図　出土遺物実測図(5)…… 187
第19図　ＳＢ３～７実測図…… 189
第20図　ＳＫ７～９、ＳＤ８実測図…… 190
第21図　出土遺物実測図(6)…… 191
第22図　ＳＢ８・９実測図…… 192
第23図　土師質土器変遷概念図…… 194

六部市遺跡の調査

I　調査の概要

1　調査の経過

六部市遺跡は、えびの市大字上江字六部市に所在する。ほ場整備事業により、地下遺構への影響が予想される地点A～C区について発掘調査を行った（第1図）。

調査は、重機により耕作土及び水田基盤層を除去し、遺物包含層である黒色土を掘り下げ、アカホヤ火山灰層上面で遺構確認を行った。

A区（第2図）では、竪穴状遺構16基、溝状遺構7条、土坑7基（土壙墓を含む）、掘建柱建物2棟、その他多数のピットを検出した。竪穴状遺構や溝状遺構、包含層内からは、中近世陶磁器を中心に、土師質土器、銭貨、煙管等が出土している。

B区（第3図）では、掘建柱建物5棟、土坑3基（土壙墓を含む）、溝状遺構8条、ピット多数を検出した。中近世陶磁器や土師質土器が出土しているが、縄文土器数点、打製石鏃1点が包含層から出土している。

C区（第4図）では、掘建柱建物2棟、溝状遺構1条、ピットが検出されたが、遺物量は少なくわずかに縄文土器片、陶磁器片が出土したに過ぎない。

2　層序

遺跡の現況は水田であり、耕作土（第1層）下に酸化第2鉄の凝集層（第2層、水田基盤層）が見られる。第3層の黒色土が遺物包含層となるが、部分的に残存が悪く、第2層下にアカホヤ火山灰層（第4層）が見られる地点も見られた。以下、黒褐色土、褐色土と続き、表土下約1～1.2 mで段丘基盤の砂礫層となる。

II　調査の結果

1　A区の遺構と遺物

(1)　竪穴状遺構

ＳＡ1～4（第5図）

ＳＡ1は、2.25×2.45mの方形竪穴である。検出面からの深さは約20cmで、10基の柱穴を持つ。埋土は2層に分けたが、基本的には人為的な一括埋め戻しの可能性が高い。遺物は図示しなかったが、近世陶磁器の小片が埋土中位から数点出土している。

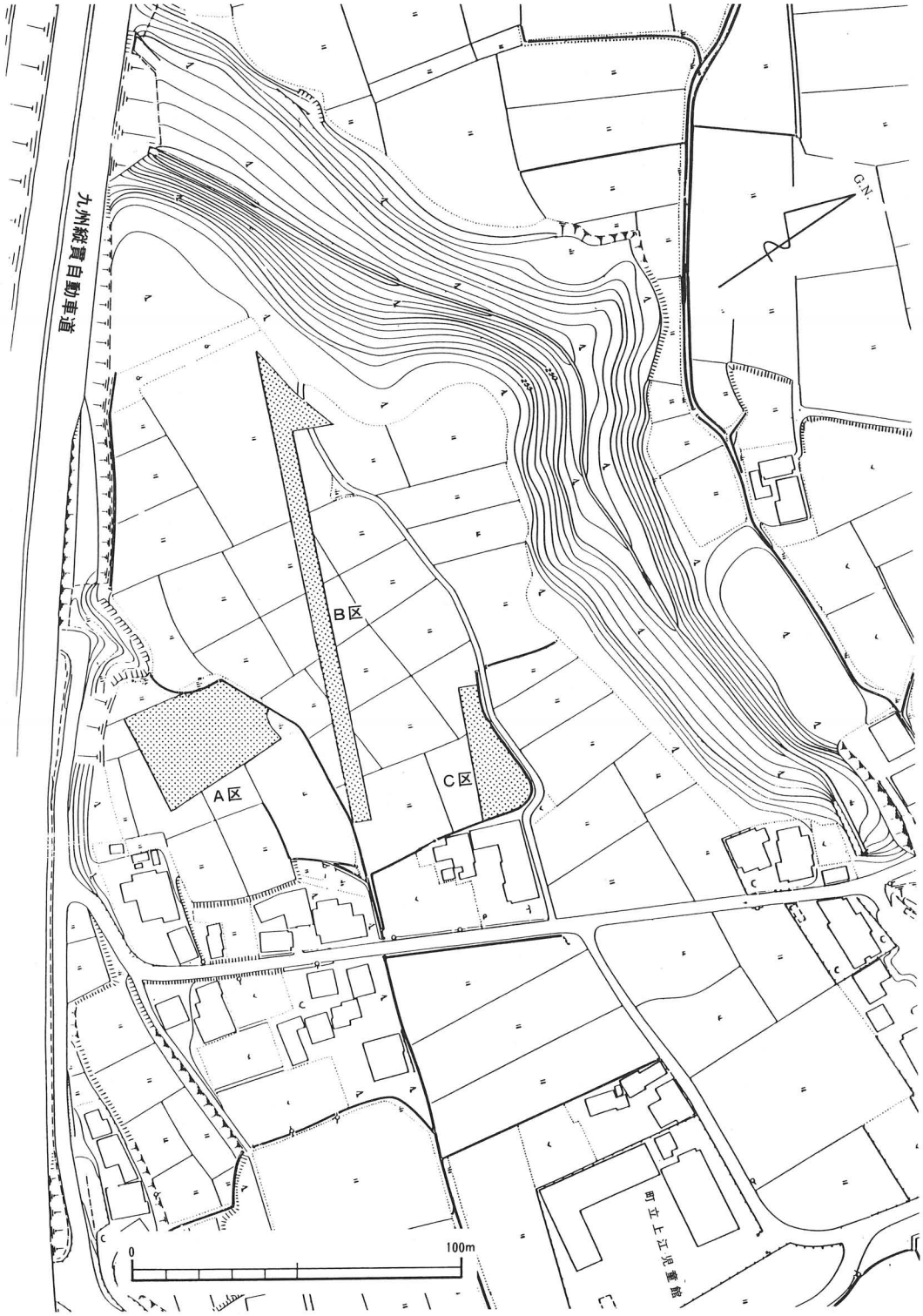
ＳＡ2は、2.5 m四方の方形竪穴で、東壁に入口状の張り出しを持つ。検出面からの深さは約35cmで、11基の柱穴を持つ。南壁側との対応関係をみると、北壁側に更にもう1基の柱穴の存在が想定されたが検出されなかった。ＳＡ3・4と切り合いを見せるが、土層の観察による前後関係は、4→2→3の順となる。埋土は、アカホヤ火山灰の混入の差で3層に分けたが、人為的な埋め戻しの可能性が高い。

ＳＡ3は、柱穴を持たない方形竪穴で1.45×1.80m、深さ約80cmを計る。砂礫層を掘り込んでおり、床面には淡褐色粘土が薄く敷かれていた。床直上から暗赤褐色を呈する薄い膜状物が若干検出された。漆器の木質部分が腐食し、漆膜のみが残存した可能性が高い。埋土は4層に分かれるが、各層ともに層厚が厚く、比較的短期間の内に埋没したと推定される。なお、埋土2、3層に見られた白色軽石は、霧島新燃岳噴出（1717年噴出）のものと思われる。埋土上層から数点の遺物が出土している。1は陶器碗で、口径9.9cm 、器高5.9cm 、口唇部と見込み（蛇の目）に釉剝ぎが施される。畳付は露胎である。2は在地系陶器の土瓶である。

ＳＡ4は、ＳＡ3に同じく柱穴を持たない方形竪穴で1.70×1.80m、深さ約40cmを計る。砂礫層直上を床としている。埋土は、そのしまり具合で2層に分けたが、基本的には一括の埋め戻しの可能性が高い。埋土中位で遺物が出土している。3は薩摩の甕で、内側に折り返した口縁部上面には貝殻の目跡が残る。胴上部には、指による押圧刻みのある2条の貼り付け突帯が見られる。4は甕の底部である。焼成時の温度差のため、器壁の中心から内外の色調が著しく異なる。5、6は煙管である。ともに左側面に銅板の繋ぎ目を観察できる。6には内部に竹管が残存している。

ＳＡ5（第6図）

ＳＡ5は、約5×7mと検出された竪穴状遺構の中で最大の規模を持つ。検出面からの深さは約45cmである。不整長方形で、西壁に入口状の張り出しを持つ。壁際に数基の柱穴を検出したが、全周に巡らず正確な数を確定し得ない。北西隅に投棄を思わせる礫の集積が見られた。若干の遺物が、埋土下位から出土している。7～9は中国産の青磁である。7は碗で、体部に蓮弁文が描かれる。8、9は稜花皿である。15c.半ば～16c.の年代が与えられる。10は陶器のこね鉢底部である。内面には5本単位の櫛目が放射状に施される。11は炮烙の把手であろう。



第１図　六部市遺跡周辺地形図（S＝1/2,000）

下面に厚く煤が付着している。12、13は煙管である。12には竹管が残存する。左側面に銅板の繋ぎ目が見られる。14は石臼である。礫の集積内に見られた。裏面に放射状の線刻がある。

ＳＡ６・ＳＡ７（第７図）

ＳＡ６は、2.50×2.55mの方形竪穴で12基の小ピットを持つ。深さは約60cmで、床面中央に白色粘土が薄く敷かれていた。埋土の観察から、人為的な埋め戻しの可能性が指摘される。遺物は、床から浮いた状態で埋土下位から中位に出土した。15は土師質の皿で、口径11.2cm、器高2.5cm を計る。内面に油痕が見られることから、灯火皿であろうと思われる。糸切り底である。16は中国産青磁碗で、剣先蓮弁文が見られる。15c.後半～16c.半ばのものである。17～19は中国産染付碗で、いずれも16c.後半の年代が与えられる。17は福建広東系、19は景徳鎮産である。20は在地系のすり鉢で、肥厚させた口縁は四角く歪められ、その一角に口が設けてある。内面には７～８本単位の櫛目が斜めに施されている。

ＳＡ７は、2.05×2.10mの方形竪穴で７基のピットを持つ。南壁に張り出しが見られ、その位置のピットを欠いている。検出面からの深さは50cmで、竪穴内には床面から検出面の高さまで、拳大から人頭大の礫が投棄されていた。床面周辺部は粘土の張り床が約５cmの厚みで施され、一段下がった中央部には竹類と思われる炭化物が一面に見られた。編んだ形跡は観察されなかったものの、一面に敷きつめる様に方向をそろえられていた。

ＳＡ８・ＳＡ12（第８図）

ＳＡ８は、10基のピットを持つ方形竪穴で、2.85×3.10m、検出面からの深さは40cmを計る。ＳＤ６が北西隅に取りつく。土層の観察からはＳＡ８がＳＤ６を切っている。遺物が埋土上位から出土している。21は陶器碗で、平坦な底部から体部下位で屈曲し直線的に立ち上がる。22は中国産染付皿である。体部外面には芭蕉葉文、見込みには鳥（鶴か）と松が描かれる。底部は碁笥底である。23は陶器皿で、体部下半は露胎である。

ＳＡ12は、ＳＡ８に隣接する位置に検出された。1.75×2.10mの方形竪穴で、コーナーに４基のピットを持つ。検出面からの深さは10cmと非常に浅く、アカホヤ火山灰層中で床となる。埋土は黒色土の単一層で、遺物等は見られなかった。

ＳＡ９～11・ＳＡ13・ＳＡ14（第９図）

ＳＡ９・10・11は、いずれも柱穴を持たない方形竪穴で、切り合った状態で検出された。ＳＡ９は推定で一辺２m、深さ80cm、ＳＡ10は一辺1.70m以上、深さ70cm、ＳＡ11は一辺1.80m、深さ40cmの規模を持つ。土層の観察による前後関係は、11→10→９の順である。それぞれに埋土上位から若干の遺物出土が見られた。ＳＡ９からは、中国産青磁が出土した。24は端反りの碗である。14c.～15c.のものである。25は盤で、体部内面に蓮弁状の面取りが施される。14c.の年代が与えられる。ＳＡ10からは、炮烙（26）と陶器蓋（27）が出土している。ＳＡ11からは、陶器、肥前系染付が出土した。28は壺の口縁である。器壁は薄く、わずかに立ち上がる直口縁である。29は陶器皿で、浅黄色の器壁は京焼き風であるが、肥前の窯によるものと思われる。30、31は肥前系の碗で、18c.後半のものである。

ＳＡ13は、長方形土坑が隣接したかのような形状であるが、埋土の観察からは分割が困難であったため同一遺構として考えておきたい。北壁に張り出しをもつ方形竪穴で1.95×2.00m、検出面からの深さは10cmを計る。柱穴は３基見られたが、いずれも当遺構には無関係のものと思われる。やや小振りの肥前系染付碗（32）が出土している。18c.後半のものである。

ＳＡ14は、1.95×2.30mの方形竪穴で、検出面からの深さは30cmを計る。南壁に張り出しを持ち、柱穴は見られない。

ＳＡ15・ＳＡ16（第10図）

ＳＡ15は、短径2.40m、長径2.90mの不整円形の竪穴であるが、検出面からの深さは10cm以下と遺構の残存は悪く、下端のラインを重視するならば方形であった可能性も考えられる。

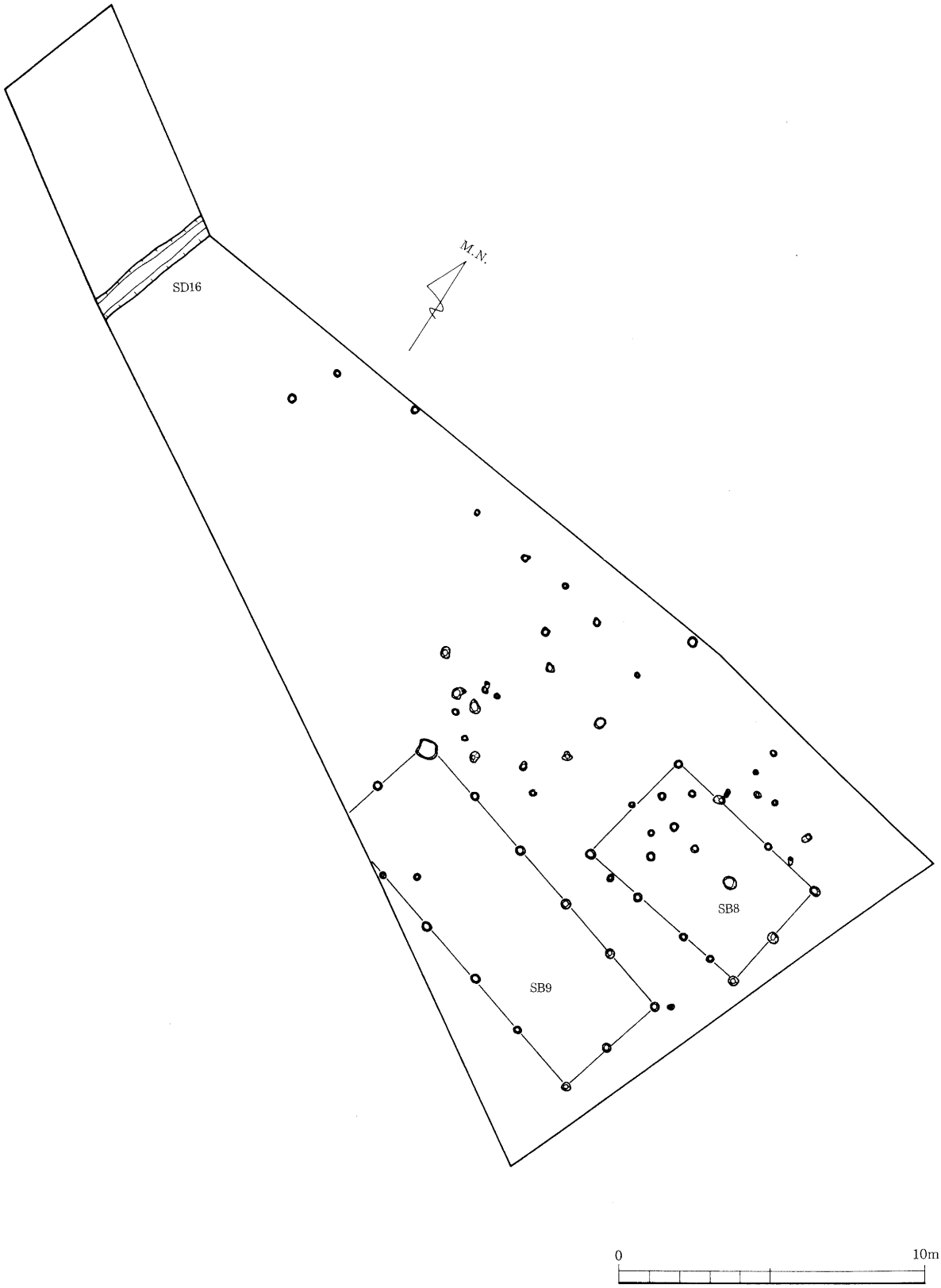
ＳＡ16は、溝状遺構ＳＤ５によって切られているが、推定径約4.50mの円形竪穴と思われる。検出面からの深さは10cm以下である。南側には壁帯溝が見られる。柱穴は検出されていない。検出面から土師器が１点出土している。33は高坏の坏部で、内面のみに稜を持つ。古墳時代前期に比定されよう。

(2) 掘建柱建物　ＳＢ１・ＳＢ２（第11図）

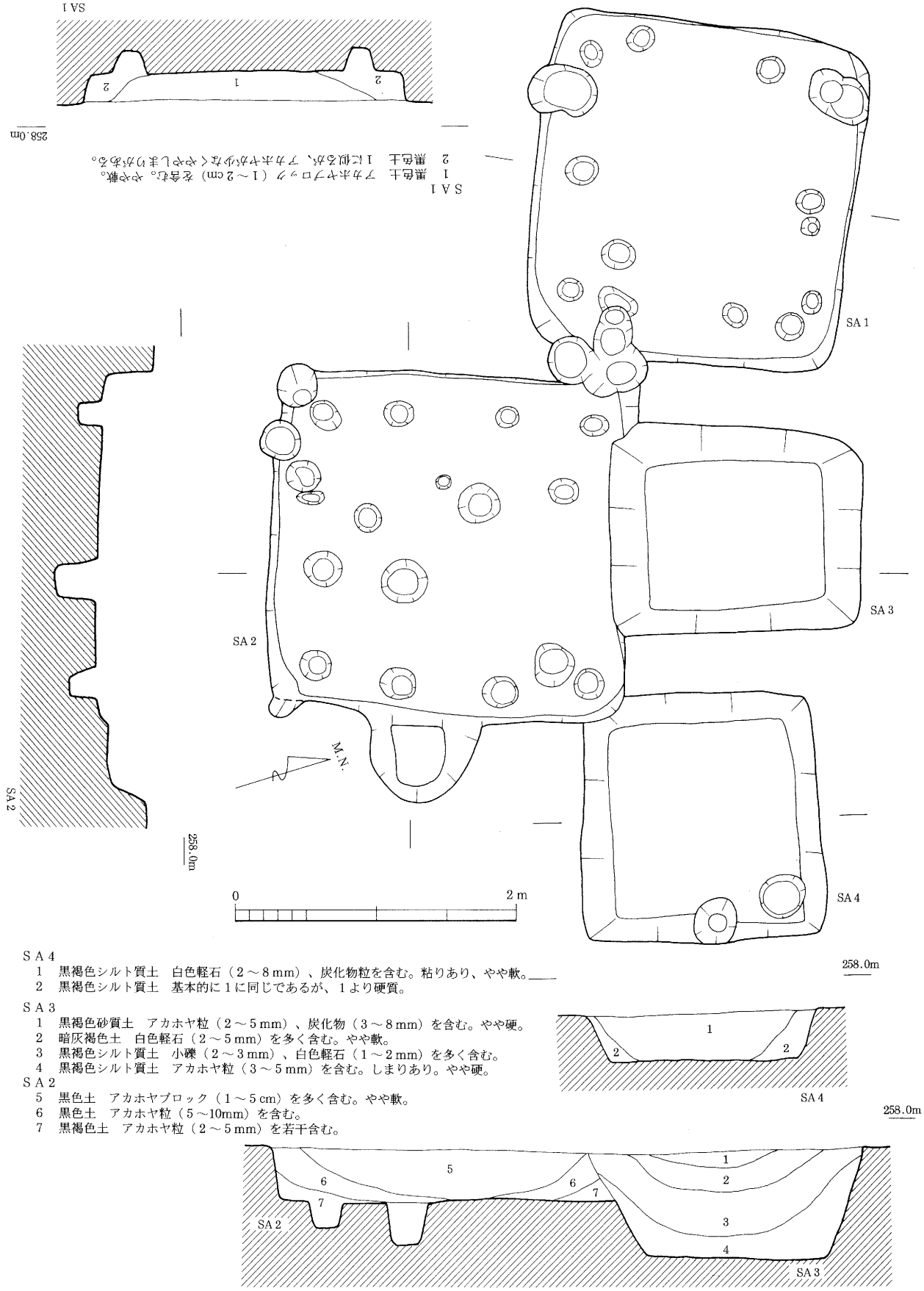
ＳＢ１は、２×３間の掘建柱建物で、ＳＤ２・４・５の交わる地点に位置する。柱穴の１基をＳＤ２により欠っしている。ＳＤ２検出の段階で、埋土を掘り抜くピット

第２図　六部市遺跡Ａ区遺構分布図（Ｓ＝1/200）

第３図　六部市遺跡Ｂ区遺構分布図（Ｓ＝1/200）



第４図　六部市遺跡Ｃ区遺構分布図（Ｓ＝1/200）



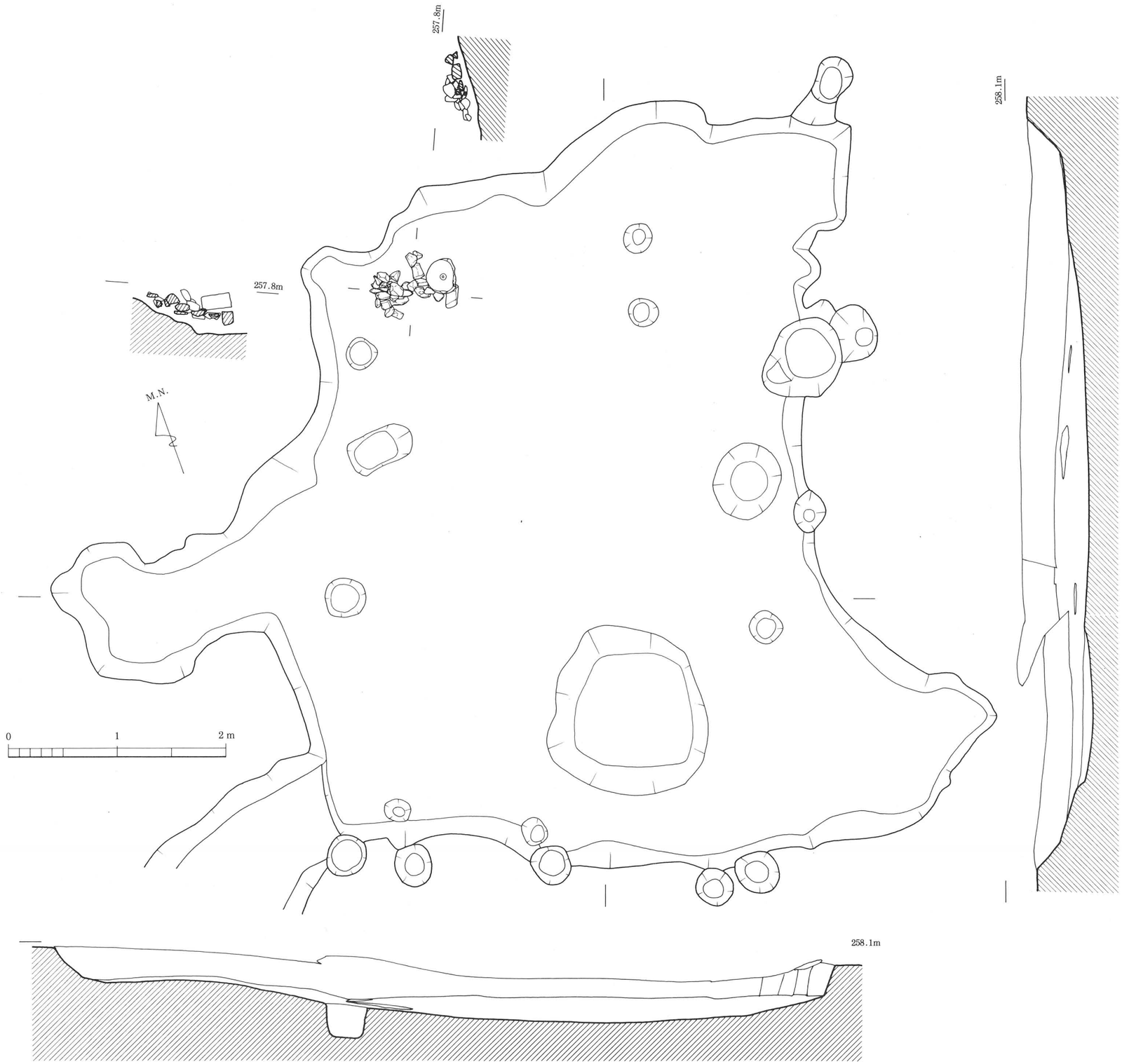
SA 1
1　黒色土　アカホヤブロック（1～2cm）を含む。やや軟。
2　黒色土　1に似るが、アカホヤが少なくややしまりがある。

SA 4
1　黒褐色シルト質土　白色軽石（2～8mm）、炭化物粒を含む。粘りあり、やや軟。
2　黒褐色シルト質土　基本的に1に同じであるが、1より硬質。

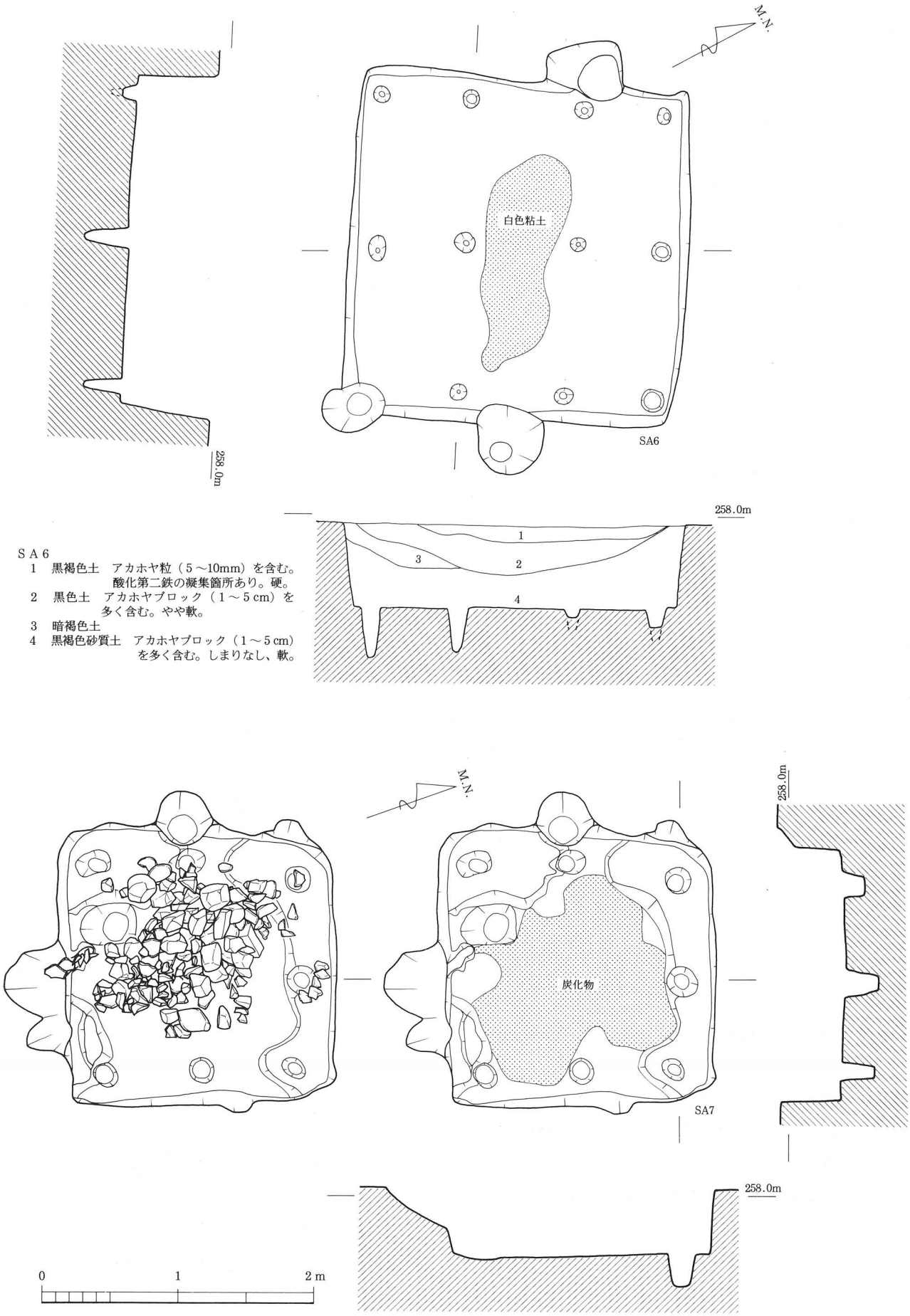
SA 3
1　黒褐色砂質土　アカホヤ粒（2～5mm）、炭化物（3～8mm）を含む。やや硬。
2　暗灰褐色土　白色軽石（2～5mm）を多く含む。やや軟。
3　黒褐色シルト質土　小礫（2～3mm）、白色軽石（1～2mm）を多く含む。
4　黒褐色シルト質土　アカホヤ粒（3～5mm）を含む。しまりあり。やや硬。

SA 2
5　黒色土　アカホヤブロック（1～5cm）を多く含む。やや軟。
6　黒色土　アカホヤ粒（5～10mm）を含む。
7　黒褐色土　アカホヤ粒（2～5mm）を若干含む。

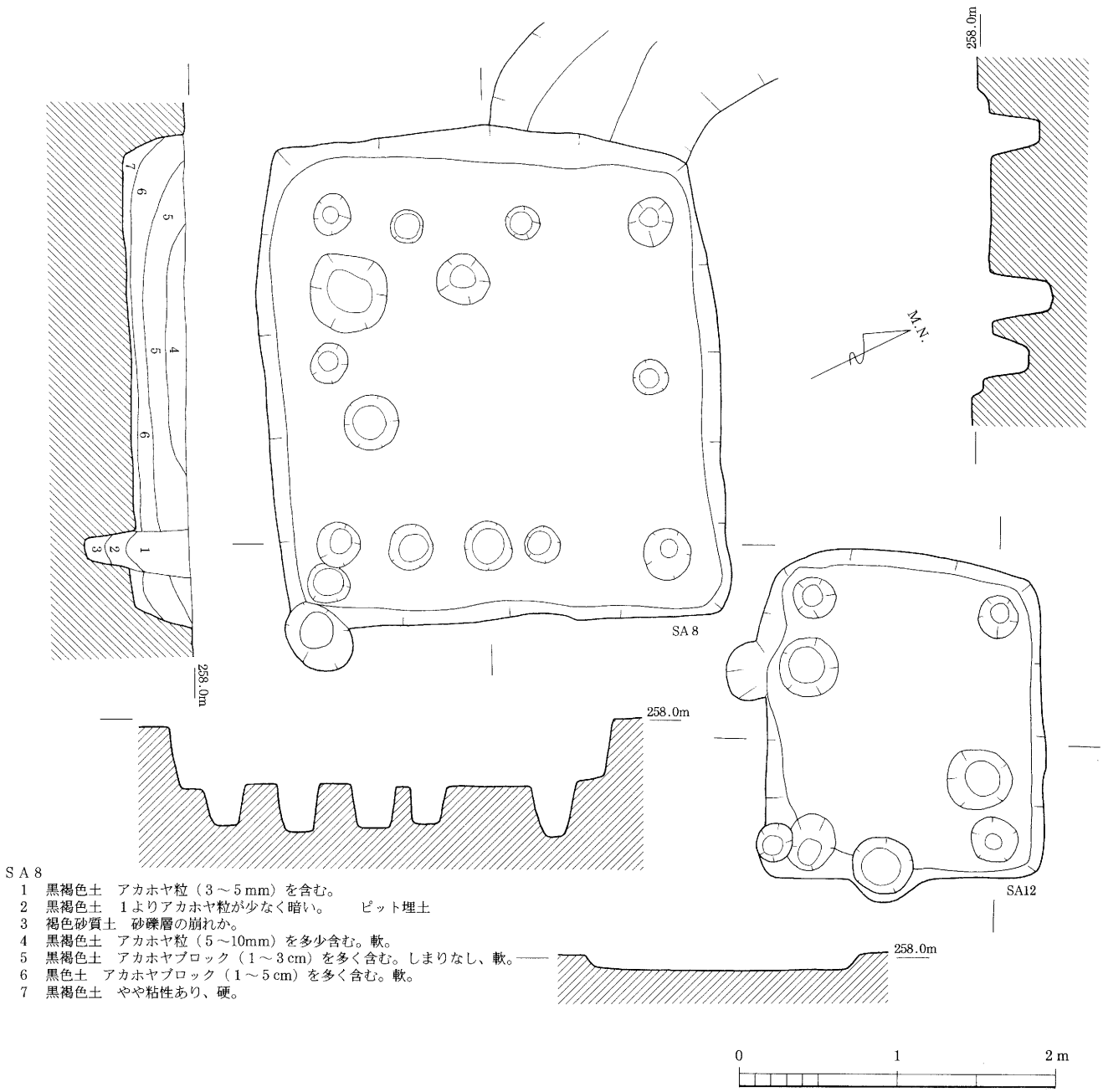
第5図　SA 1～4実測図（S＝1/40）



第６図　ＳＡ５実測図（Ｓ＝1/40）



第7図　SA6・7実測図（S＝1/40）



ＳＡ８
1　黒褐色土　アカホヤ粒（３～５mm）を含む。
2　黒褐色土　１よりアカホヤ粒が少なく暗い。　ピット埋土
3　褐色砂質土　砂礫層の崩れか。
4　黒褐色土　アカホヤ粒（５～10mm）を多少含む。軟。
5　黒褐色土　アカホヤブロック（１～３cm）を多く含む。しまりなし、軟。
6　黒色土　アカホヤブロック（１～５cm）を多く含む。軟。
7　黒褐色土　やや粘性あり、硬。

第８図　SA８・12実測図（S＝1/40）

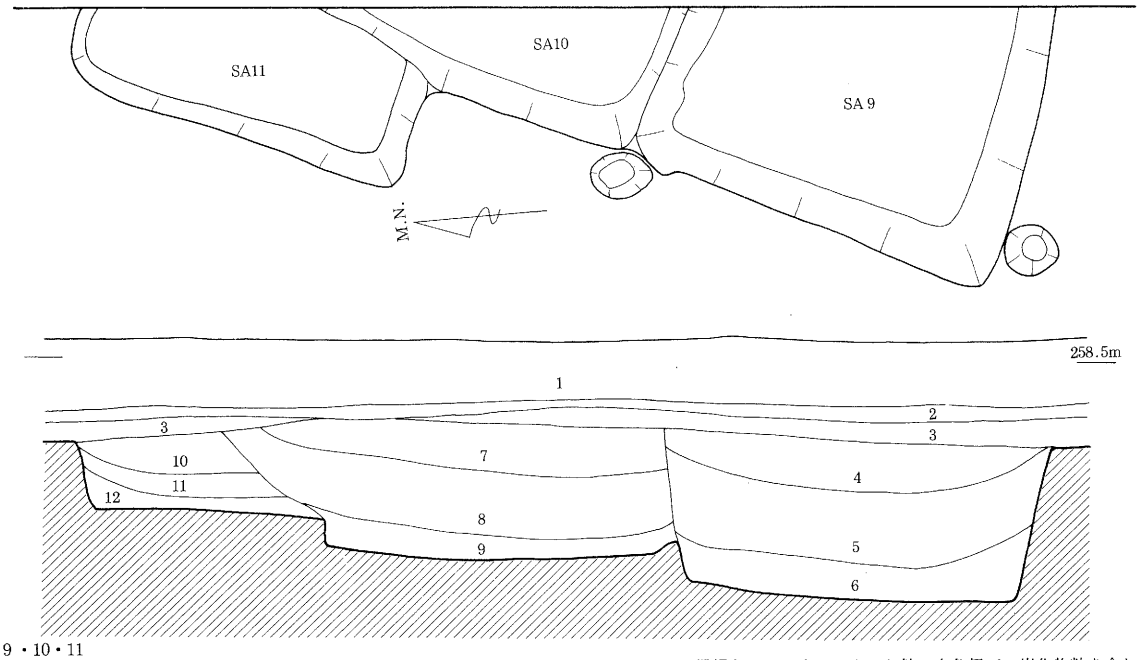
の存在は確認できなかったため、ＳＢ１が先行するものと理解している。棟方向は東西で、柱穴からの遺物の出土は見られなかった。

ＳＢ２は、梁中央に柱穴を持たない１×３間の掘建柱建物である。ＳＤ１により柱穴１基を欠く。棟方向はほぼ東西方向であるが約30°南北に振れている。ＳＢ１に隣接するものの、棟方位や柱間隔に差異が見られ、また、近接しすぎていることも考えるならば、ＳＢ１、２の同時存在の可能性は否定されよう。ＳＢ１、２ともに火処等は確認されなかった。

(3)　土坑・土壙墓　ＳＫ１～６（第12図）

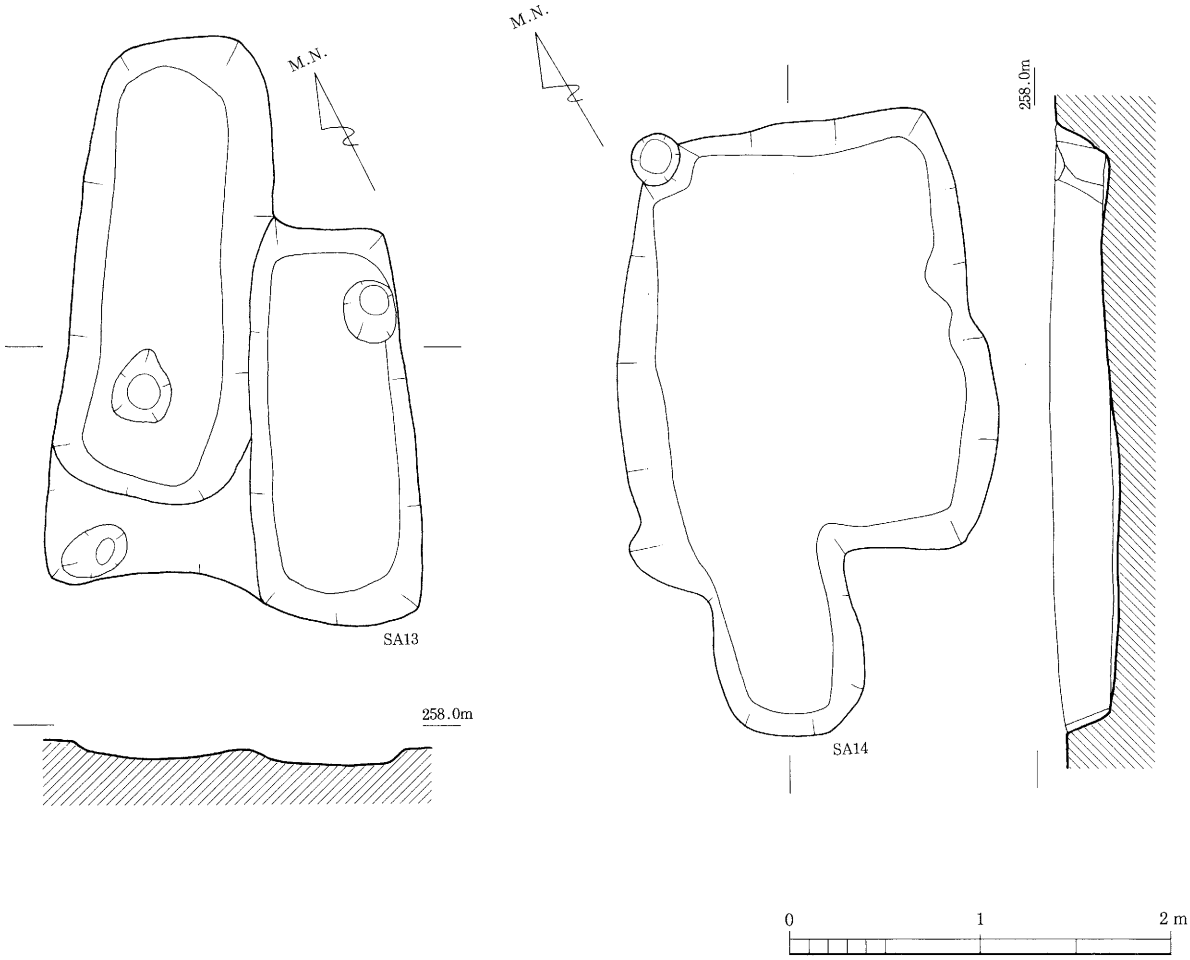
ＳＫ１

ＳＫ１は、円形土坑が２基接した形態であるが、埋土の観察からは同時埋没と考えられた。床面にシラス（入戸火砕硫）が敷かれていた。遺物は見られず遺構の性格は不明である。

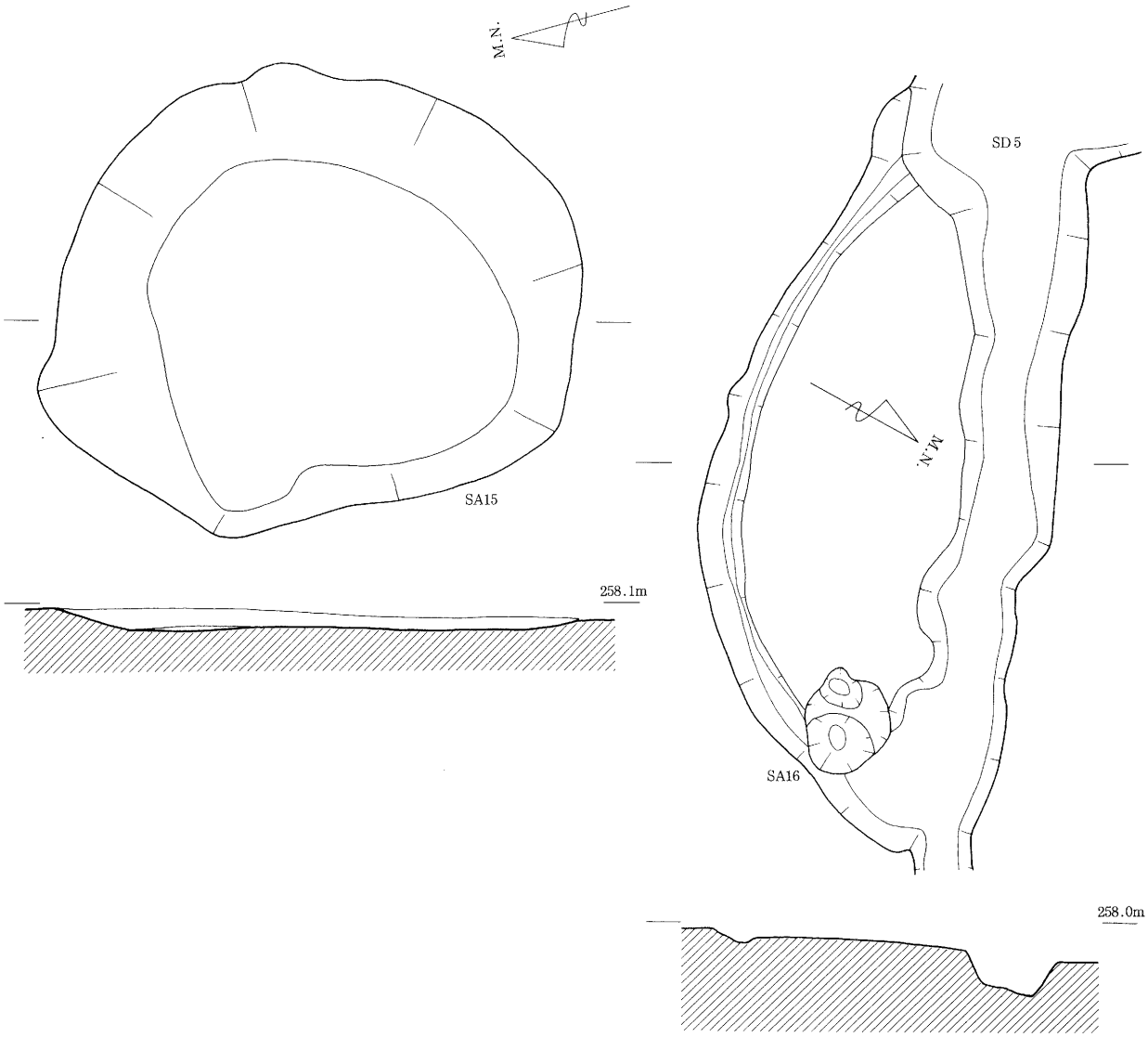


ＳＡ９・10・11

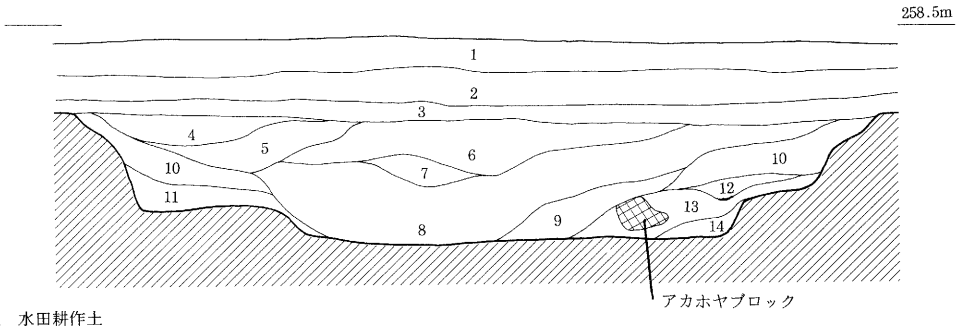
1　黒褐色土　現水田耕作土
2　暗赤褐色土　水田床土層、酸化第二鉄凝集。
3　黒褐色土　白色軽石（１～３mm）、アカホヤ粒（２～５mm）を含む。
4　黒褐色土　アカホヤ粒（２～５mm）、炭化物粒（５mm）を含む。
5　黒褐色土　アカホヤ粒、白色粘土粒、炭化物粒、小礫（３～５mm）を含む。
6　黒褐色シルト質土　やや軟。
7　黒褐色土　４に近似するが、やや明るい。やや硬。
8　黒褐色土　アカホヤ粒、白色軽石、炭化物粒を含む。やや軟。
9　黒褐色シルト土　アカホヤ粒、白色軽石、炭化物粒を含む。やや硬。
10　暗褐色砂質土　アカホヤ粒、白色軽石を含む。やや軟。
11　淡褐色砂質土　10に似るが、砂粒が多く色調もやや明るい。
12　黒褐色土　アカホヤ粒（２～５mm）、炭化物粒（５mm）を多く含む。



第９図　SA９・10・11・13・14実測図（S＝1/40）



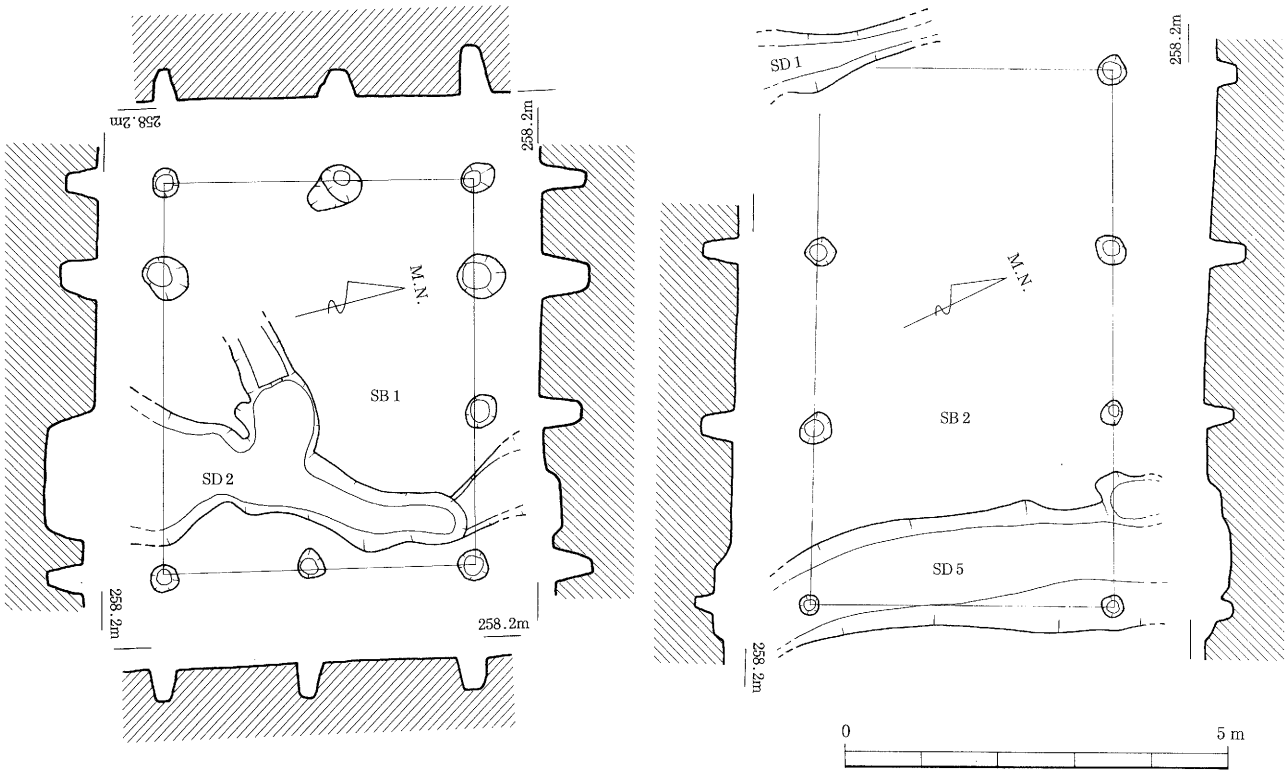
第10図　SA15・16実測図（S＝1/40）



ＳＥ２
1　黒褐色土　水田耕作土
2　　同　上
3　暗赤褐色土　水田床土層、酸化第二鉄凝集
4　暗褐色砂質土　小礫、白色軽石を多少含む。やや硬。
5　暗褐色砂質土　アカホヤ粒（1～5mm）を含む。
6　黒褐色砂質土　5に似るが、砂粒が多い。
7　黒褐色土　アカホヤ粒（2～5mm）を含む。やや軟。
8　黒褐色シルト質土　礫（1～2cm）、アカホヤブロック（3～5cm）を含む。
9　黒褐色土　アカホヤ粒（2～5mm）を多く含む。やや軟。
10　暗褐色土　アカホヤ粒（2～10mm）を多く含む。やや軟。
11　黒褐色土　アカホヤ粒（1～3mm）、砂粒を含む。やや軟。
12　淡赤褐色焼土　白色粘土が火を受けている。硬。
13　黒色土　アカホヤ粒（1～5mm）を含む。軟。
14　黒褐色土　アカホヤ粒（1～5mm）を含む。軟。

0　1　2m

第11図　SD２土層断面実測図（S＝1/40）



第12図　SB１・２実測図（S＝1/100）

ＳＫ２

1.06×2.47mの長方形土坑である。検出面からの深さは約40cmである。埋土中位から偏平河原石と陶器片が出土している。34は薩摩系の甕の口縁部である。内面には、５本単位の櫛目が縦位に施される。

ＳＫ３

ＳＫ３は、径1.24mの円形土坑である。深さは30cmで、床面にはシラスが敷かれており、床直上から杓子状銅製品（36）、やや浮いた状態で国産青磁片（35）が出土している。36は、現存長12.6cm、幅6.9cm で、厚さ１～２mmと薄手の造りである。全体に緑青をふくが比較的良好に残存している。

ＳＫ４

ＳＫ４は、ＳＡ５、ＳＡ16に挟まれる位置に検出された。不整形の土坑で、近世の陶磁器が出土している。37は肥前の染付碗で、矢羽文が描かれている。18c.後半のものである。38は陶器の鉢で、内面には褐色の釉薬の上に白化粧がなされ、その後に波状の櫛描により地を出している。39、40は土瓶の蓋で、外面には厚く鉄釉が施される。

ＳＫ５

径約１mの円形土坑である。床面には幅５、６cmの溝が巡り、溝中及び土坑下半部では黒色腐食土中に多くの木質が見られた。遺物等は見られなかったものの、木棺を用いた近世墓の可能性が高いと思われる。

ＳＫ６

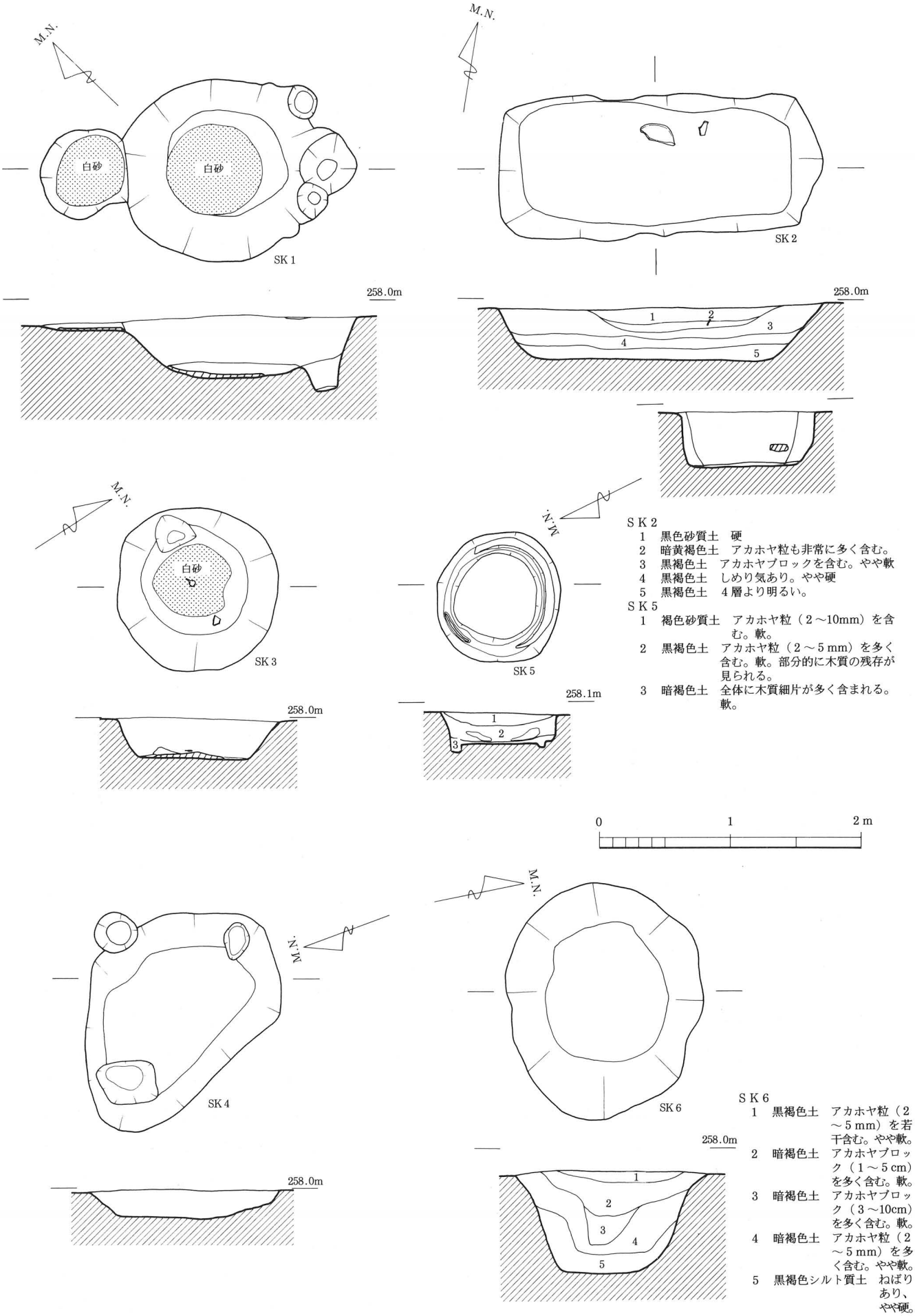
Ａ区西端に検出された。楕円形土坑で1.50×1.80m、検出面からの深さ約80cmを計る。遺物等は見られなかった。

(4)　溝状遺構

Ａ区では７条の溝状遺構を検出した。多くは南北方向に延びるが、底面のレベルを見るといずれも南へ下っており、台地縁に向かうものと思われる。ＳＤ４とＳＤ７は、いずれも掘り込みが浅くアカホヤ層中で底となっており、ＳＤ２、ＳＤ６間で検出されていないものの一直線上に並んでおり、同一の遺構であった可能性がある。遺物はＳＤ２、ＳＤ５から出土している。

ＳＤ２（第11図）

ＳＤ２は、Ａ区中央に検出された。最大幅６mで検出面からの深さも60～70cmと溝状遺構の中で最も規模が大きい。ＳＤ２北半部底面には、段丘砂礫層とは明らか

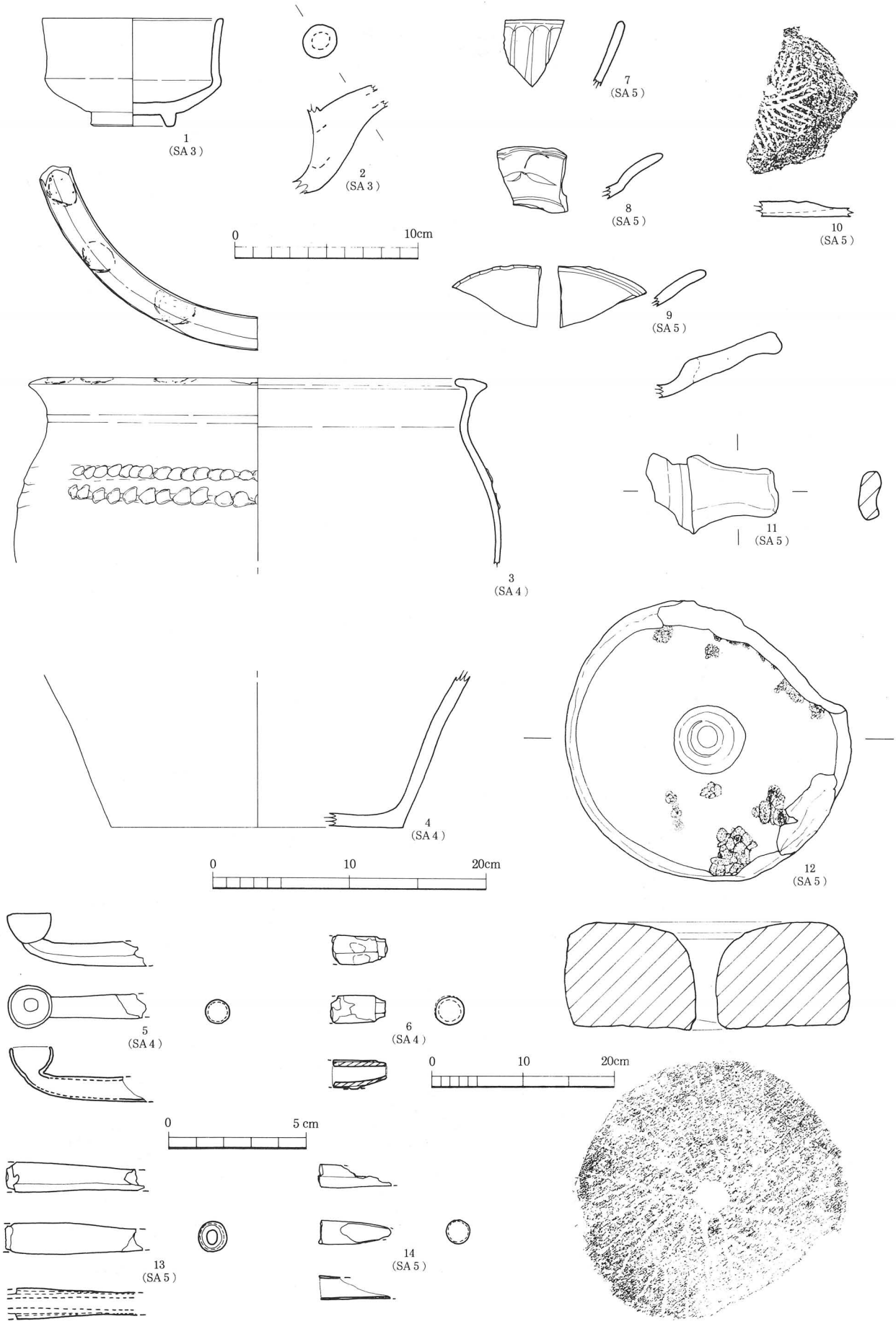


ＳＫ２
1　黒色砂質土　硬
2　暗黄褐色土　アカホヤ粒も非常に多く含む。
3　黒褐色土　アカホヤブロックを含む。やや軟
4　黒褐色土　しめり気あり。やや硬
5　黒褐色土　４層より明るい。

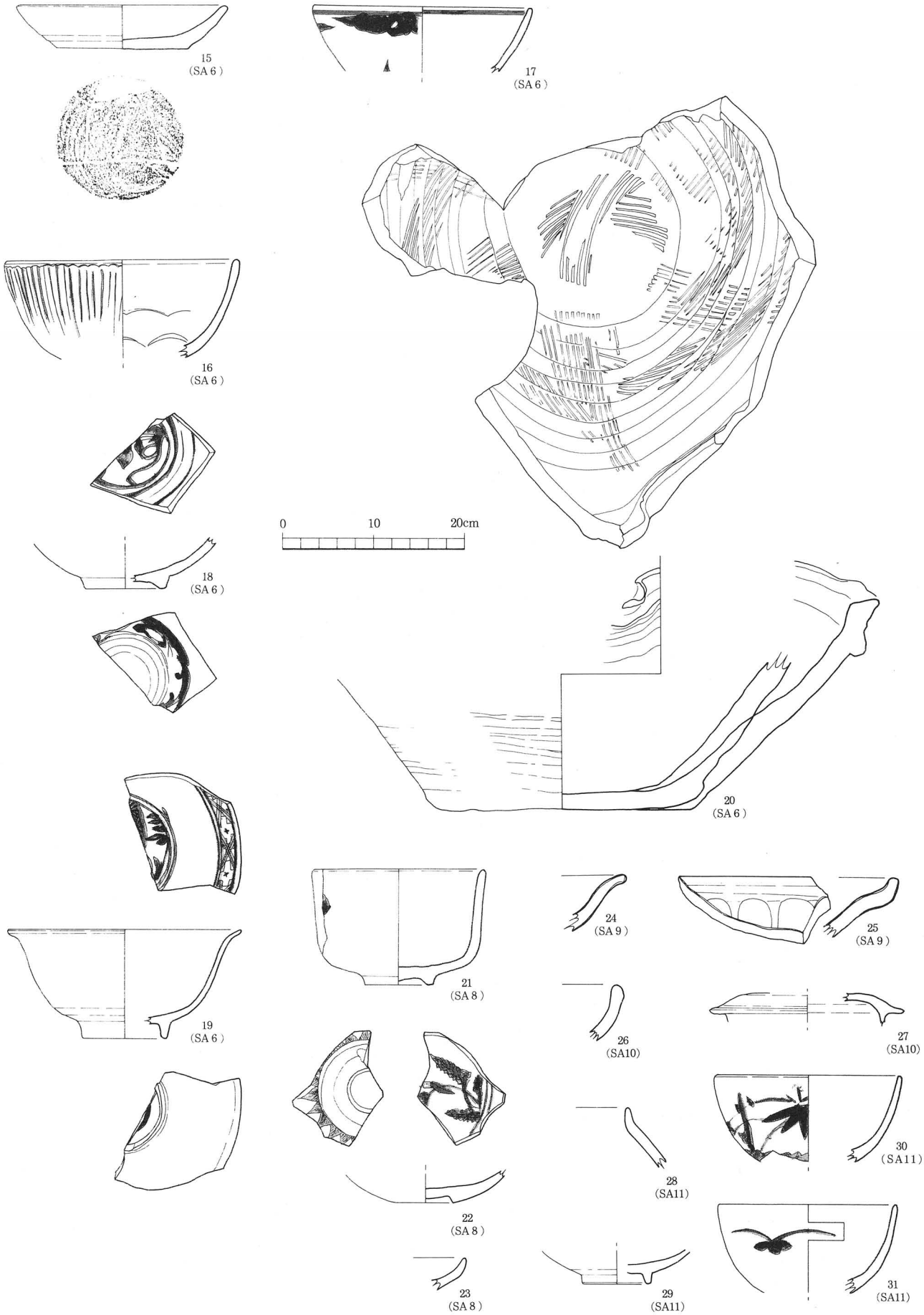
ＳＫ５
1　褐色砂質土　アカホヤ粒（２～10mm）を含む。軟。
2　黒褐色土　アカホヤ粒（２～５mm）を多く含む。軟。部分的に木質の残存が見られる。
3　暗褐色土　全体に木質細片が多く含まれる。軟。

ＳＫ６
1　黒褐色土　アカホヤ粒（２～５mm）を若干含む。やや軟。
2　暗褐色土　アカホヤブロック（１～５cm）を多く含む。軟。
3　暗褐色土　アカホヤブロック（３～10cm）を多く含む。軟。
4　暗褐色土　アカホヤ粒（２～５mm）を多く含む。やや軟。
5　黒褐色シルト質土　ねばりあり、やや硬。

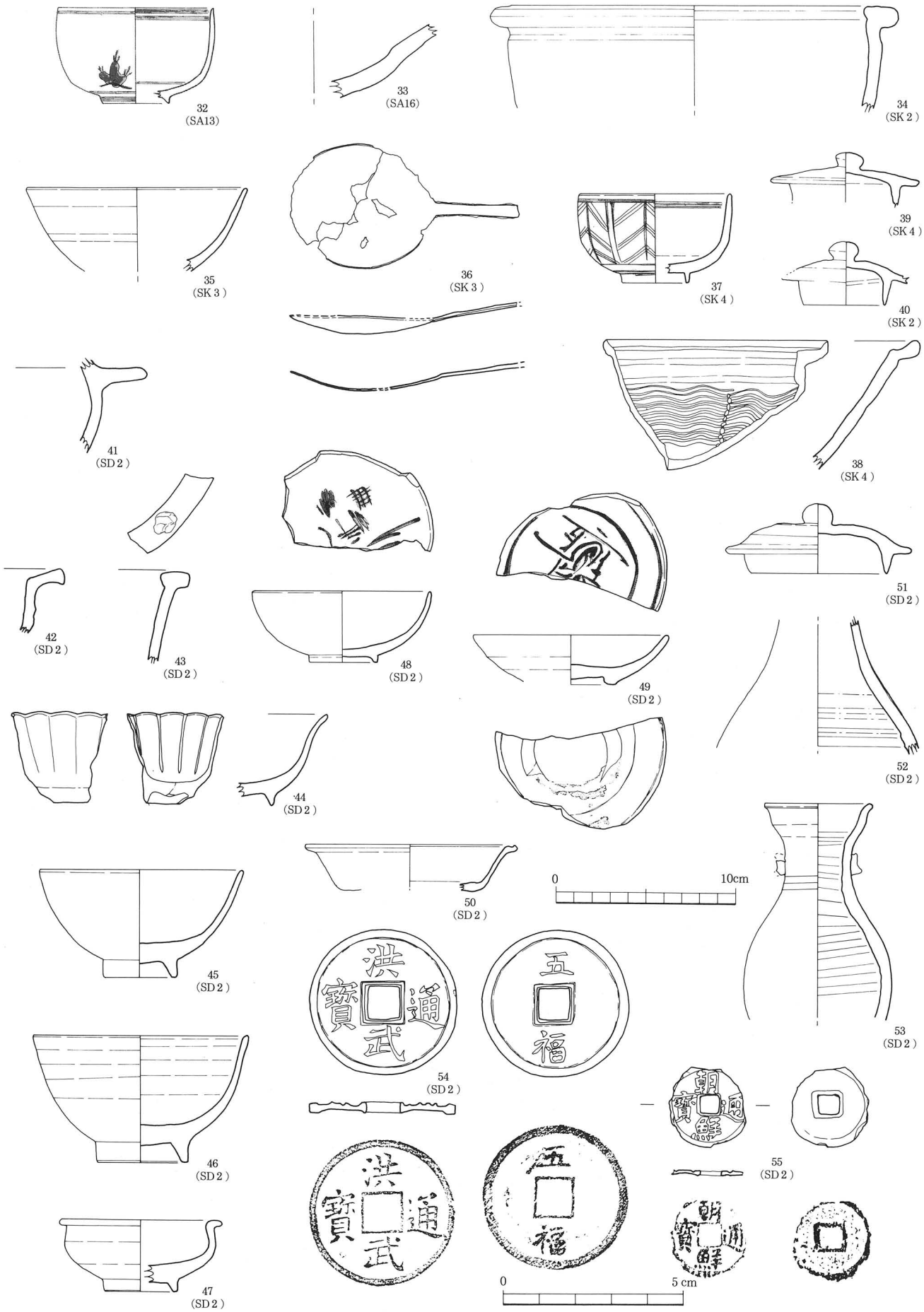
第13図　ＳＫ１～６実測図（Ｓ＝1/40）



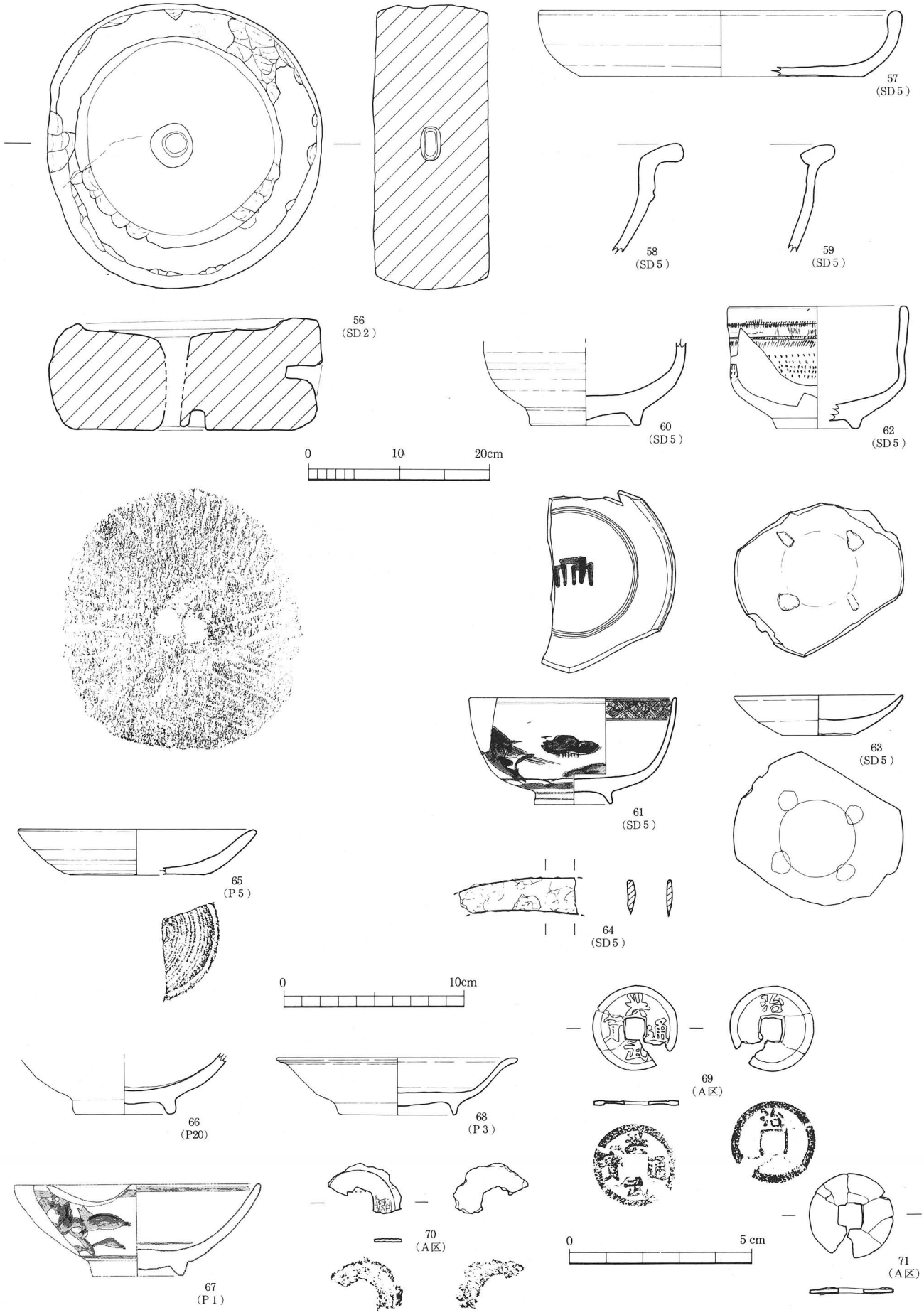
第14図　出土遺物実測図(１)（１・２・７～11→1/3，３・４→1/4，５・６・13・14→1/2，12→1/6）



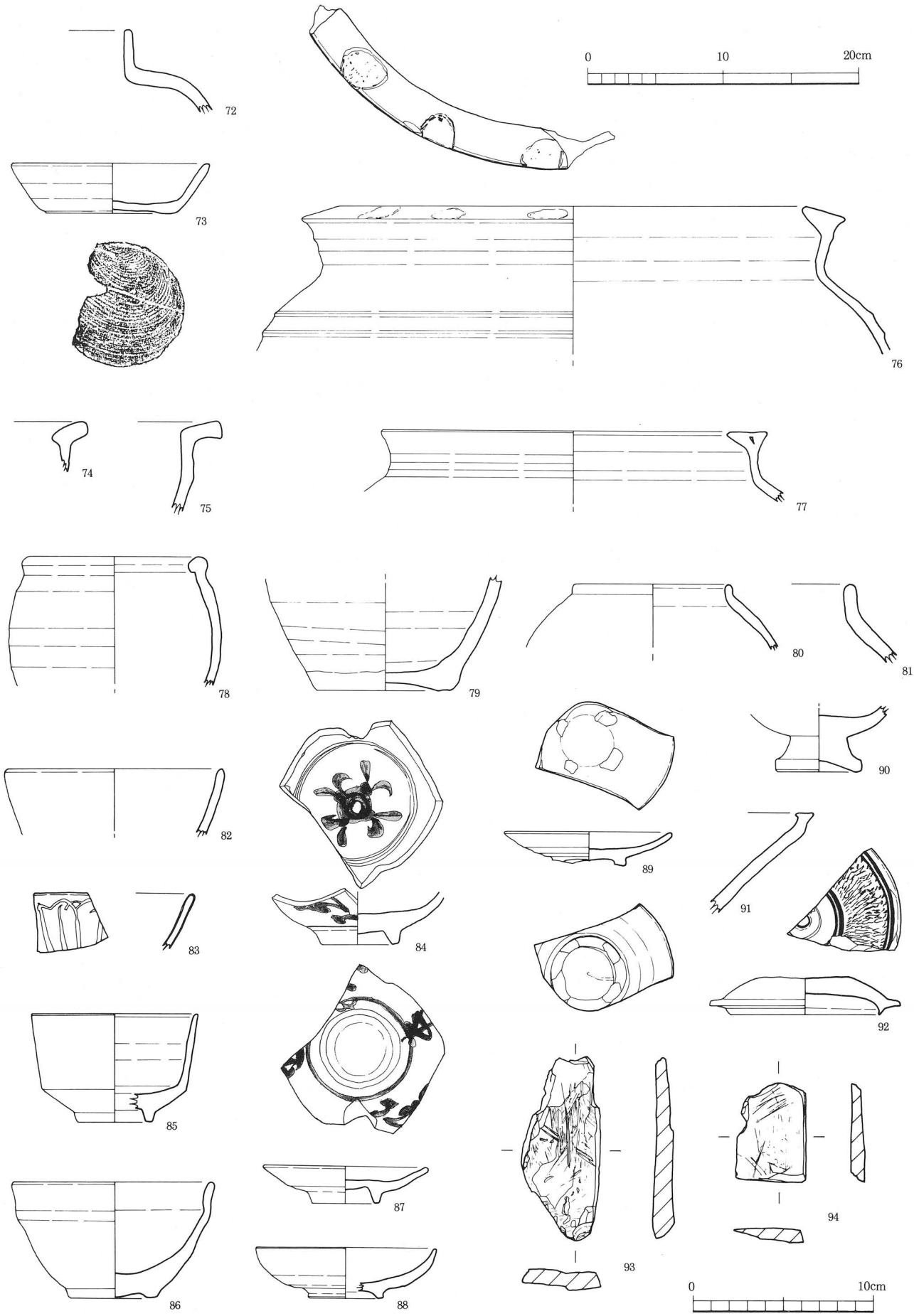
第15図　出土遺物実測図(２)（全て1/3）



第16図　出土遺物実測図（３）（32～53→1/3，54・55→2/3）



第17図　出土遺物実測図(４)(56→1/6, 69～71→2/3　他は全て1/3)



第18図　出土遺物実測図（５）（76・77→1/4，他は全て1/3，Ａ区表土）

に異なる拳大の河原石が見られた。遺物は、陶磁器、銭貨が見られたが、多くは底面からやや浮いた状態で出土しており、溝埋没時の流れ込みと判断される。41は、土師質の鍔付土器で羽釜と思われる。全体に風化が著しく煤の付着等は見られないが、二次的な加熱による器壁の赤変化が認められる。42、43は在地系の甕である。44は白磁碗で、稜花状の口縁は外反する。45～46は、国産陶器碗である。見込みに蛇の目釉剝ぎが見られる。47は陶器の香炉で、体部下半は露胎である。48は淡黄褐色の器面に褐色の釉薬で文様が描かれた陶胎染付で、関西系のものと思われる。49は中国産染付皿で、見込みに人型の「寿」字文が見られる。底部は碁笥底で、畳付は露胎である。16c.後半と思われる。50は肥前陶器の皿で、外に折り返された口縁はやや受け口となる。17c.前半のものである。51は土瓶の蓋で、無釉である。52、53は瓶で、52は肥前系青磁、53は在地系陶器である。54は、径4.0cmと大型の洪武通寶（1368年初鋳）で裏面に「五福」の文字が見られる。55は朝鮮通寶（1423年初鋳）である。56は石臼で、側面に把手を差し込む孔が穿たれ、裏面に放射状の刻線が見られる。

ＳＤ５

ＳＤ５は、Ａ区北東隅から緩やかにカーブしながら南へ向かいＳＤ２に合流している。底面の深さに約50cmの段差が見られたため別個の遺構としてとらえたが、ＳＤ２上面とＳＤ５の埋土の違いは不明瞭で、切り合い関係は明確にし得ない。遺物は遺構の上半部に浮いた状態で流れ込んでいた。57は土師質の炮烙である。外面に厚く煤が付着している。58、59は在地系の甕である。60、61は陶器碗である。61にはヘラ工具による細かな刻みと刺突が見られ、明黄褐色の釉薬により暗文となっている。62は肥前系染付碗である。体部に松、千鳥が描かれる。63は陶器皿で、内面に僅かに自然釉が見られる。見込みと底部に目跡が残る。64は鉄製の鎌である。

(5) その他の遺物

Ａ区では、掘建柱建物として認定できたもの以外に多数のピットを検出しており、その埋土中からも若干の遺物の出土をみている。また、遺構外（表土及び包含層）からも多数の遺物が出土しており、それらの中で主なものを図示した（65～94）。

65は土師質の皿で、口径12.8cmを計る。糸切り底である。66は陶器碗。67は肥前系染付碗で草花文が描かれている。68は白磁の皿で、口縁は端反りとなる。69は洪武通寶で、裏面に「治」の文字が見られる。70、71の銭貨は判読不能であった。72は土師質の直口壷である。73は土師質の坏で、口径10.7cmを計る。糸切り底である。74～79は在地系陶器の甕である。76の口縁部上面には貝殻の目跡が残る。80、81は在地系陶器の壷である。82、83は中国産青磁碗である。83には剣先蓮弁文が見られる。15c.～16c.のものであろう。84は、明代の染付碗である。85、86は陶器碗である。85は口唇部内面と見込み（蛇の目）、畳付が釉剝ぎされている。86は体部下半が露胎である。87は白磁皿で、見込みに蛇の目釉剝ぎが見られる。88は陶器皿で、外面体部下半が露胎である。89は切り高台の白磁皿である。見込みに４カ所の目跡が残る。90は陶器の仏飯器で、見込みに蛇の目釉剝ぎ、脚部下半は露胎である。91は陶器鉢で、内面に放射状の櫛目、外面上部は釉のハケ塗りが見られる。92は陶器蓋で、ヘラ工具による刻み、刺突の暗文は、61の陶器碗に共通する手法であり、径も一致している。釉薬の色調に違いがあるもののセットである可能性が高い。93は頁岩、94は砂岩製の砥石である。93には著しい擦痕が残る。

２　Ｂ区の遺構と遺物

(1) 掘建柱建物　ＳＢ３～７（第19図）

ＳＢ３は、１×４間の東西棟であるが、さらに東側に延びる可能性もある。

ＳＢ４は、１×５間の東西棟である。

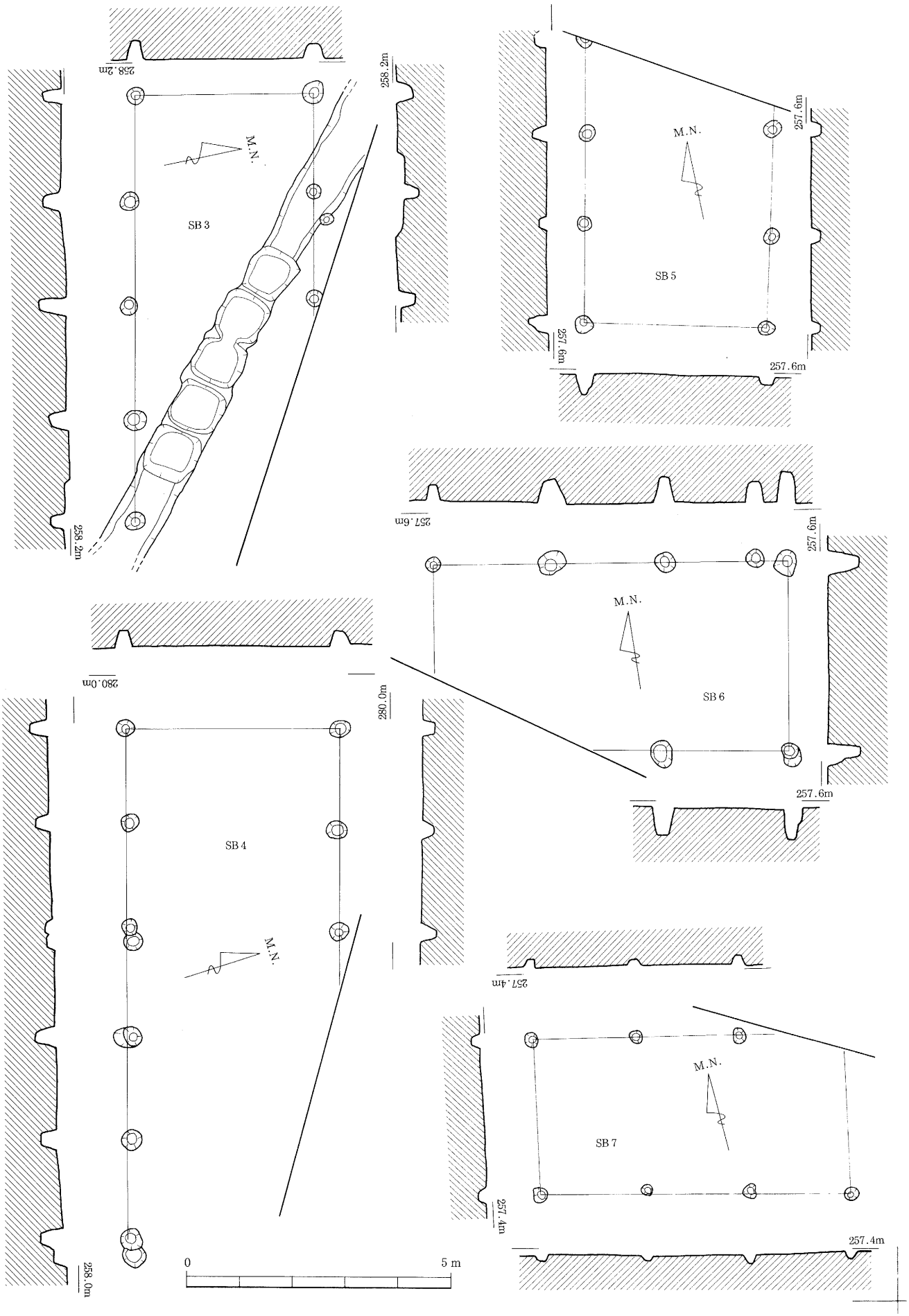
ＳＢ５は、１×３間の南北棟であるが、さらに北側に延びる可能性もある。

ＳＢ６、ＳＢ７はともに１×３間の東西棟である。

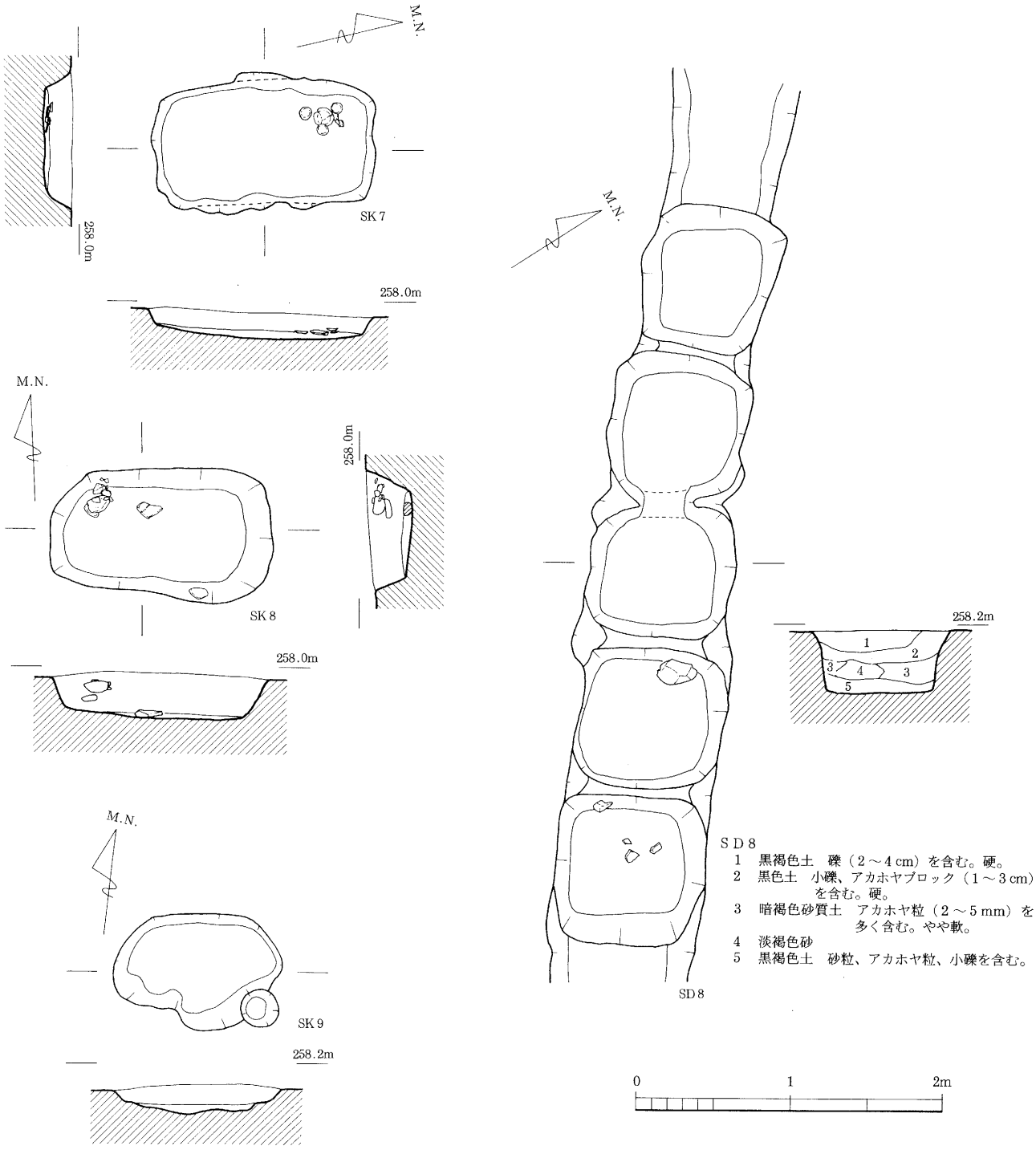
ＳＢ５・６・７の３棟は、ＳＤ13とＳＤ14の溝状遺構に挟まれた（区画された）範囲に位置しており、それぞれの溝状遺構と平行あるいは直行の棟方向を示していることから、溝により区画された屋敷地を構成する可能性が指摘される。

(2) 土坑・土壙墓　ＳＫ７～９（第20図）

ＳＫ７は、0.80×1.45mの長方形土壙墓である。検出面からの深さは18cmである。人骨等の残存は見られなかったが、北西隅床直上に５枚の土師質の坏、皿（95～99）がまとまって出土した。95は坏で、口径12.3cm、器



第19図　ＳＢ３～７実測図（Ｓ＝1/100）

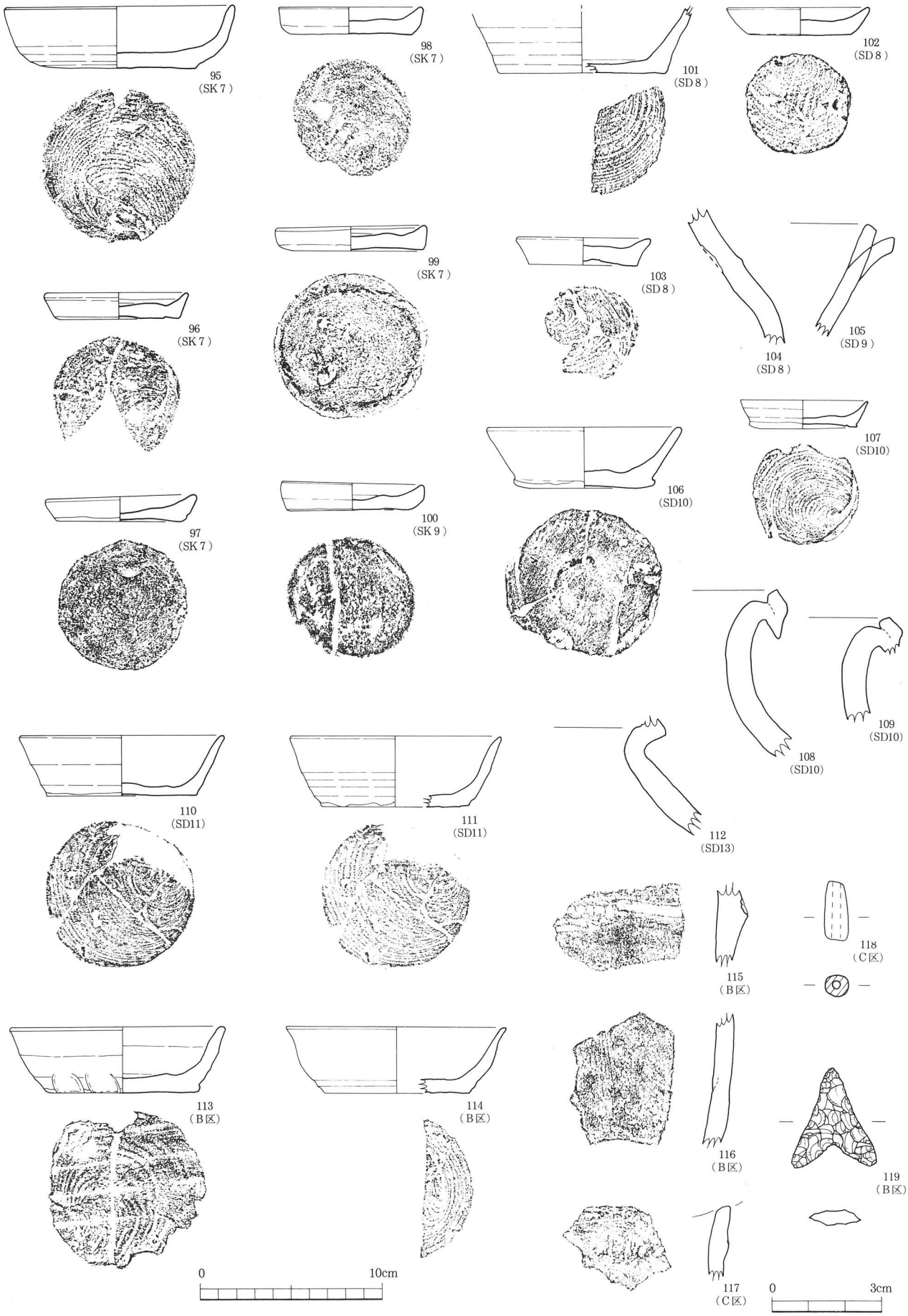


第20図 ＳＫ７～９、ＳＤ８実測図（S＝1/40）

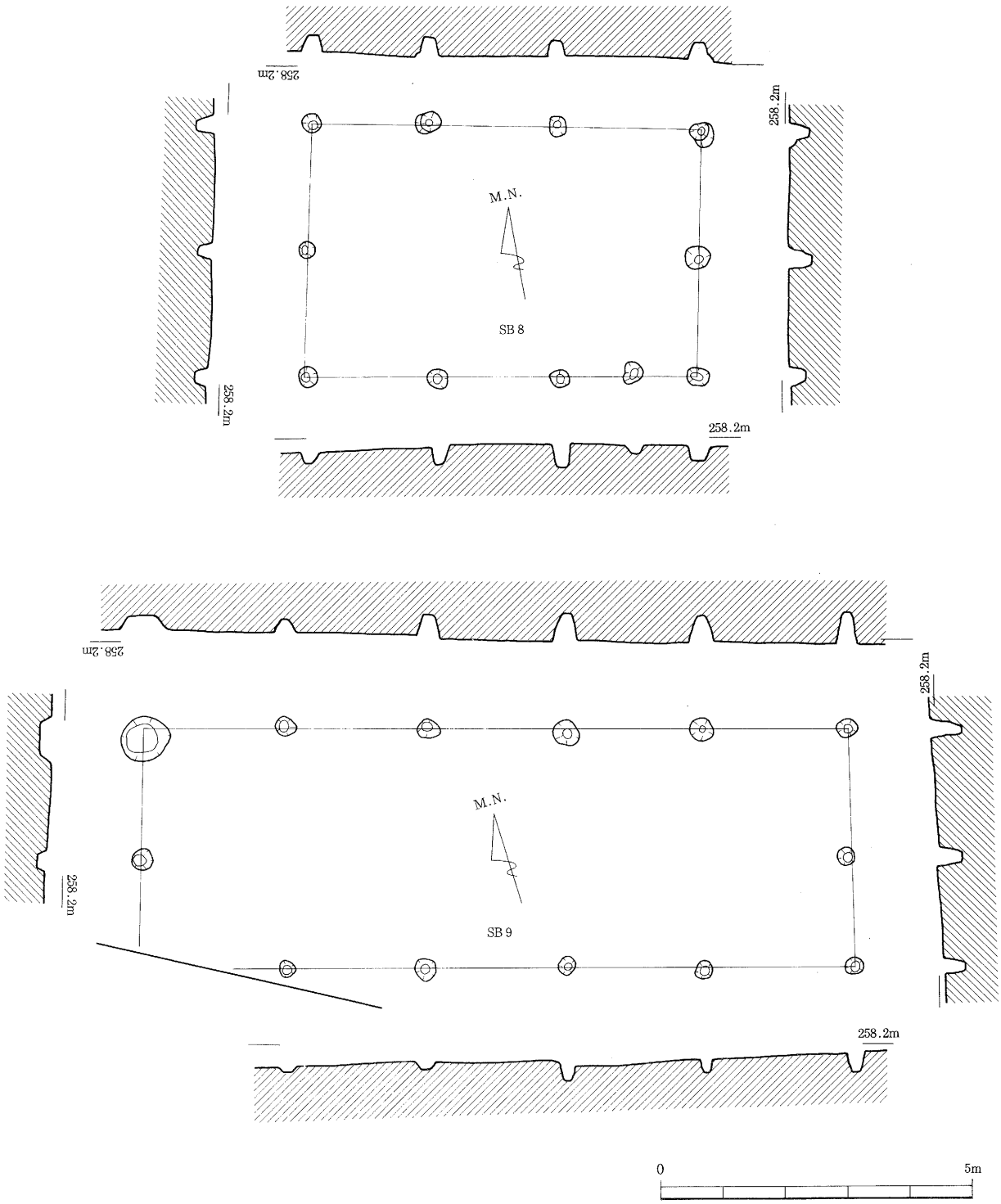
高3.4 cmを計る。底部から体部にかけて丸みを持ちながら立ち上がり、口縁はやや外傾する直口縁である。96～99は皿で、底部から直線的に立ち上がるもの（96、97）、やや丸みを持つもの（98、99）に分けられるが、いずれも口径8.0cm 前後、器高1.5cm 前後と法量的には近似する。全て糸切り底である。

ＳＫ８は、0.90×1.44mの略長方形土坑である。検出面からの深さは28cmである。土器類は出土していないが、北壁際床上と北西隅のやや浮いた位置に偏平な河原石が見られた。

ＳＫ９は、ＳＫ７、８の中間の位置に検出された。0.75×1.10mの不整楕円形で、検出面からの深さは15cmである。床面から浮いた状態で土師質皿が１点出土している（100 ）。口径7.6cm 、器高1.5cm で底部から丸みをもって立ち上がる。風化が著しいが、糸切り底と思われる。



第21図　出土遺物実測図（６）（119→2/3、他は全て1/3）



第22図　ＳＢ８・９実測図（Ｓ＝1/100）

(3)　溝状遺構（第20図）

ＳＤ８は、Ｂ区東端に検出した。検出面からの深さは10cm前後と浅い。溝内に一辺90cm前後、深さ約40cmの方形土坑が５基並んでいる。用途は不明である。また、ＳＢ３と切り合っているが、埋土の観察からＳＢ３が先行するものと考えられる。ＳＤ８及び溝内土坑から数点の遺物が出土しているが、いずれも検出面近くに浮いた状態であった。101 は土師質の坏で、糸切りの底部から直線的に立ち上がる。口縁を欠し口径・器高は不明であるが、底径は9.3cm と比較的大ぶりなものである。102、103 は土師質の皿で、102 がやや丸みを持つのに対し、103 はやや外反気味に立ち上がる。104 は常滑焼である。

甕の肩部で暗オリーブの自然釉が厚く付着する。

ＳＤ９は、ＳＤ８の南側に検出されたが、検出面からの深さが10cm以下と残存が悪く、約６ｍを検出したのみである。105 の土師質片口鉢が１点出土している。

ＳＤ10、11はＳＤ８の西側に検出された。ともに10cm程度の深さで遺構の残存は悪い。ＳＤ10からは土師質の坏、皿（106,107)、常滑焼の甕（108,109)が出土している。106 は口径10.3cm、器高3.4cm で、底部はヘラ切りである。107 は口径7.0cm 、器高1.6cm で器壁が薄く、口縁部は鋭く仕上げられている。108,109 は常滑焼の甕で、口縁部の断面がＮ字状に折り返される。下方に垂れた口縁帯は、頚部との間を十分に保っている。14c.前半に位置づけられる。ＳＤ11からは、土師質の坏が出土している。110 は口径11.3cm、器高3.3cm 、111 は口径11.6cm、器高3.9cm でいずれも糸切りである。

ＳＤ13・14は、ほぼ平行し南北に延びる。ＳＢ５～７を含む屋敷地の区画溝の可能性が高い。また、Ｂ区北西隅に検出したＳＤ15は、方向的にＳＤ13と直交する関係にある。112 はＳＤ13から出土している。常滑焼の甕である。ほぼ水平に外へ折り返された口縁は、再度やや内傾気味に折り返され受け口縁となる。口唇部内側は沈線状に窪む。13c.後半の年代が与えられよう。

(4) その他の遺物

113 、114 はＢ区表土から出土した土師質の坏である。113 は口径11.4cm、器高3.6cm で糸切り底である。ロクロからの引き離しの際に付いたと思われる指頭痕が明瞭に残る。また、底部には板目が観察できる。114 は口径12.0cm、器高3.7cm で糸切り底である。底部から丸みを持って立ち上がり、やや外反気味の口縁は薄く仕上げている。

115 は縄文時代後期前半の浅鉢である。肥厚させた器壁に棒状工具による沈線と刺突文が施される。上縁と下縁のカーブに若干の歪みがみられ、波状口縁の可能性が指摘される。116 も縄文土器の胴部である。119 は、姫島産黒耀石製の打製石鏃である。

3　Ｃ区の遺構と遺物

掘建柱建物　ＳＢ８、ＳＢ９（第22図）

ＳＢ８は、２×３間の東西棟である。ＳＢ９は、２×５間の東西棟で、いずれも火処等は検出されていない。

Ｃ区出土の遺物は２点のみである。117 は波状口縁の浅鉢で、内面は貝殻条痕、外面は貝殻腹縁による斜めの連続刺突文が施される。縄文後期前半に位置づけられる。118 は土錘である。

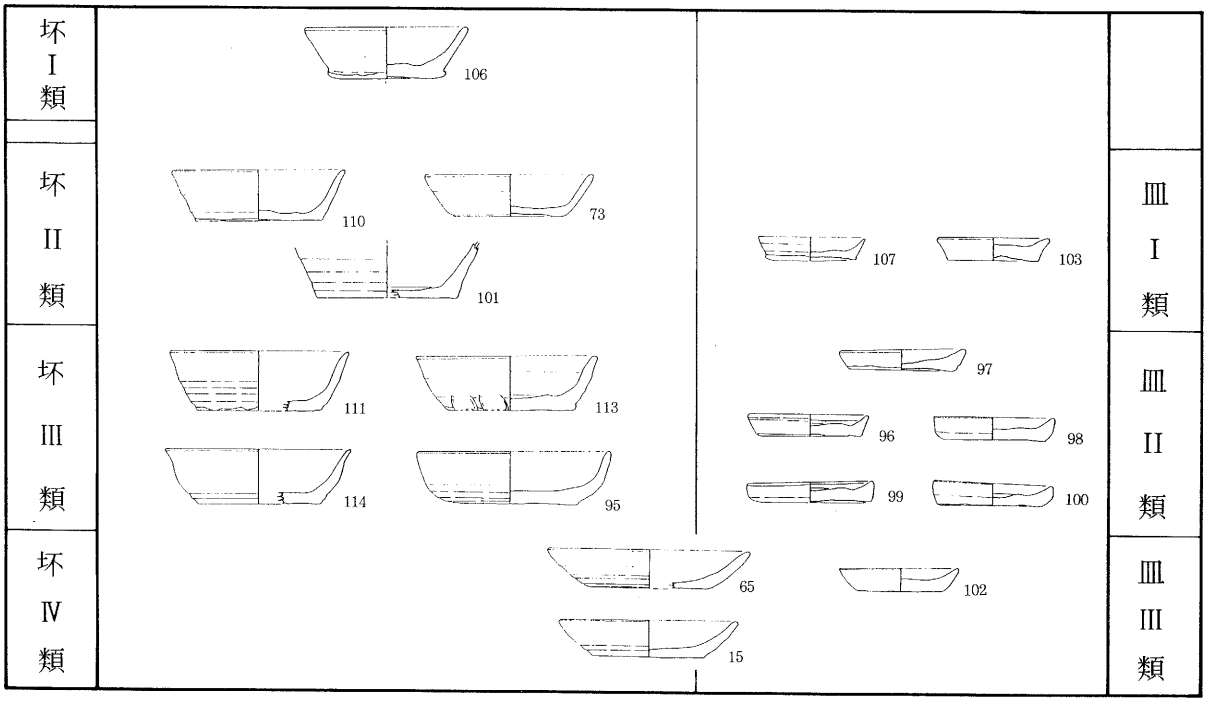
Ⅲ　まとめ

六部市遺跡では、ここまで報告してきたように中近世を中心とした遺構・遺物が検出されたが、発掘区域が分散しており、遺跡の全体像を把握するまでには至らなかった。ここでは、検出された遺構・遺物について若干の所見と問題点を述べて、まとめにかえたい。

1　遺物について

今回の調査により出土した土器類には、輸入陶磁器では青磁、白磁、染付が、国産陶磁器では常滑焼、肥前系陶磁器、薩摩系陶器等が見られ、他に土師質土器がある。その多くは、遺構埋没時の流れ込みと思われる出土状況であり、遺構埋土の中～上位、または包含層からの出土である。そのため、遺構や共伴遺物の時期推定には自ずから制約が課せられることは免れ得ない。しかし、当地に刻まれた歴史の一隅を語る重要な資料であることは言うまでもない。

輸入陶磁器は、端反りの碗や内面に蓮弁状の面取りが施される盤など14c.代に遡る青磁や、線描蓮弁文の青磁碗、碁笥底を呈する皿、切り高台の白磁皿など16c.に下るものが見られる。染付も16c.代に収まる碗・皿がほとんどである。常滑焼は、13c.後半から14c.前半の甕である。県内では、30を超える数の遺跡から常滑焼が出土しているが、そのほとんどが13c.後半から14c.前半の甕・壷である[1]。常滑窯が全国的に商権を拡大する時期であり、また、器種によって流通域を異にする常滑焼の中でも汎日本的に流通する器種である。肥前系陶磁器は、17c.代の陶器皿等も見られるが、大部分は18c.後半に下る染付碗である。薩摩系陶器は、甕を中心に壷、碗が見られる。甕の口縁上面に貝殻の目跡が残るものが含まれるが、薩摩焼にのみ見られる特徴の一つである。17c.後半から18c.代のものが主体である。県内の中近世遺跡で比較的多く見られる国産陶器に備前焼がある。すり鉢、甕を中心に14c.代から出土が見られるようになり、15c.～16c.にはその器種の主流をなす。しかし、六部市遺跡においては出土が希薄で、わずかに甕の胴部片に備前焼



第23図　土師質土器変遷概念図

かと思われるものが含まれる程度で、断定し得るような特徴的な資料は出土していない。備前焼が県内で数多く流通する時期と、当遺跡が集落として営まれる時期にズレがあるためであろうか。検出された遺構に時期が限定されるものが少ないため、判断は留保せざるを得ない。

土師質土器は、坏・皿を主体に壷・羽釜・炮烙等が見られるが、その数は少ない。坏・皿の底部は、１点のみヘラ切りが見られたが、他は全て静止糸切りである。全体形を知り得たのはわずかに18個体であるが、その中でもいくつかの形態差が指摘される。

坏Ⅰ類　ヘラ切りによってろくろから切り離される。底部と体部の境に段を持ち、体部から直線的に延びる口縁端部は丸く仕上げられる。（106）

坏Ⅱ類　静止糸切りにより切り離される。フラットな底部から直線的に立ち上がる。器壁は一様に薄い。（73 、101 、110）

坏Ⅲ類　体部が丸みを持って立ち上がる。先細りした口縁部がわずかに外反するものも見られる。（95 、111 、113 、114）

坏Ⅳ類　器高が低くなり、体部はわずかに内湾しつつも大きく開く。Ⅲとの中間的な形態となる。（15 、65）

ⅢⅠ類　底部から鋭く立ち上がる。薄手で直線的なものと、厚手でやや外反するものが見られる。（107、103）

ⅢⅡ類　底部からの立ち上がりに鋭さが消える。（96 、97、98、99、100）

ⅢⅢ類　全体に滑らかに丸みを持って立ち上がる。（102）

坏Ⅲ類とした95とⅢⅡ類の96～99は、Ｂ区ＳＫ７から一括して出土しているが、その他のものは、出土状況が良好であるとは言い難い。特に限定した年代を与え得る陶磁器との良好な共伴関係が見られず、年代的な位置づけは躊躇されるが、おおよその目安として示しておきたい。直線的に立ち上がる体部を持つ坏Ⅱ類を15c.後半～16c.にかけて、丸みを持つ体部にやや外反気味の先細りの口縁を持つ坏Ⅲ類を概ね16c.代、坏の器高が低下し、Ⅲとの中間的形態を示す坏Ⅳ類を16c.末～17c.前半としておきたい。

2　遺構について

Ａ区において16基の竪穴状遺構が検出された。平面プランや柱穴の有無で３類に分類される。

Ⅰ類　方形プランで、柱穴を持つもの。（ＳＡ１、２、６、７、８、12）

Ⅱ類　方形プランで、柱穴を持たないもの。（ＳＡ３、４、９、10、11、13、14）

Ⅲ類　不整形プランで柱穴を持つもの。（ＳＡ５）

ＳＡ15・16は、上記のいずれにも含まれない円形プラ

ンのものであるが、いくつかの点で他からは区別してとらえておきたい。ＳＡ15は、浅い皿状の落ち込みであるが、検出面からの深さが10cm以下で遺構の残りが非常に悪い。平面プランにも不明瞭な点が残るため、他と同列に扱うことは避けておきたい。ＳＡ16は、壁帯溝を持ち検出プランに大きな誤認は無いと思われる。今回の調査で検出された大部分の遺構・遺物が中近世の所産であるのに対し、このＳＡ16はそれ以前の竪穴住居跡である可能性も指摘されている。検出面から唯一出土した高坏は古墳時代前期と考えられるが、時期と遺構の平面プランに若干の違和感が残る[2]。Ａ区では見られなかったが、Ｂ区およびＣ区では縄文時代後期に位置づけられる土器片や打製石鏃が出土しており、また、昭和63年度に実施された試掘調査の際にも、縄文時代後期の土器が確認されている[3]。これらのことから、今回検出されたＳＡ16が縄文時代後期の竪穴住居跡である可能性も否定し得ない。しかし、遺構の深さが非常に浅くアカホヤ火山灰層中で床となることから、竪穴住居跡とすること自体にも疑問は残る。いずれにしても、この２基の遺構の位置づけは、時期・性格ともに積極的な根拠を示し得ず、留保せざるを得ない。

Ｉ類は、柱穴を持つ方形竪穴であるが、いずれの遺構もピット径は比較的小さく、壁に沿うように配列される。特にＳＡ６の先細りの小ピットなどは、一般的な竪穴式住居のように上屋構造を支えるといった意味合いよりも、板壁を固定するための杭が想定される。類例遺構は県内でも数遺跡で確認されている。えびの市小木原遺跡群蕨地区Ａ地区では、２基の竪穴状遺構が検出されている[4]。遺構内からの遺物出土は見られなかったものの、遺構周辺の包含層から糸切り底の土師質の坏・皿、ヘラ描蓮弁文青磁碗、見込みに印花を持つ青磁碗、常滑焼の甕、備前焼のすり鉢等14c.から16c.にかけての遺物が出土している。都城市松原地区第Ｉ遺跡では３基の竪穴状遺構が検出されており、うち２基がこのＩ類に、１基がII類に相当する[5]。遺構床面から出土した遺物には、ヘラ描蓮弁文青磁碗、ヘラ描文青磁稜花皿、切り高台の白磁皿等が見られた。串間市櫛間城Ｄ－１曲輪では、数十棟にも及ぶ掘建柱建物群とそれらを区画する溝や柵列が検出され、その中に竪穴状遺構１基も検出されている[6]。未報告のため遺構の性格や年代的位置づけは留保されるが、文献によれば、櫛間城は14c.前半にその城郭が構えられ、17c.初頭に廃城となっている[7]。県外においても、類例遺構は数多く報告されており、中世の（一部近世も含む）住居、半地下式の倉庫（穴蔵）、工房等の用途が想定されている。六部市遺跡の竪穴状遺構Ｉ類は、その規模や床面があまり硬くしまっていないこと、火処が見られないことなどから、住居や工房等の用途は想定し難く、半地下式の倉庫（穴蔵）と考えておきたい。時期については、床面密着の遺物が皆無であることから限定した時期を示し得ない。他地域の類例遺構や、埋土中に見られた中国産陶磁器や国産陶磁器などから、現時点では中世後期から近世前半の広い時期幅で概括せざるを得ない。

II類は、柱穴を持たない方形竪穴である。砂礫層を掘り抜く比較的深いもの（ＳＡ３、９、10）、砂礫層直上を床とするもの（ＳＡ４、11、14）、アカホヤ火山灰層中で床となる浅いもの（ＳＡ13）に分かれる。時期的な違い（変遷）は指摘し得ない。また、Ｉ類（ＳＡ２）との切り合いを見せるＳＡ３・４は、それぞれ前後する関係にあるが、出土遺物を見る限りにおいては大きな時期差は含まれない。用途・時期ともにＩ類に共通するものであろう。

III類としたＳＡ５は、不整長方形プランで、他を圧倒する規模を持つが、柱穴の位置と基数は不明確である。出土遺物からはＩ、II類との時期的差異は認められない。用途についても積極的に指し示す資料はないが、その規模の大きさから、住居である可能性も否定できない。

掘建柱建物は９棟検出されたが、検出面が当時の生活面よりも低かったために火処等は確認されていない。床面積を見ると20～25m²前後のものが多く、やや大型のものも見られる。Ａ、Ｃ区で２棟、Ｂ区で３棟の近接した掘建柱建物が見られるが、その中で棟方位や梁行等から同時存在の可能性、あるいは連続性を見出せるのはＢ区のＳＢ５～７である。これらはほぼ平行するＳＤ13、ＳＤ14の２条の溝状遺構に挟まれ、方位も揃っている。また、ＳＤ13とＳＤ15は延長上で直交する位置関係にあり、これらの掘建柱建物と溝状遺構は互いに関連した屋敷地（区画）を構成する可能性が指摘されよう。

おわりに ― 遺跡の名称について ―

当遺跡の「六部市」という名称は、字名から取られたものであるが、遺跡周辺には「ろくぶいち殿」と呼ばれた館が存在したとの伝承が残っている。この地域を有し

ていた土豪が、所領を分割して相続したという名残ではないかと思われる。そうであるならば、「六部一」＝「六分一」であった可能性が考えられる。古文献や古い地籍図等でこのような名称が見られないか調べる必要があろう。こうした試みの積み重ねが、発掘調査では全容を知り得なかった遺跡の一面を浮かび上がらせてくれるものと考えている。

註

(1) 東憲章　1994　「宮崎県出土常滑焼集成」『宮崎考古』13　宮崎考古学会

(2) 南九州内陸部においては、古墳時代初頭まで円形プランの竪穴住居が残ることは指摘されているが、ＳＡ16出土の高坏は、古墳時代前期の中でもやや新しい傾向を持つものと考えている。

(3) 宮崎県教育委員会　1989　「原田・上江遺跡」『昭和63年度農業基盤整備事業に伴う遺跡調査概要報告書』

(4) えびの市教育委員会　1990　「小木原遺跡群蕨地区（Ａ・Ｂ地区）」－上江・池島地区県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ｉ－『えびの市埋蔵文化財調査報告書』第６集

(5) 都城市教育委員会　1989　「松原第Ｉ遺跡」『松原地区第Ｉ・II・III遺跡』

(6) 宮田浩二・東憲章　1994　「宮崎県南部における中世城郭の一例 ― 串間市櫛間城 ― 」『宮崎考古』13　宮崎考古学会

(7) 串間市　1974　『串間市郷土史』

参考文献

岡本武憲　1995　「九州南部」『概説　中世の土器・陶磁器』　中世土器研究会編

都城市教育委員会　1991　「平成２年度遺跡発掘調査概報　都ノ城跡（主郭部）」『都城市文化財調査報告書』第13集

第１表　出土土器観察表（１）

遺物実測番号	種別	器種	出土地点	法量（cm） 口径	底径	器高	形態・文様・調整等	色調 外面	内面	備考
1	陶器	碗	SA３	(9.9)	(4.5)	5.9	口唇部釉剝ぎ、蛇目釉剝ぎ、畳付露胎、内外面に貫入、高台内に工具痕	灰白	灰白	
2	陶器	土瓶	SA３	—	—	—	全体に鉄釉	黄灰	オリーブ黒	
3	陶器	甕	SA４	(28.8)	—	—	外面に鉄釉、外面に貼り付け突帯 口縁部上面に貝殻痕	暗灰黄 灰赤、暗赤褐	暗灰黄	薩摩
4	陶器	甕	SA４	—	(21.3)	—	全体に鉄釉 内面と、外面下部にカキ目	にぶい赤褐 灰白、灰オリーブ	暗赤褐	
7	青磁	碗	SA５	—	—	—	外面に蓮弁 全体に貫入	オリーブ	オリーブ	中国産
8	青磁	皿	SA５	—	—	—	全体に貫入 稜花皿	オリーブ灰	オリーブ灰	中国産 15C中～16C前
9	青磁	皿	SA５	—	—	—	全体に貫入 稜花皿	明緑灰	明緑灰	中国産 16C後
10	陶器	こね鉢	SA５	—	—	—	内面に５条単位の櫛描き目	にぶい黄橙	にぶい黄橙	
11	土師質	ほうろく把手	SA５	—	—	—	把手下側にスス付着	黒褐 灰白	灰白	
15	土師質	坏	SA６	(11.2)	(7.2)	2.5	油痕 糸切り底	浅黄橙 淡黄	淡黄 にぶい褐	灯明皿
16	青磁	碗	SA６	(13)	—	—	剣先蓮弁文、内面にヘラ描文	オリーブ	オリーブ	中国産 15C後～16C中
17	深付	碗	SA６	(12.1)	—	—	草花文 全体に貫入	灰白	灰白	福建広東系 16C後
18	染付	碗	SA６	—	(4.4)	—	草花文	灰白	灰白	中国産 16C後
19	染付	碗	SA６	(12.9)	(4.6)	6	端反り 見込に草花文、四方襷文	白	白	景徳鎮 16C後
20	陶器	擂り鉢	SA６	—	14	—	内面に斜方向とタテ方向が交わる条線が見られる。外面に指紋が多数見られる。	赤	灰赤 褐灰	在地系
21	陶器	碗	SA８	(9.3)	(3.8)	6.4	高台、高台内、露胎	灰白	灰白	
22	染付	皿	SA８	—	(3)	—	碁笥底、底部外面釉剝ぎ 芭蕉葉文	白	白	中国産
23	陶器	皿	SA８	—	—	—	外面下半に露胎	オリーブ黄	オリーブ黄	88と同一個体
24	青磁	皿	SA９	—	—	—	端反り、全体に貫入	オリーブ灰	オリーブ灰	中国産 14C～15C
25	青磁	盤	SA９	—	—	—	蓮弁	オリーブ灰	オリーブ灰	中国産 14C
26	土師質	ほうろく	SA10	—	—	—	外面スス付着	黒 浅黄橙	浅黄橙	
27	陶器	蓋	SA10	(10.7)	—	—	内面露胎	暗灰黄	暗灰黄	
28	陶器	壺	SA11	—	—	—	内面、体部中央は露胎 内、外面に鉄釉	灰褐	灰褐	
29	陶器	皿	SA11	—	(3.9)	—	高台、高台内、体部下半は露胎 内・外面に貫入	浅黄	浅黄	京焼風 肥前か？
30	染付	碗	SA11	(10)	—	—	草花・笹文	灰白	灰白	肥前系 18C後
31	染付	碗	SA11	(9.7)	—	—		灰白	灰白	肥前系 18C後
32	染付	碗	SA13・SK4	(8.6)	(3.7)	5.4	全体に貫入、口縁部内面と見込に圏線 畳付露胎	白	白	肥前系 18C後
33	土師器	高杯	SA16	—	—	—	タテ方向と横方向のハケ目 風化気味	にぶい黄橙	橙 灰黄褐	古墳前期
34	陶器	甕	SK２	(18.8)	—	—	口唇部横方向の２条の浅い沈線文 内面ヨコナデ後５本単位の櫛目	にぶい赤褐 灰黄褐	にぶい赤褐	薩摩
35	青磁	碗	SK３	(12)	—	—		灰オリーブ	灰オリーブ	国産
37	染付	碗	SK４	(8.4)	(3.8)	5	矢羽文、口縁内面と見込に圏線 畳付露胎	白	白	肥前 18C後
38	陶器	鉢	SK４	—	—	—	内面に波状の模様	灰褐 白	灰褐 白	
39	陶器	蓋	SK４	—	—	—	外面貫入、鉄釉	褐	褐	
40	陶器	蓋	SK４	(4.4)	—	3.6	外面鉄釉	暗赤褐	暗赤褐	
41	土師質	羽釜	SD２	—	—	—	風化気味	橙	橙	
42	陶器	甕	SD２	—	—	—	口縁部上面は露胎、口縁部下に２条の突帯	黒褐	黒褐	

第２表　出土土器観察表（２）

遺物実測番号	種別	器種	出土地点	法量（cm）			形態・文様・調整等	色調		備考
				口径	底径	器高		外面	内面	
43	陶器	甕	SD２	—	—	—	口縁部上面は露胎・一部重ね焼の跡有り	黒褐	黒褐	
44	白磁	碗	SD２	—	—	(5.1)	稜花	白	白	
45	陶器	碗	SD２	11.2	4.1	6	蛇目釉剥ぎ 畳付露胎	灰白、灰オリーブ にぶい橙	灰白、灰オリーブ にぶい橙	
46	陶器	碗	SD２	11.8	5.1	7.1	蛇目釉剥ぎ 畳付露胎	赤黒 極暗赤褐	赤黒 極暗赤褐	
47	陶器	碗	SD２	(7.6)	(4)	4	高台・高台内・体部下半は露胎	オリーブ褐	オリーブ褐	
48	陶胎染付	碗	SD２	(9.9)	(4)	4	高台・高台内・体部下半は露胎 全体に貫入	黄	黄	関西系
49	染付	皿	SD２	(10.6)	(5)	2.8	人型「寿」字文 畳付露胎、碁笥底	灰白 赤褐	灰白 赤褐	中国産 16Ｃ後
50	陶器	皿	SD２	(11.5)	—	—	全体に貫入	灰白	灰白	肥前 17Ｃ前
51	陶器	蓋	SD２	(7.4)	—	3.9	受部スス付着	にぶい黄褐	橙	
52	青磁	瓶	SD２	—	—	—	内・外面貫入、内面下半は露胎	灰白	灰白	肥前
53	陶器	瓶	SD２	5.6	—	—	内面頸部～胴部露胎	暗赤褐	暗赤褐	在地系
57	土師質	ほうろく	SD５	(19.6)	(15.4)	3.7	外面スス付着	灰褐	にぶい橙 灰褐	
58	陶器	甕	SD５	—	—	—	口縁部上面露胎、口縁部下に突帯	暗褐	暗褐	
59	陶器	甕	SD５	—	—	—	口縁部上面露胎	黒褐	黒褐	
60	陶器	碗	SD５	—	6.1	—	高台・高台内・体部下半露胎	浅黄	浅黄	
61	陶器	碗	SD５	(9.4)	(4.6)	6.8	外面にヘラ状工具による刻み、暗文、蛇目釉剥ぎ、口唇部・畳付露胎	明黄褐	明黄褐	
62	染付	碗	SD５	(11.2)	(4.2)	5.9	畳付露胎	白	白	
63	陶器	皿	SD５	9.3	4.2	2.3	内・外面に重ね焼きの目跡 糸切り底	褐	褐	
65	土師質	坏	Ｐ５	(12.8)	(7.4)	2.5	糸切り底	にぶい橙	にぶい黄橙	
66	陶器	碗	Ｐ20	—	(5.5)	—	畳付・高台内露胎	灰白	黒褐	
67	染付	碗	Ｐ１	(13.4)	(5)	5.1	外面貫入、草花文 見込み・高台・体部下半露胎	灰白	灰白	
68	白磁	皿	Ｐ３	(12.8)	(6.6)	3.1	畳付露胎	灰白	灰白	
72	土師質	壷	Ａ区	—	—	—	内面ヘラ削りの後ナデ	赤橙	赤橙	
73	土師質	坏	Ａ区	(10.7)	(6.8)	2.8	糸切り底	灰白	浅黄橙	
74	陶器	甕	Ａ区	—	—	—		オリーブ黒	オリーブ黒	
75	陶器	甕	Ａ区	—	—	—	内面・口唇部・外面に鉄釉 口縁部上面露胎・突帯２条	灰褐 暗赤褐	灰褐 暗赤褐	
76	陶器	甕	Ａ区	(34)	—	—	口縁部上面に貝殻痕 外面鉄釉・一部露胎	にぶい黄褐 暗褐	にぶい黄褐 暗褐	
77	陶器	甕	Ａ区	(22.7)	—	—	外面に沈線有り	オリーブ黒	オリーブ黒	
78	陶器	甕	Ａ区	(9.4)	—	—	全体に鉄釉	赤黒	赤黒	
79	陶器	甕	Ａ区	—	—	7.4	内面ヘラケズリ 外面ヘラケズリ後ナデ	にぶい赤褐	灰赤	
80	陶器	壷	Ａ区	(8.2)	—	—		にぶい赤褐	にぶい赤褐	
81	陶器	壷	Ａ区	—	—	—	内・外面鉄釉、口唇部一部鉄釉 外面にカキ目	にぶい赤褐	赤黒	
82	青磁	碗	Ａ区	(11.9)	—	—		オリーブ灰	オリーブ灰	中国産
83	青磁	碗	Ａ区	—	—	—	全体に貫入 剣先蓮弁文	オリーブ灰	オリーブ灰	中国産 15Ｃ～16Ｃ
84	染付	碗	Ａ区	—	—	4.6	全体に貫入 畳付釉剥ぎ	明緑灰	明緑灰	中国産
85	陶器	碗	Ａ区	(8.9)	(4.2)	6	口唇部内面釉剥ぎ、蛇目釉剥ぎ 畳付き釉剥ぎ	灰黄	灰黄	

第3表　出土土器観察表（3）

遺物実測番号	種別	器種	出土地点	法量（cm）			形態・文様・調整等	色調		備考
				口径	底径	器高		外面	内面	
86	陶器	碗	A区	10.8	4.9	6.5	高台・高台内・体部下半は露胎	にぶい黄	にぶい黄	
87	白磁	皿	A区	9	3.8	2.1	蛇目釉剥ぎ 畳付き露胎	白	白	
88	陶器	皿	A区	(9.9)	(4.2)	2.8	内面・口縁・外面上部貫入 高台内・高台・外面下半露胎	オリーブ	オリーブ	23と同一個体
89	白磁	皿	A区	(8.8)	(3.3)	1.8	切り高台、全体に貫入 見込み・畳付きに4箇所の目跡	灰白	灰白	中国産
90	陶器	仏飯器	A区	—	4.8	—	蛇目釉剥ぎ 脚部内・脚部裾・脚部下半露胎	暗オリーブ	暗オリーブ	
91	陶器	鉢	A区	—	—	—	内面に放射状の櫛目有り、外面上部に釉がハケ塗りしてある。外面下半露胎	淡黄 浅黄	にぶい黄 黒褐	
92	陶器	蓋	A区	(8.2)	—	2.1	内面露胎 外面沈線・工具による刻み（暗文）	褐 明黄褐	褐 明黄褐	
95	土師質	坏	SK7	12.3	8.7	3.4	外面下半板状工具によるナデ 糸切り底	灰白 浅黄橙	灰白	
96	土師質	皿	SK7	7.8	7	1.5	糸切り底	橙	橙	
97	土師質	皿	SK7	8.1	6.8	1.5	糸切り底	浅黄橙 橙	浅黄橙 橙	
98	土師質	皿	SK7	7.8	6.6	1.5	糸切り底	橙 浅黄橙	にぶい橙	
99	土師質	皿	SK7	8.1	7.8	1.4	糸切り底 底部に指押さえ有り	橙	橙	
100	土師質	皿	SK9	7.6	7.1	1.5	風化気味	淡黄	淡黄	
101	土師質	坏	SD8	—	(9.2)	—	糸切り底	浅黄	浅黄橙	
102	土師質	皿	SD8	7.7	5.8	1.7	糸切り底・板目	にぶい橙	にぶい橙	
103	土師質	皿	SD8内土坑	(7.2)	(6)	1.5	糸切り底で指痕有り	浅黄橙	浅黄橙	
104	陶器	甕	SD8	—	—	—	自然釉	暗オリーブ	暗オリーブ	常滑焼
105	土師質	片口鉢	SD9	—	—	—	外面・タテ方向に工具痕 内面・板状工具の後ナデ、斜方向の板状工具	浅黄橙	浅黄橙	
106	土師質	坏	SD10	(10.3)	(7.8)	3.4	ヘラ切り底	浅黄橙	浅黄橙	
107	土師質	皿	SD10	(7)	(5.9)	1.6	糸切り底	灰白	淡黄	
108	陶器	甕	SD10	—	—	—	自然釉、外面タテ方向の削り痕	にぶい赤褐 にぶい黄	にぶい赤褐 にぶい黄	常滑焼
109	陶器	甕	SD10	—	—	—	自然釉	にぶい赤褐 にぶい黄	にぶい赤褐 にぶい黄	常滑焼
110	土師質	坏	SD11	(11.3)	(8.3)	3.3	糸切り底	淡黄	にぶい橙	
111	土師質	坏	SD11	(11.6)	(8.2)	3.9	糸切り底	橙	にぶい橙	
112	陶器	甕	SD13	—	—	—	折返し受け口縁	褐灰	褐灰	常滑焼
113	土師質	坏	B区	(11.4)	(8.3)	3.6	外面下半指頭痕 糸切り底・板目	橙	橙	
114	土師質	坏	B区	(12)	(8)	3.7	糸切り底	にぶい黄橙	浅黄橙	
115	縄文	浅鉢	B区	—	—	—	外面に横方向の沈線・竹管状の施文具による刺突	灰褐	にぶい赤褐	
116	縄文	深鉢	SD8内土坑	—	—	—	外面・タテと斜方向のミガキ	明赤褐	明赤褐	
117	縄文	浅鉢	C区	—	—	—	口縁・内面に貝殻条痕の後ナデ 外面に斜方向の貝殻腹縁による連続刺突文	明赤褐	暗赤褐	

遺構番号	平面形	棟方位	規模（cm）			床面積（m²）	柱穴数	柱穴状態（cm）		出土遺物	備考
			長軸	短軸	深さ			平均径	平均深		
SA1	方形	N65°W	245	225	20	5.0	10	20	20	陶磁器小片	
SA2	方形	N70°W	250	250	35	5.6	11	20	20		東壁に張出し
SA3	方形	N17°E	180	145	80	1.3	—	—	—	陶器（碗・土瓶）	
SA4	方形	N79°W	180	170	40	1.9	—	—	—	陶器甕（薩摩）、煙管	床面に漆膜
SA5	不整長方形	N21°E	704	450	45	30.6	(8)	30	20	中国産青磁16c.、煙管、石臼	西壁に張出し
SA6	方形	N32°E	255	250	60	5.7	12	15	30	中国産青磁・染付16c.	床面に白色粘土
SA7	方形	N70°W	210	205	50	3.7	7	20	25		南壁に張出し、床面に竹炭化物、礫投棄
SA8	方形	N69°W	310	285	40	7.6	10	25	30	中国産染付16c.	
SA9	方形	N65°W	200	—	80	(1.5)	—	—	—	中国産青磁14c.～15c.	
SA10	方形	N65°W	170	—	70	(0.5)	—	—	—	炮烙、陶器蓋	
SA11	方形	N68°W	180	—	40	(0.8)	—	—	—	肥前系染付・陶器18c.	
SA12	方形	N62°W	210	175	10	2.8	4	30	40		
SA13	方形	N24°E	200	195	10	—	—	—	—	肥前系染付18c.	北壁に張出し
SA14	方形	N30°E	230	195	30	3.5	—	—	—		南壁に張出し
SA15	不整円形	N15°E	290	240	10	3.1	—	—	—		
SA16	円形	—	—	—	10	—	—	—	—	高坏（古墳）	壁帯溝

第4表　六部市遺跡竪穴状遺構一覧表

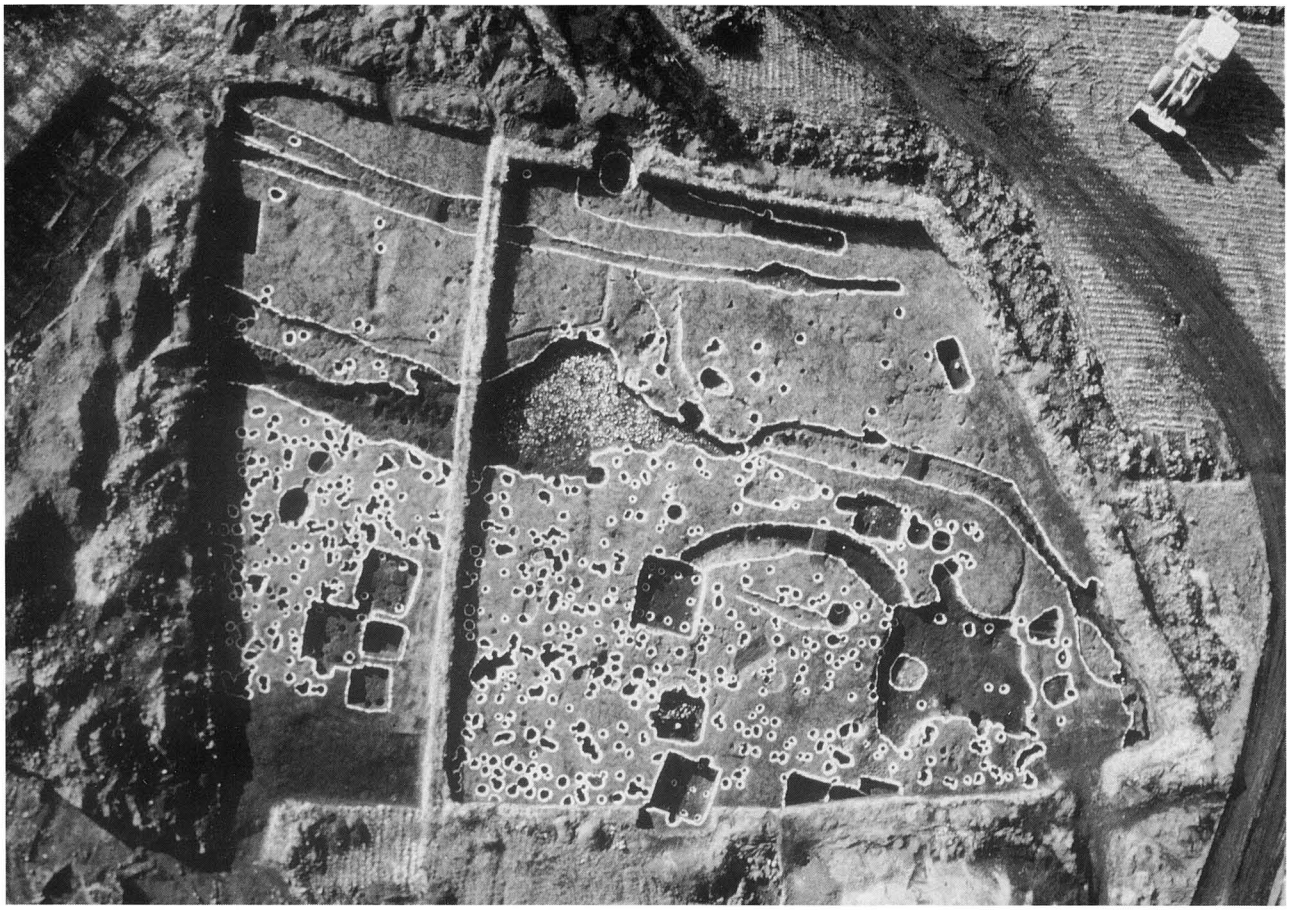
遺構番号	規模（間）	棟方向	棟方位	梁行（cm）		桁行（cm）		床面積（m²）	柱穴数	柱穴状態（cm）		備考
				実長	柱間	実長	柱間			平均径	平均深	
SB1	2×3	東～西	N75°W	407	204	510	170	21.1	9	40	48	SD2により柱穴1欠
SB2	1×3	東～西	N72°W	397	397	706	235	(27.5)	7	36	44	SD1により柱穴1欠
SB3	1×(4)	東～西	N77°W	334	334	815	204	(27.4)	8	33	36	東に延びる可能性有り
SB4	1×5	東～西	N73°W	409	409	998	200	(39.6)	9	38	32	
SB5	1×(3)	南～北	N13°E	348	348	(538)	179	(19.5)	7	30	18	
SB6	1×3	東～西	N83°W	362	362	668	223	(23.8)	6	50	58	
SB7	1×3	東～西	N78°W	298	298	580	194	(17.8)	7	25	18	
SB8	2×3	東～西	N80°W	410	205	624	208	25.5	10	32	30	
SB9	2×5	東～西	N74°W	392	196	1130	226	(44.4)	13	38	22	

第5表　六部市遺跡掘立柱建物一覧表

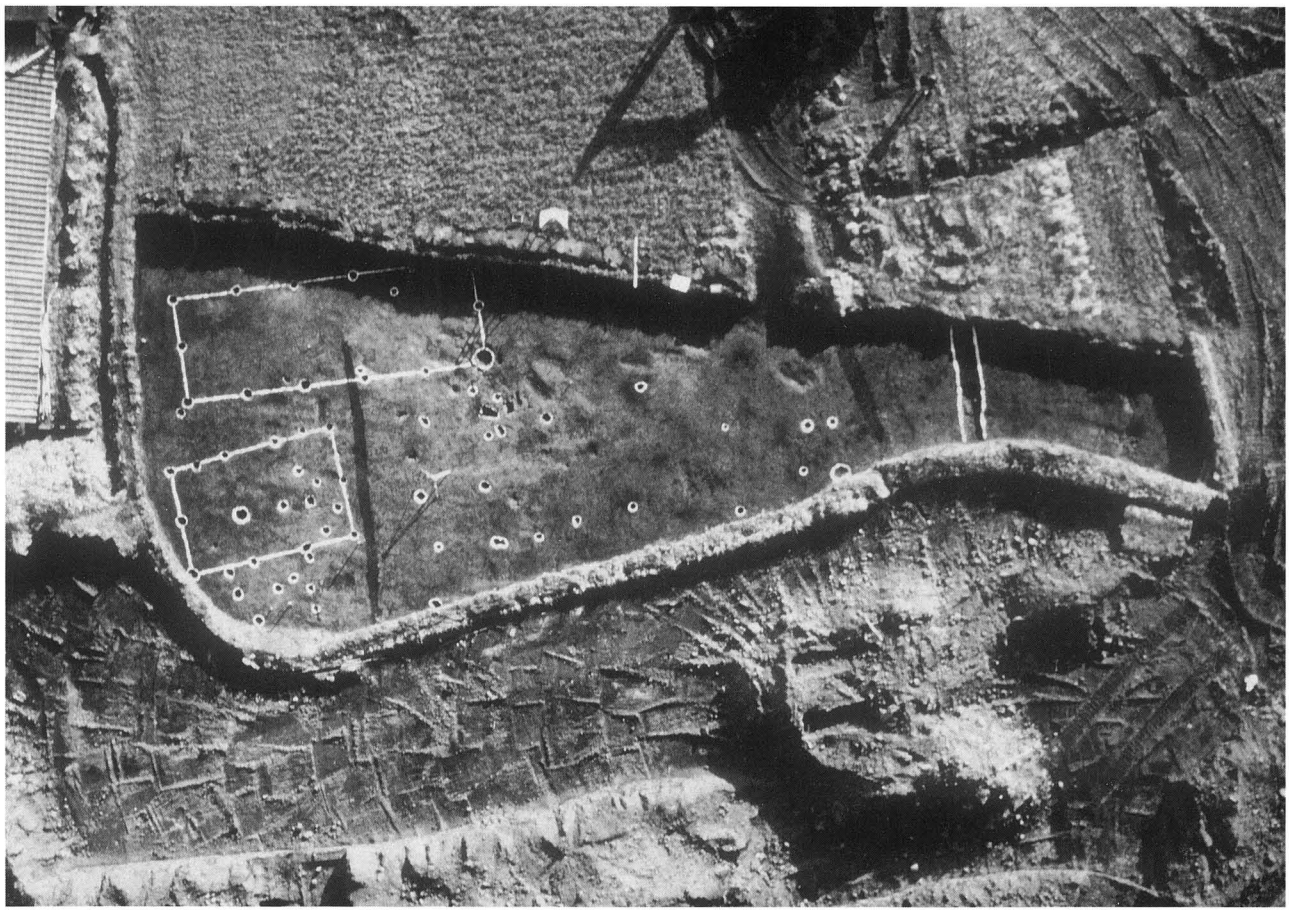
六部市遺跡全景（斜）

六部市遺跡全景（垂直）

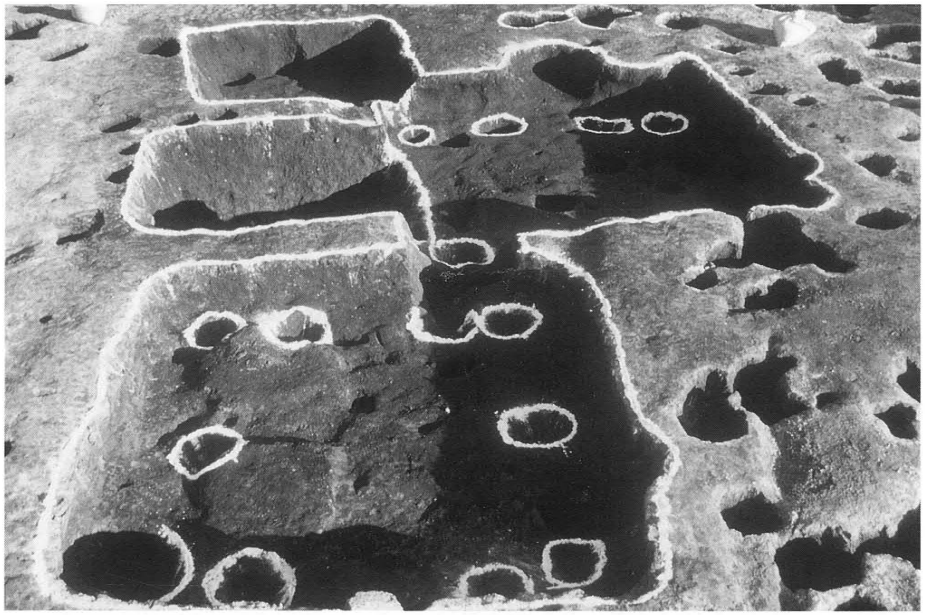
図版 2



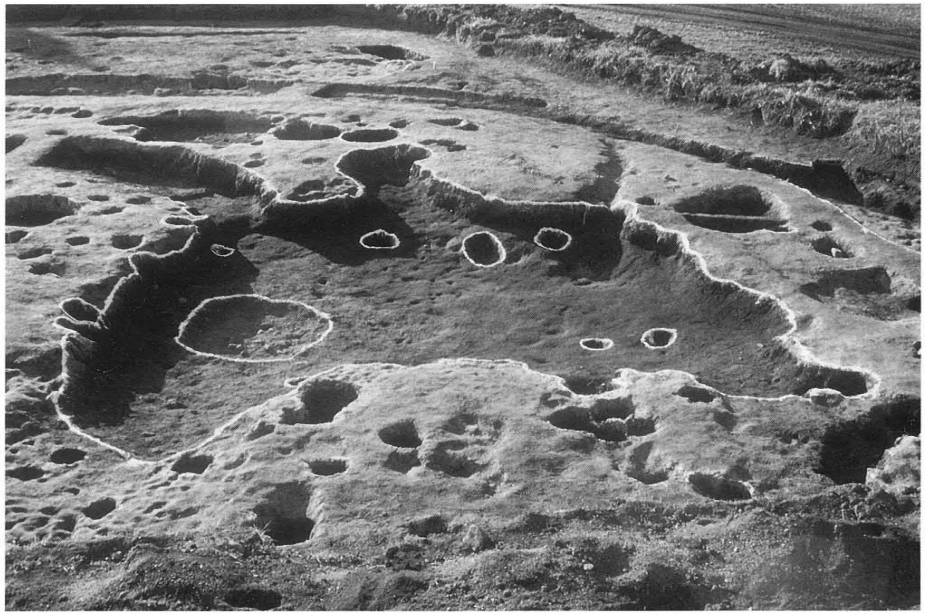
六部市遺跡 A 区



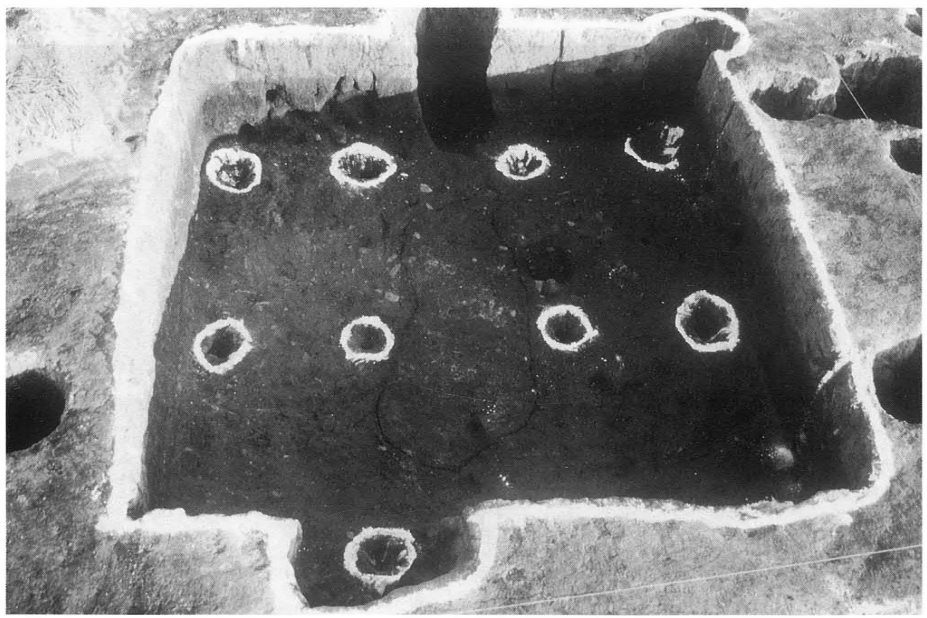
六部市遺跡 C 区



ＳＡ１～４



ＳＡ５

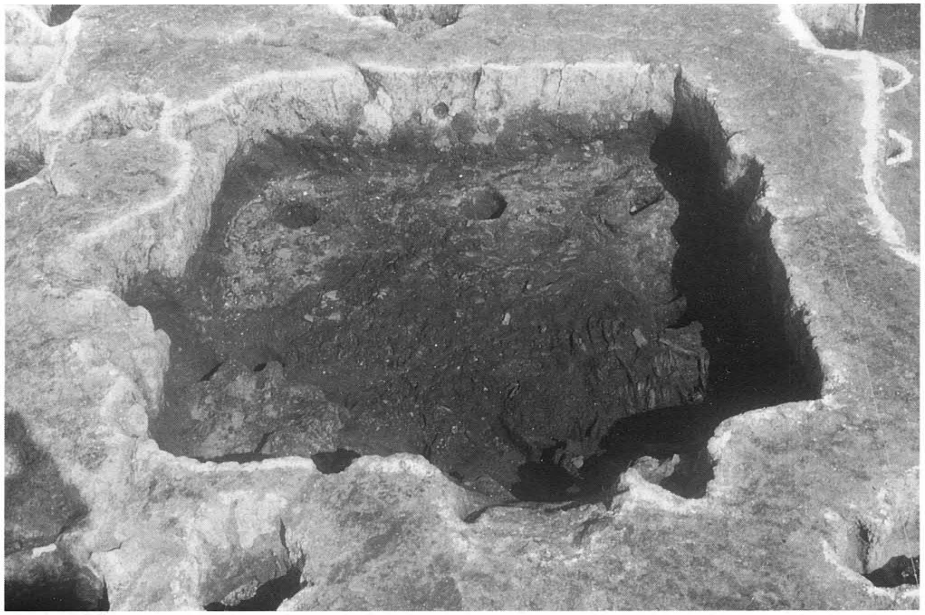


ＳＡ６

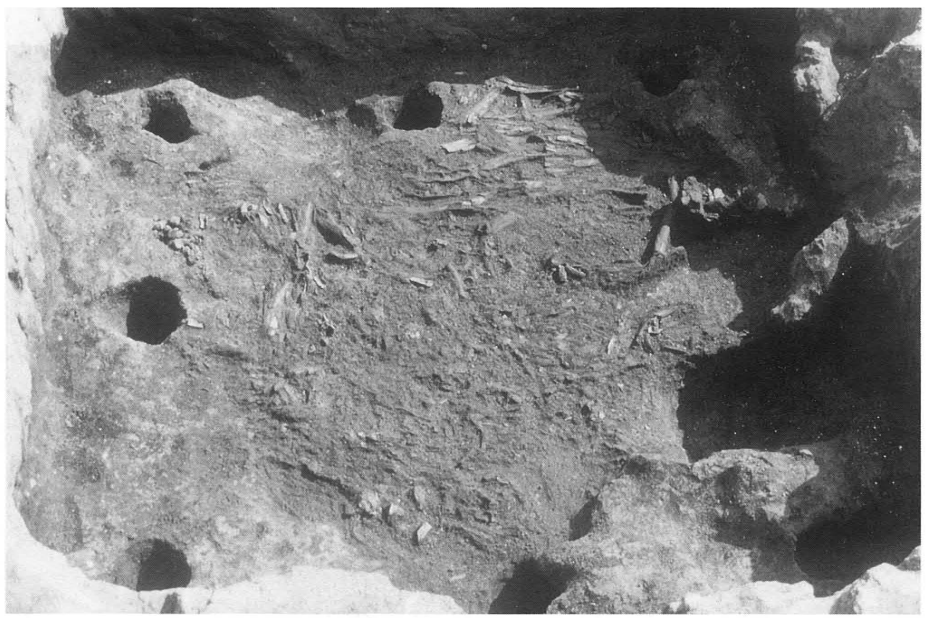
ＳＡ５　礫集積

図版３

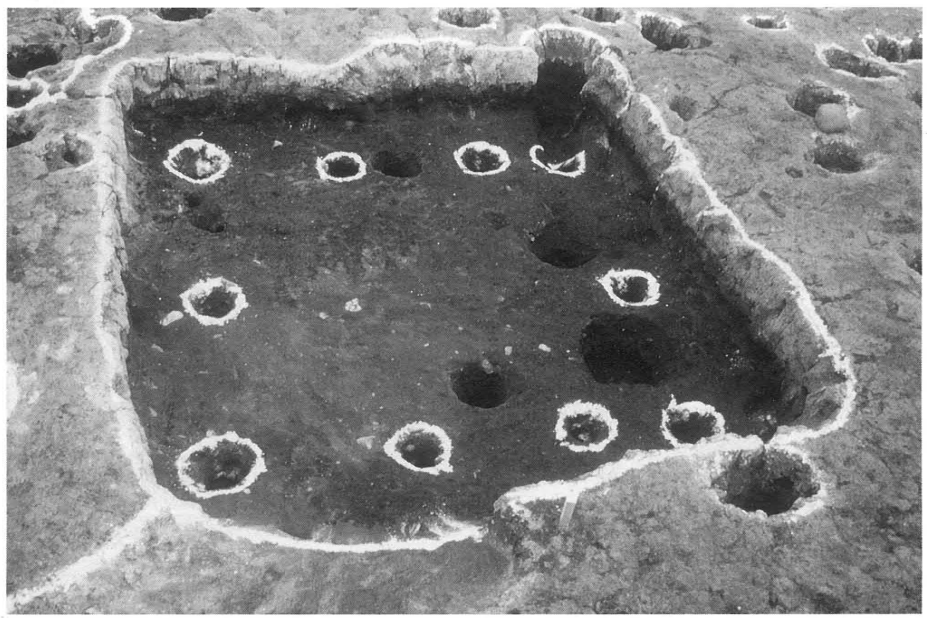
ＳＡ７



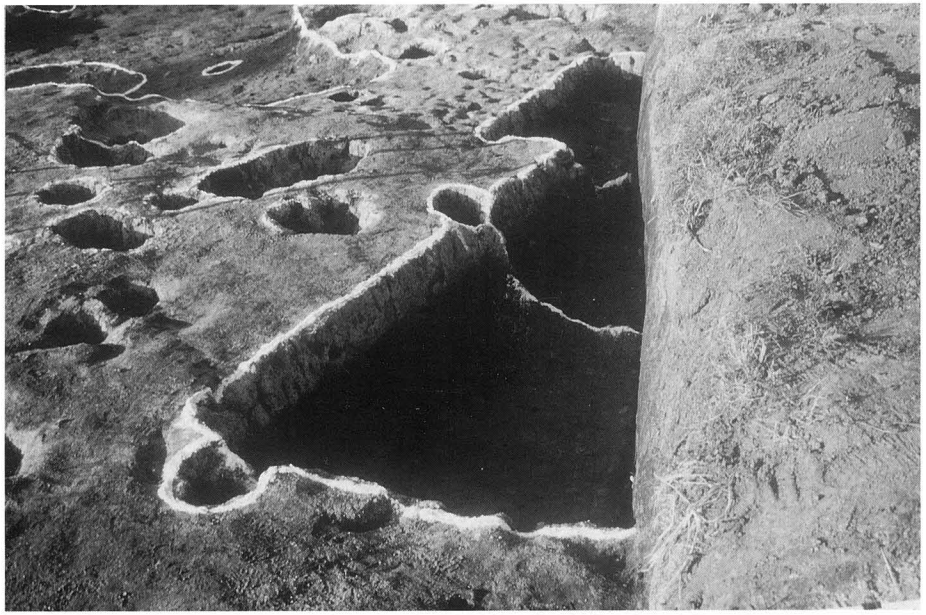
ＳＡ７　完掘状況



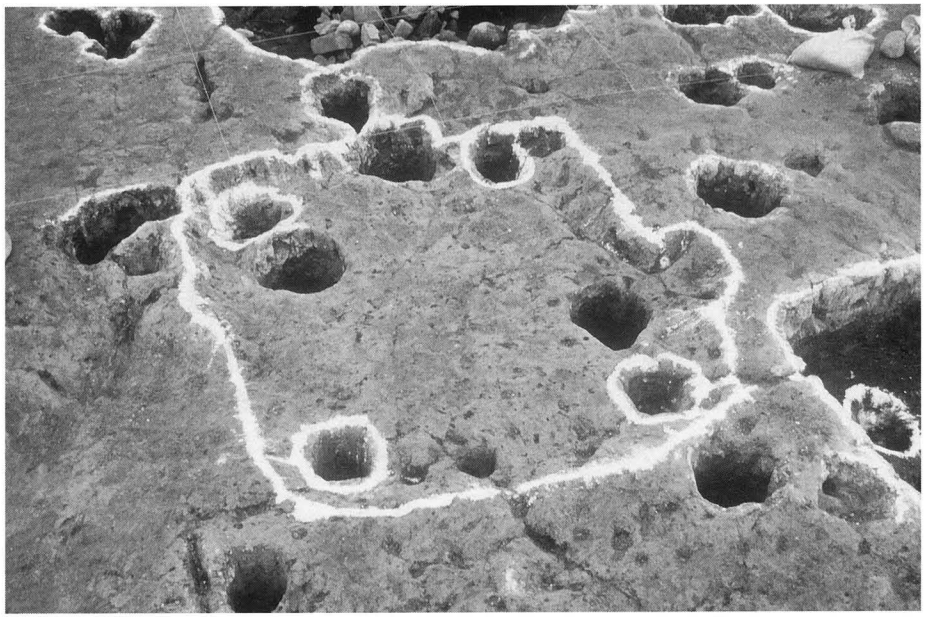
ＳＡ７　床面炭化物



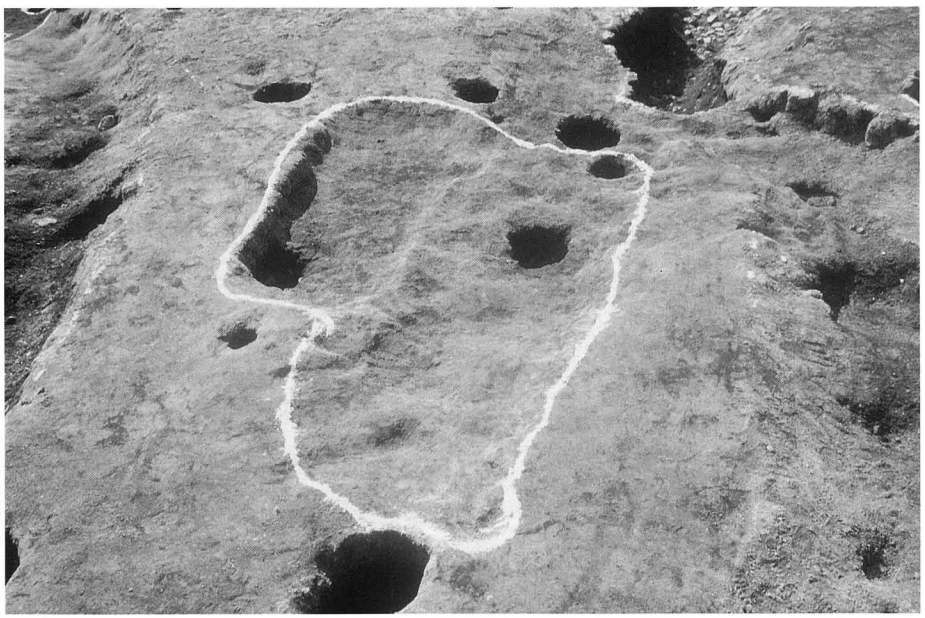
ＳＡ８



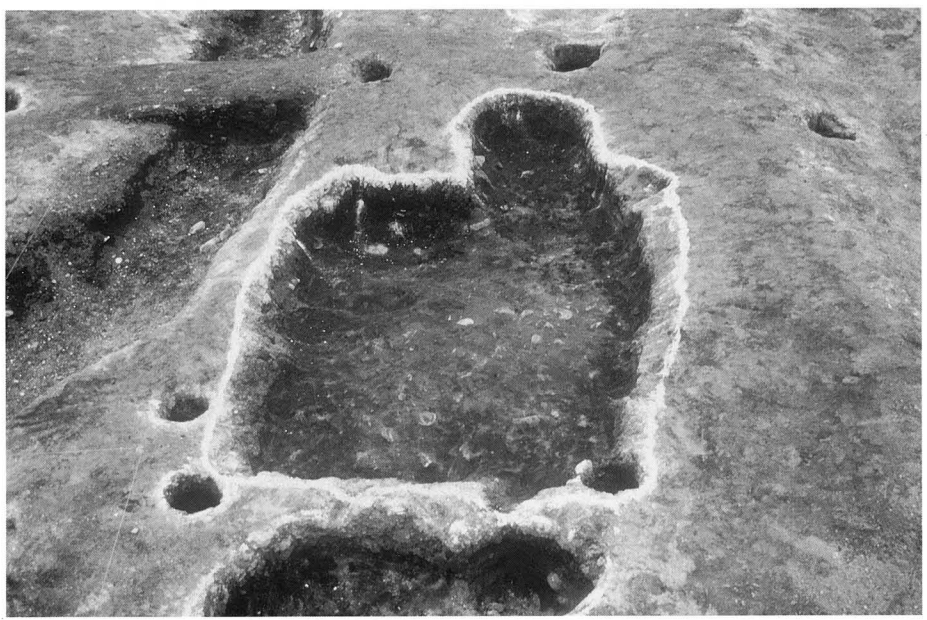
S A 9 ～11



S A 12



S A 13

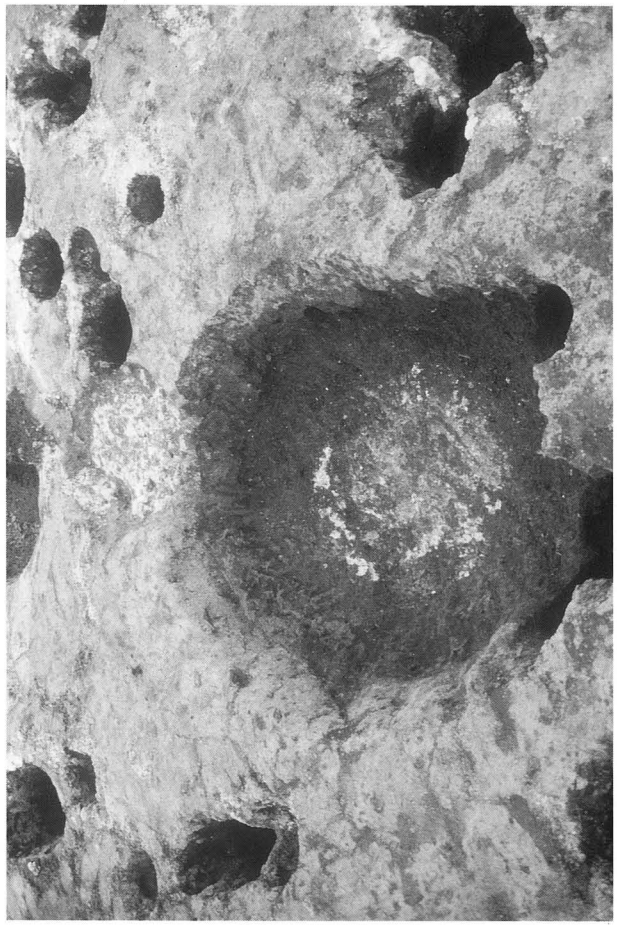


S A 14

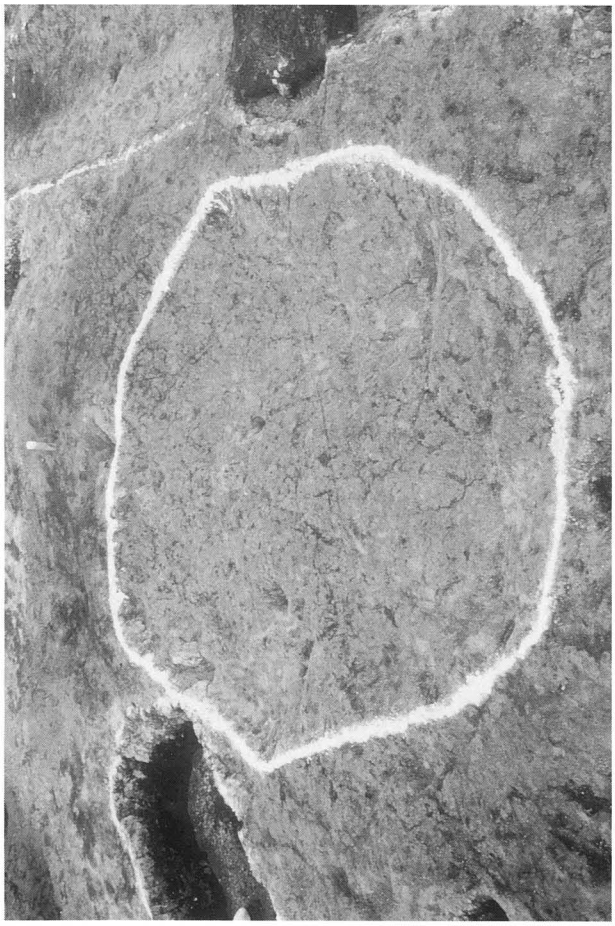
図版 5

図版 6

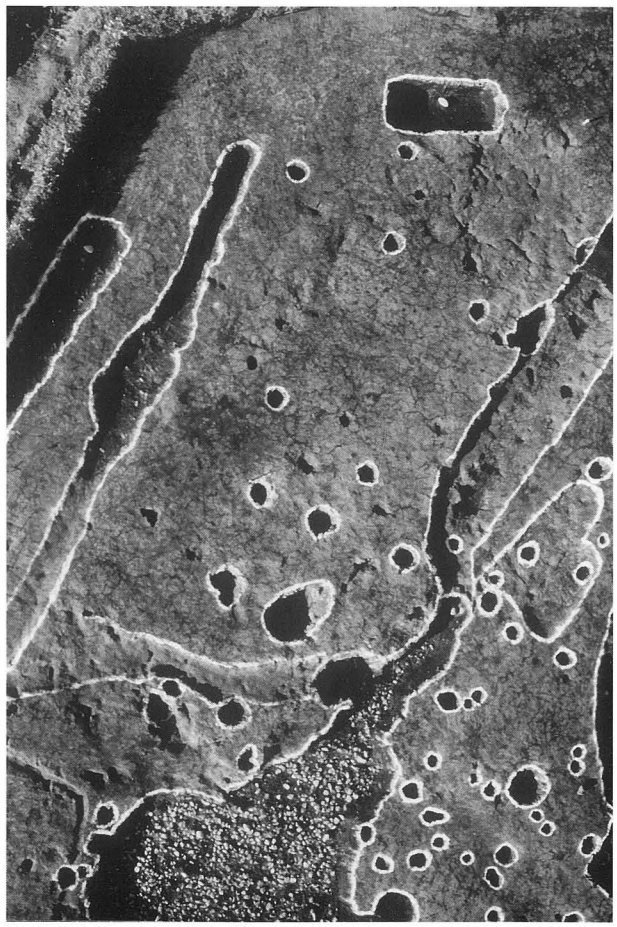
S A 16



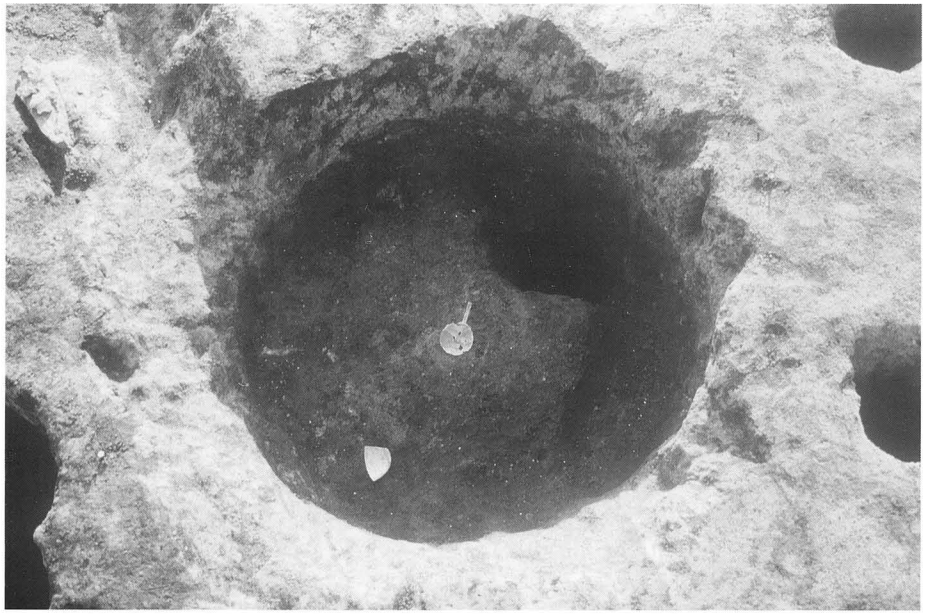
S K 1



S A 15



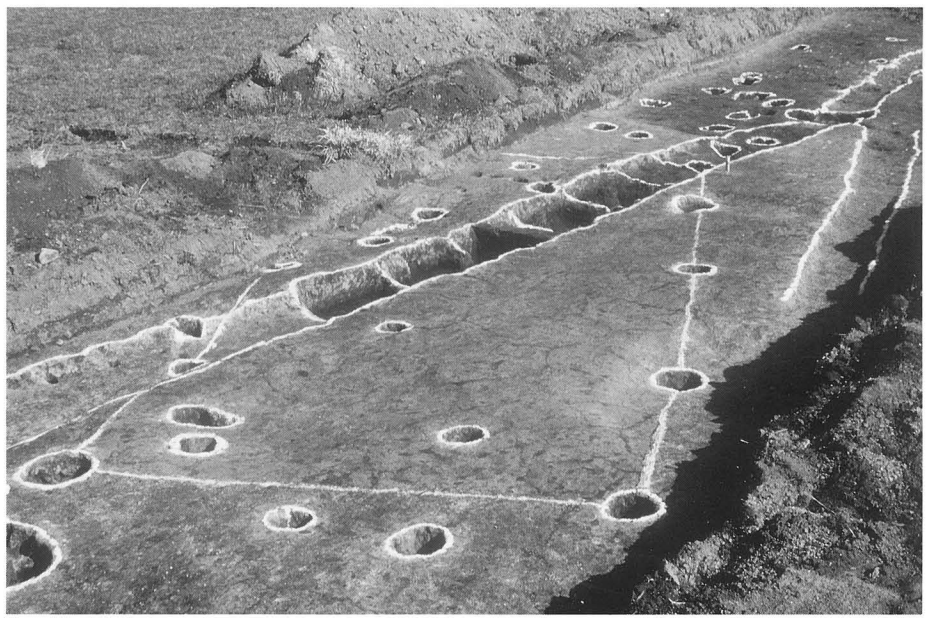
S B 1 ・ 2



S K 3

S K 5

S K 6



S B 3

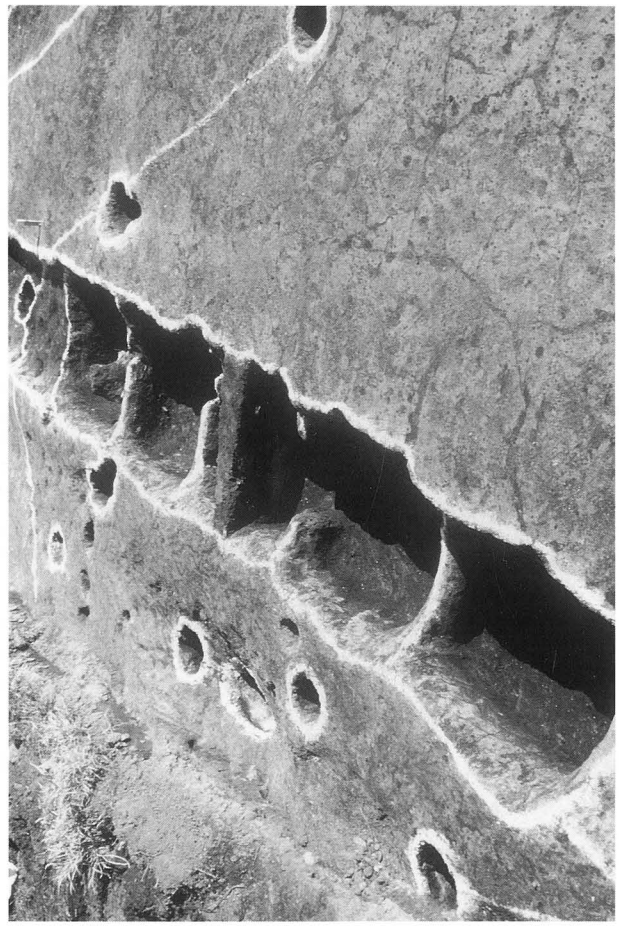
図版 7

図版 8

S B 5 ～ 7

S D10・11

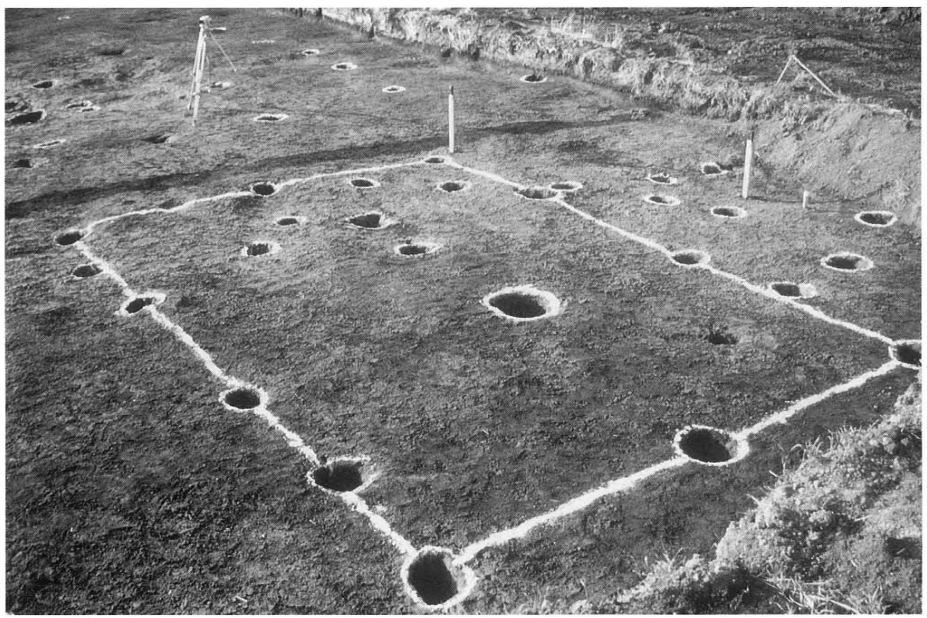
S B 4



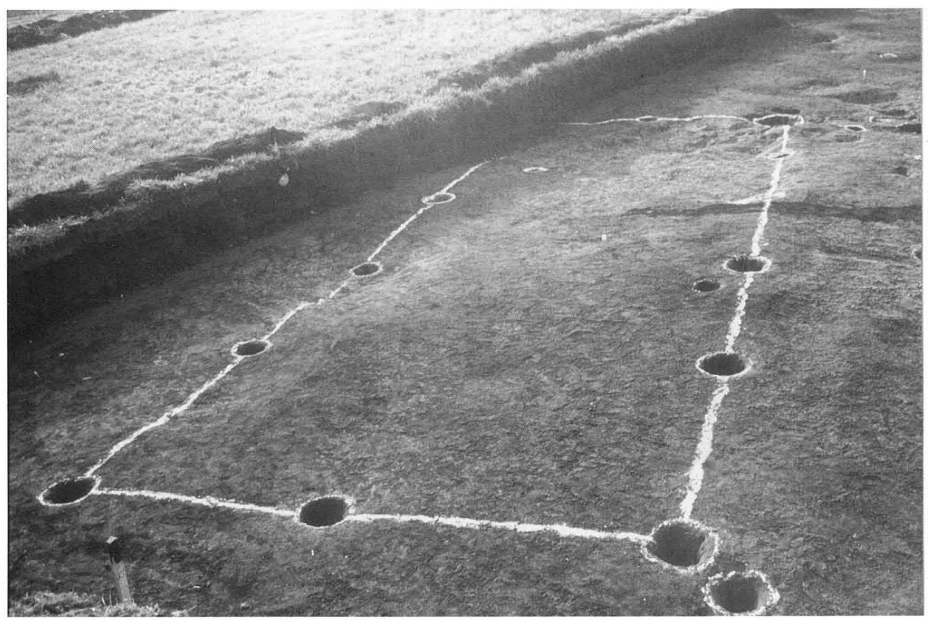
S D 8

ＳＫ７

ＳＫ７　土師質工器出土状況



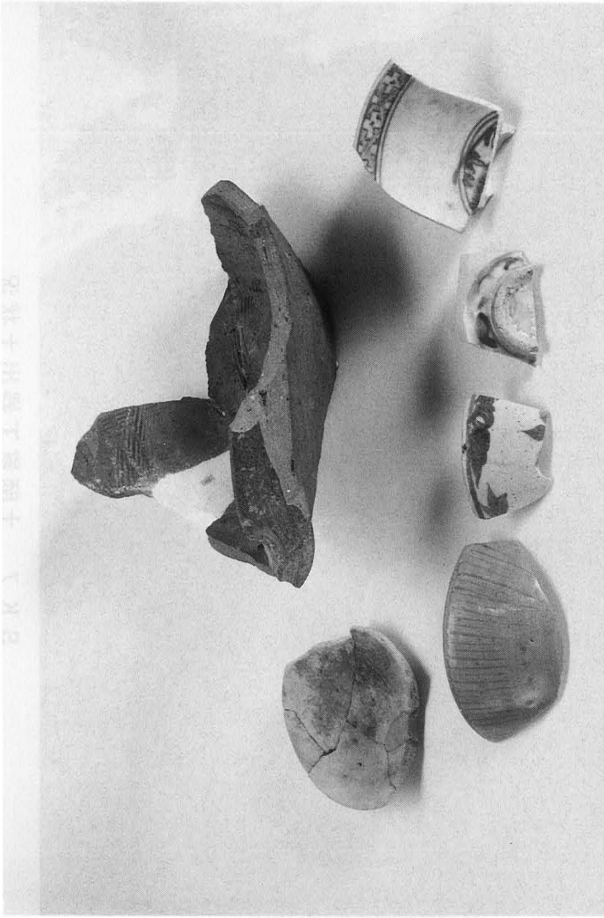
ＳＢ８



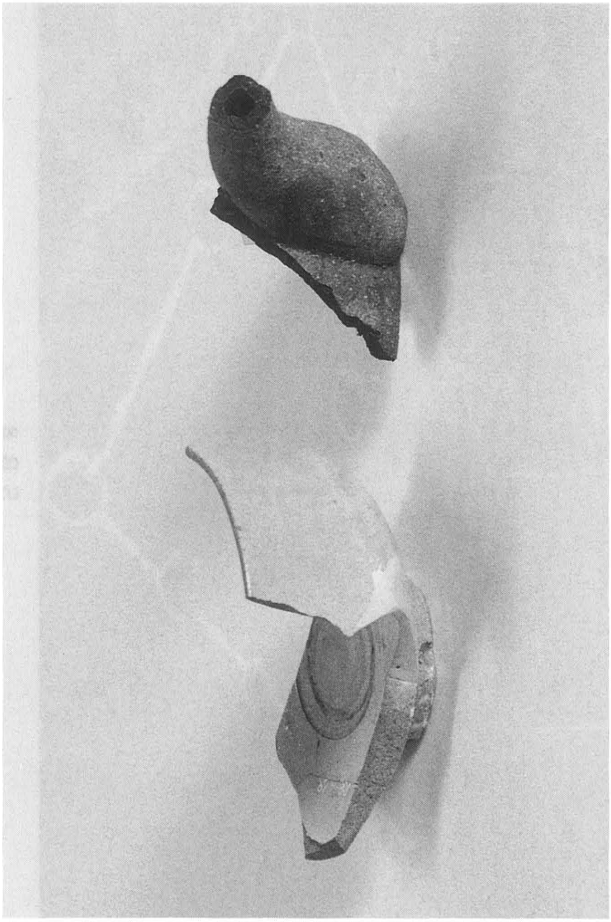
ＳＢ９

図版10

ＳＡ４　出土遺物

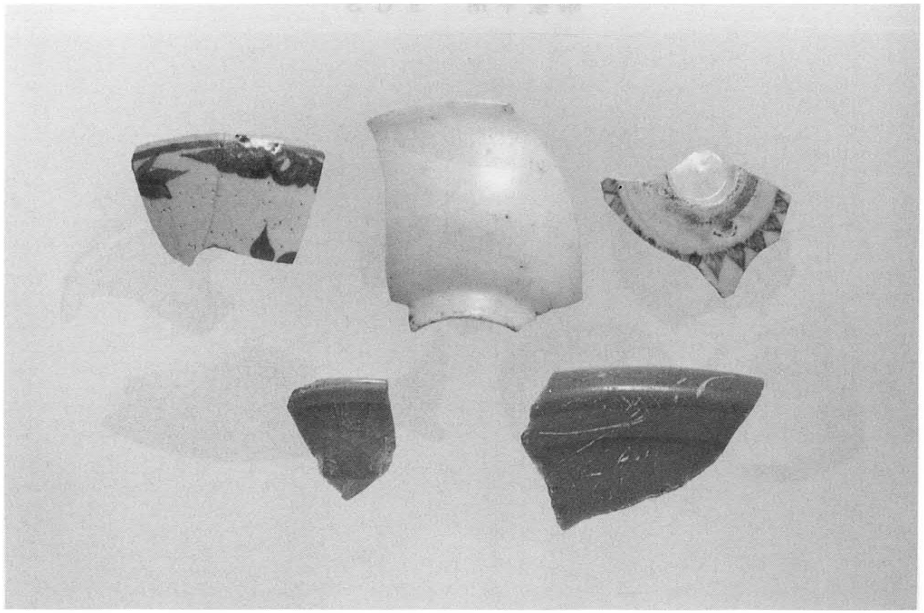


ＳＡ６　出土遺物

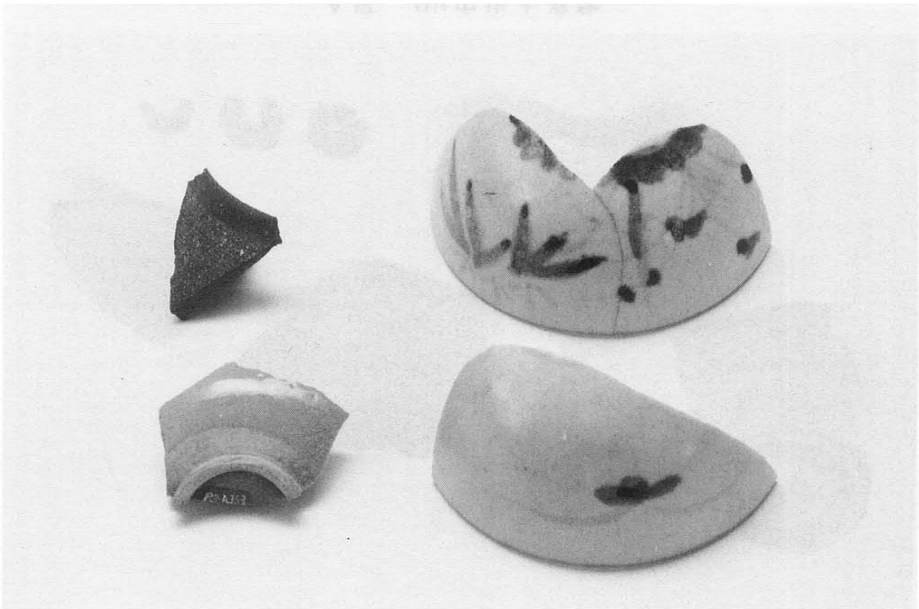


ＳＡ３　出土遺物

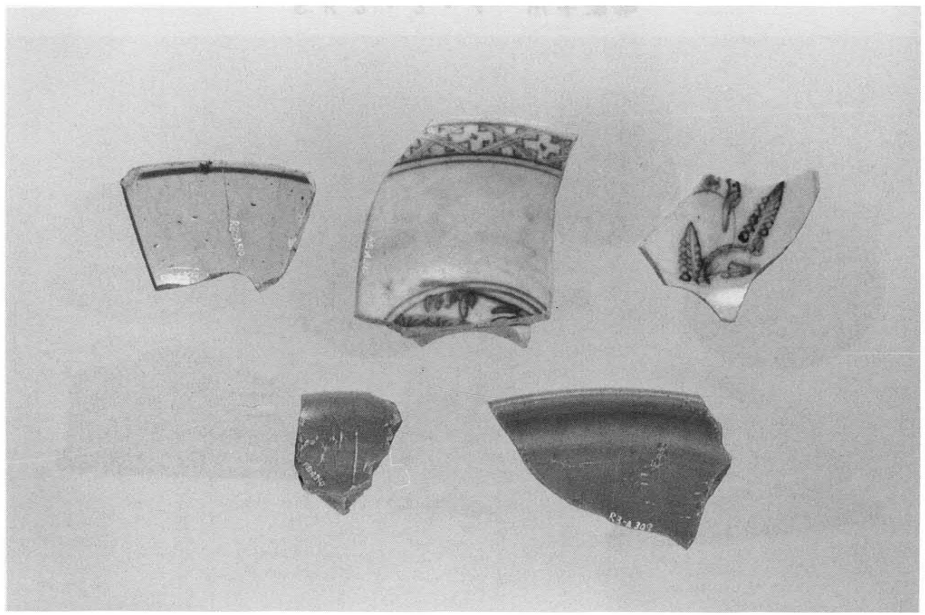
ＳＡ５　出土遺物



ＳＡ６・８・９　出土輸入陶磁器(外面)



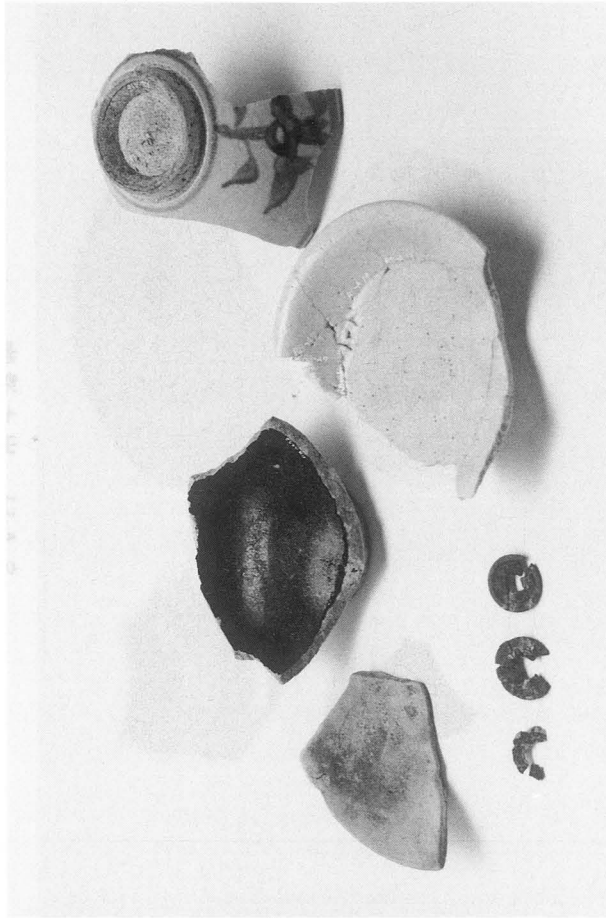
ＳＡ11　出土遺物



ＳＡ６・８・９　出土輸入陶磁器(内面)

ＳＡ13・16　出土遺物

ＳＤ２　出土遺物

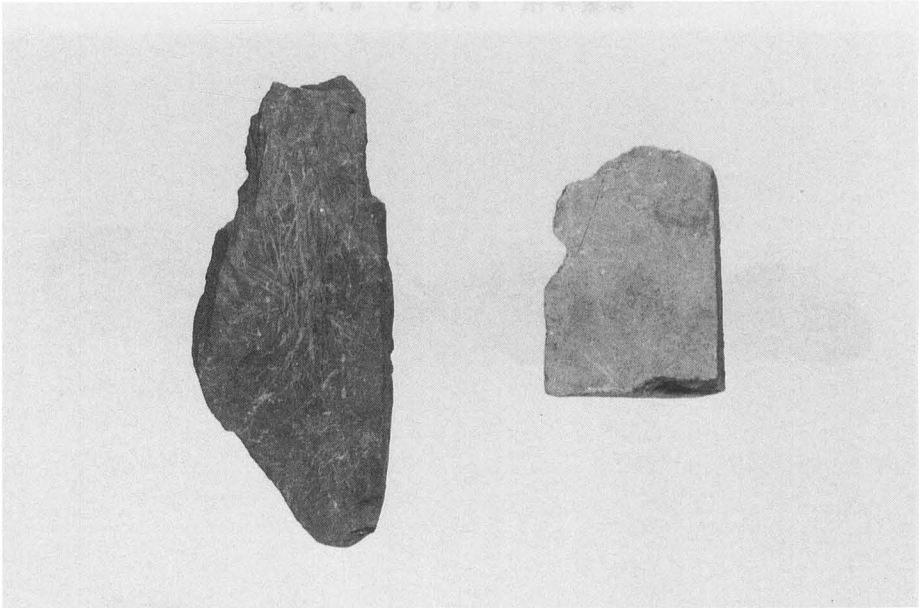


Ａ区　Pit内出土遺物

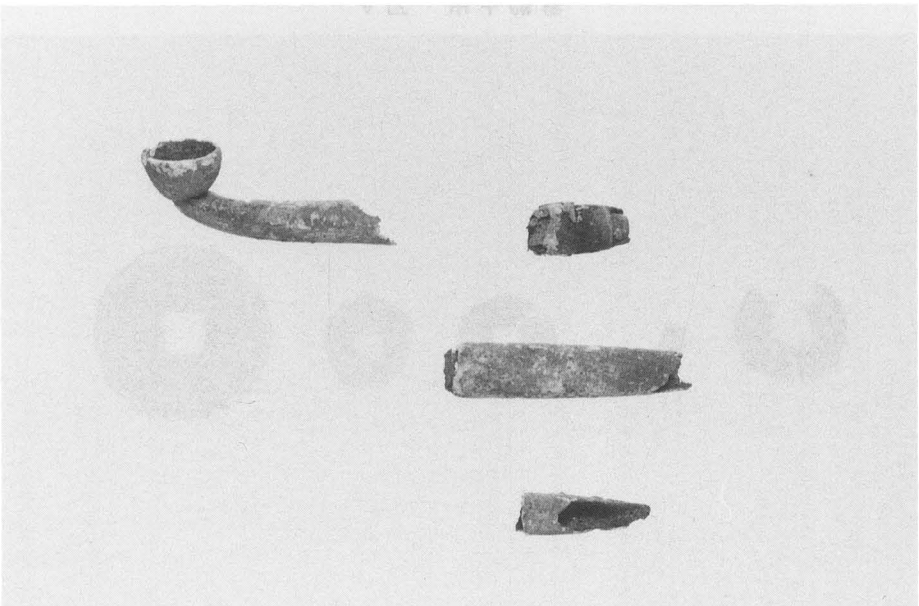
ＳＫ２・３・４　出土遺物

ＳＤ５　出土遺物

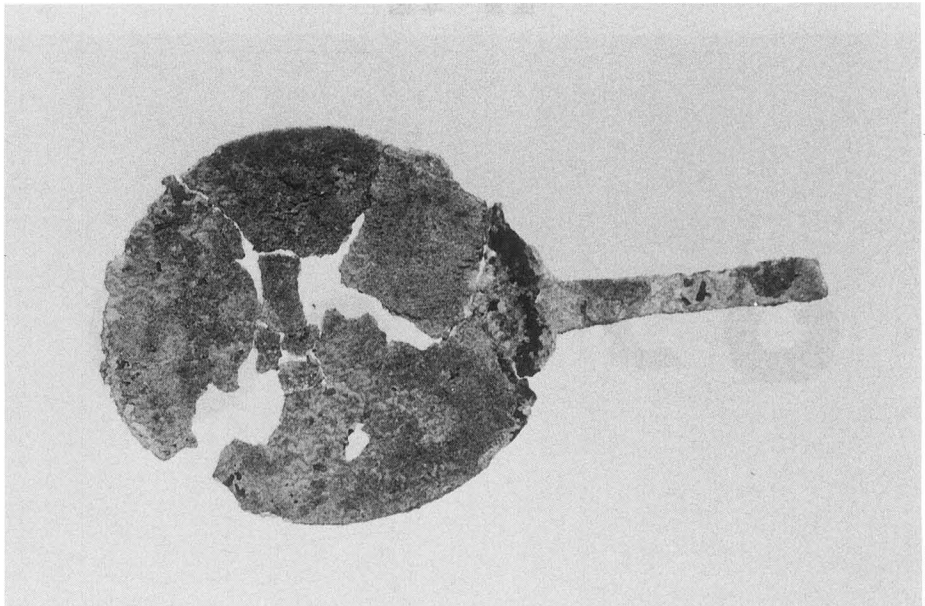
A区　包含層出土遺物



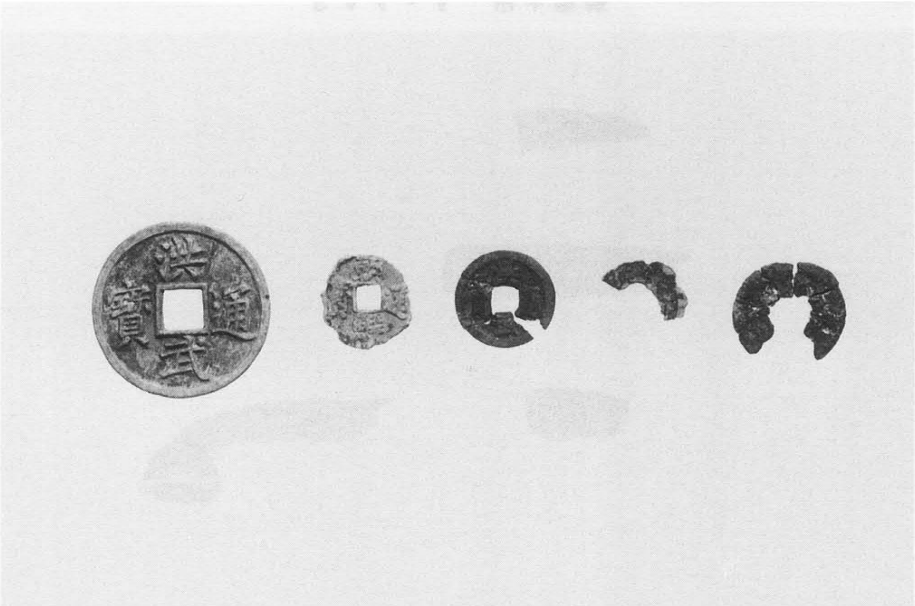
同左　砥石



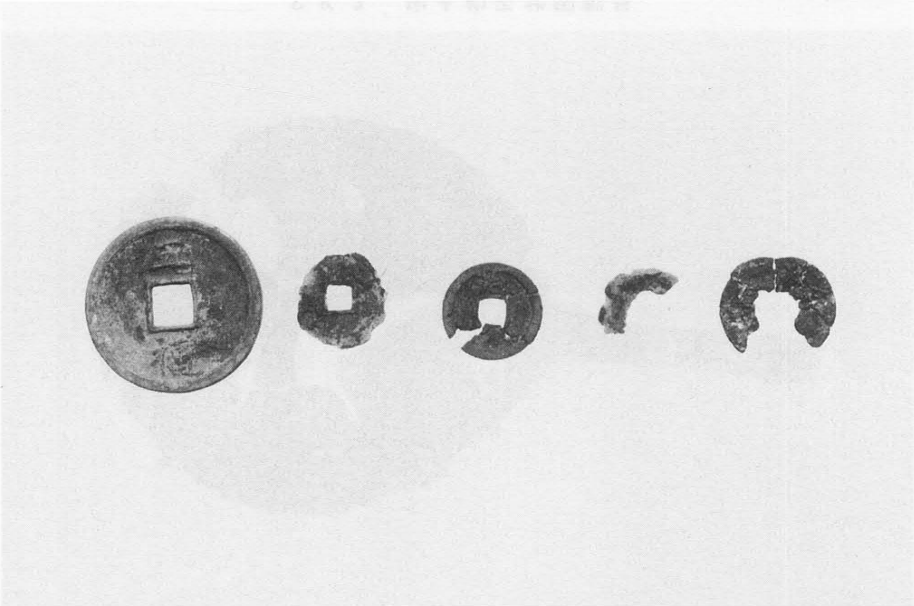
SA4・5　出土煙管



SK3　出土杓子状銅製品



A区　出土銭貨

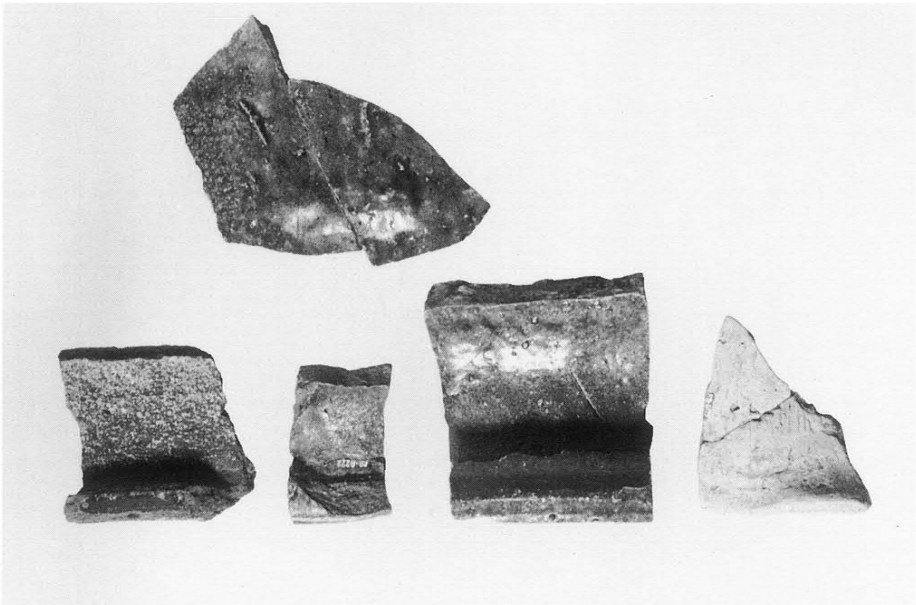


同左　裏面

ＳＫ７　出土遺物

ＳＫ９，ＳＤ８　出土遺物

ＳＤ10・11　出土遺物



Ｂ区　出土片口鉢・常骨焼

Ｂ区　包含層　出土遺物

縄文土器，石鏃，土垂

蔵元遺跡

法光寺遺跡 I

中満遺跡

例　　言

1　本報告では以下のように遺構の略記号を用いている。

竪穴状遺構……ＳＡ

掘立柱建物跡……ＳＢ

土坑……ＳＫ

ピット・柱穴……ＰＰ

溝状遺構……ＳＤ

性格不明の遺構…ＳＺ

※調査時記録のままの略記号・番号は一部「遺物観察表」内に記載している。

ピット……Ｐ

比較的小型の土坑掘り込み（報告しなかったもの）　ＳＣ

2　方位は「国土平面直角座標系」による座標北である。

3　レベルは海抜絶対高である。

4　遺物の色調は「新版標準土色帖」の該当色票の色名を記載した。

5　遺構実測図の断面レベル表示は、同一遺構内で統一されている場合、一箇所にのみ記載している。

6　本報告の執筆・編集は戸高眞知子が担当した。

7　出土品はえびの市教育委員会で保管している。

凡　　例（遺物観察表）

1　法量の推定値は（　）で示している。

2　器面調整の手法は、以下については略号を用いている。

ナデＮ　タタキＴ　ハケ目Ｈ　ケズリＫ　施釉Ｙ

3　色調は「新版標準土色帖」の該当色票の色名によった。

外内面で色調が異なる場合は　外面／内面　で記載している。

4　胎土については、概ね精良であるため特に記載欄を設けなかった。特記すべき所見については特記事項欄に記した。

土師器甕、布痕土器の胎土は加熱時の膨張に耐えるためにどれも粗砂～細礫を多く混入している。

5　焼成の状態については、どれも使用に供する程度に良好であったと考え、記載欄を設けなかった。脆弱なものは焼成よりもむしろ素地土原料の質の悪さ、またその精製や混和材調合の不十分さ、さらに埋蔵条件による風化度の違いなどに起因すると考えられる。

6　特記事項欄中の＊印の付いた記載は、佐賀県立九州陶磁文化館の大橋康二氏による鑑定結果である。

本　文　目　次

1　はじめに

調査経過の概要…… 223

遺跡の立地…… 223

基本層序…… 223

調査の概要…… 224

2　蔵元遺跡

1.調査の経過…… 224

2.包含層の状況…… 228

3.検出した遺構と遺物…… 228

3　法光寺遺跡Ⅰ

1.調査の経過…… 248

2.包含層の状況…… 248

3.検出した遺構と遺物…… 250

4　中満遺跡

1.調査の経過…… 276

2.包含層の状況…… 276

3.検出した遺構と遺物…… 289

5　まとめ…… 289

表　目　次

第１表　蔵元遺跡検出遺構（竪穴状遺構・土坑）一覧…… 232

第２表　〃　溝状遺構一覧…… 233

第３表　〃　出土遺物観察表（１）…… 246

第４表　〃　出土遺物観察表（２）…… 247

第５表　法光寺遺跡掘立柱建物跡一覧…… 257

第６表　〃　土坑一覧…… 258

第７表　〃　出土遺物観察表（１）…… 272

第８表　〃　出土遺物観察表（２）…… 273

第９表　〃　出土遺物観察表（３）…… 274

第10表　〃　出土遺物観察表（４）…… 275

第11表　中満遺跡出土遺物観察表（１）…… 287

第12表　〃　出土遺物観察表（２）…… 288

挿　図　目　次

第１図　蔵元遺跡基本層序模式図…… 223
第２図　蔵元・法光寺・中満遺跡調査区位置図
……225～226
第３図　蔵元遺跡調査区配置図…… 227
第４図　〃　遺構分布図……229～230
第５図　〃　ＳＡ１、ＳＢ１実測図…… 231
第６図　〃　ＳＫ１～５・７•15•16実測図…… 235
第７図　〃　ＳＫ６実測図…… 236
第８図　〃　ＳＫ８・１１・１２実測図…… 237
第９図　〃　ＳＫ９実測図…… 238
第10図　〃　ＳＫ１０・１３・１４実測図…… 239
第11図　〃　ＳＤ７•８、ＳＫ17•18実測図…… 241
第12図　〃　石組遺構実測図…… 242
第13図　〃　出土遺物実測図（１）…… 244
第14図　〃　出土遺物実測図（２）…… 245
第15図　法光寺遺跡土層断面実測図…… 249
第16図　〃　調査区配置図……251～252
第17図　〃　Ｃ区遺構分布図……253～254
第18図　〃　Ａ区遺構分布図…… 255
第19図　〃　ＳＢ１～４実測図…… 259
第20図　〃　ＳＢ５～７実測図…… 260
第21図　〃　ＳＢ８・１５実測図…… 261
第22図　〃　ＳＢ９～１２実測図…… 262
第23図　〃　ＳＢ１３・１４実測図…… 263
第24図　〃　ＳＡ１、ＳＫ６・７実測図…… 264
第25図　〃　ＳＫ５・８～１６実測図…… 265
第26図　〃　ＳＫ17～19、ＰＰ１～９実測図… 266
第27図　〃　ＳＤ２実測図…… 267
第28図　〃　出土遺物実測図（１）…… 268
第29図　〃　出土遺物実測図（２）…… 269
第30図　〃　出土遺物実測図（３）…… 270
第31図　〃　出土遺物実測図（４）…… 271
第32図　中満遺跡調査区配置図…… 277
第33図　〃　Ａ区遺構分布図…… 278
第34図　〃　Ｂ区遺構分布図…… 279
第35図　〃　Ｃ区遺構分布図…… 280
第36図　〃　ＳＢ１・２実測図…… 281
第37図　〃　ＳＢ３・４実測図…… 282
第38図　〃　配石遺構、石臼実測図…… 283
第39図　〃　出土遺物実測図（１）…… 284
第40図　〃　出土遺物実測図（２）…… 285
第41図　〃　出土遺物実測図（３）…… 286

図　　版

図版１　蔵元遺跡　航空写真（北から）
図版２　〃　遺構分布状況
図版３　〃　遺構検出状況および
検出・実測の作業
図版４　〃　ＳＡＩ検出・完掘状況
ＳＤ３およびピット掘下げ作業
図版５　〃　Ａ区遺構完掘状況
ＳＺＩ検出状況
図版６　〃　ＳＫ６・８・９
図版７　〃　ＳＫ11・12・13
図版８　〃　石組遺構
図版９　〃　ＳＫ10、ＳＤ３・６
図版10　〃　溝状遺構集中部
図版11　〃　ＳＫ17・18
図版12　〃　ＳＫ17・19、ＳＤ７・８
図版13　〃　作業風景、ＳＤ７・８・15
図版14　〃　溝状遺構集中部北半
ＳＤ９・11、ＳＤ17
図版15　法光寺遺跡　航空写真（東から）
図版16　〃　航空写真（南東から）
Ｃ区遺構分布状況
図版17　〃　Ａ区遺構分布状況
ＳＡＩおよび柱列
図版18　〃　ＳＢＩ、ＳＫ５、Ｃ区全景
掘立柱建物群
図版19　〃　ＳＢ７・10、Ｃ区掘立柱建物群
ＳＢ６柱穴埋土
図版20　〃　Ｃ区遺構分布状況
ピット群１・２
図版21　〃　ＳＫ８～13
図版22　〃　ＳＫ８、ＳＫ16
ＳＤ２掘下げ状況（西から）
図版23　〃　ＳＤ２掘下げ状況（北西から）
同　完掘状況
図版24　〃　作業風景、ＳＫ18、19
図版25　中満遺跡　Ａ・Ｃ区遺構検出状況
図版26　〃　Ｂ区遺構検出状況
ＳＢ１・２
図版27　〃　ＳＢ１・３柱穴埋土
ＳＫ５、ＳＫ14
図版28　〃　配石遺構

1．はじめに

調査経過の概要

平成４年度の上江地区の調査は、平成４年11月16日から平成５年３月11日まで実施した。

発掘調査は、工事の進行状況や作物の植え付け状況等を考慮しつつ、関係者との協議を挟みながら進めた。

まず、蔵元遺跡の農道部分（Ａ区）の調査から開始し、Ｂ区を加えた同遺跡の調査が12月26日に完了するまでの間、12月９日から中満地区、12月21日から法光寺地区の調査も相次いで加わった。以後、平成５年１月27日に中満遺跡の調査を終了するまで、複数の遺跡の調査を並行して行ない、最終的には、法光寺遺跡の調査を３月11日に終了した。

発掘調査区域の選定にあたっては、事前の県文化課による試掘調査の結果と工事による包含層への影響を合わせて吟味したが、調査対象面積の広い中満地区においては、調査開始時より各所にトレンチを設定し、その試掘結果から調査区域をＡ・Ｂ・Ｃ区に限定した。Ｄ・Ｅ区は、試掘後ほぼ全面について重機によりアカホヤ面を検出したが、遺構は皆無であった。

なお、調査期間中、１月９日には市社会教育課による「ふるさと講座」活動の一環として中満遺跡で体験発掘学習会を実施した。また、２月14日には法光寺遺跡において現地説明会を実施した。

遺跡の立地　（第２図，本集冒頭　Ⅰ．はじめに）

蔵元・法光寺・中満の三遺跡は、広大な中位段丘面全域に包蔵される原田・上江遺跡群に含まれ、その中の北西部、標高約260ｍの位置に分布している。

原田・上江遺跡群は、縄文時代から中世にかけての遺物散布地であるが、建山・小木原などに分布する地下式横穴墓や地下式板石積石室墓といった「墳墓」を除くと、「生活の場」の調査例は少ない。これまで住居が確認されたのは、原田地区では本地原遺跡の弥生時代後期の花弁状竪穴住居１軒、上江地区では、段丘最西端部の標高約255ｍのやや低位面にある小木原遺跡蕨地区や六部市遺跡の中近世の掘立柱建物群のみである。

調査例の少なさに加え、この段丘上、とくに中部の上江地区は水の便に乏しいことも集落の形成を遅らせていたと想像される。この地で水田が開かれるようになるのは中世以降、とくに近世の大規模な灌漑工事を経てからのことである。

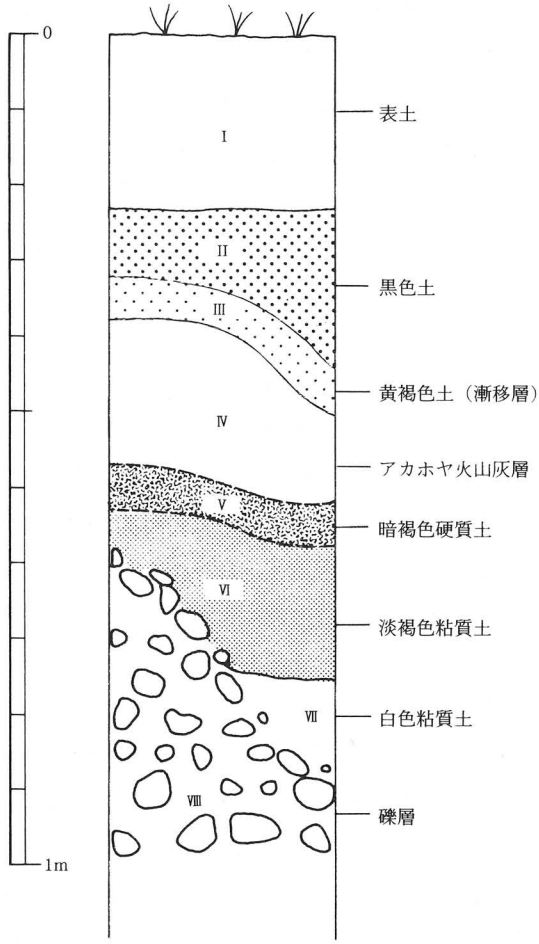
上江遺跡群中、法光寺地区には、以前より土師器や布目瓦が表採される寺院（法光寺）跡の存在が知られていたが、昭和60年の県文化課による試掘調査時にトレンチ内より平安時代中期（10世紀前半）に比定される高台付椀・ヘラ切り底の坏とともに布目の付いた平瓦が出土し、寺院の年代と寺域が、より具体像をもって想定できるようになった。

今回の調査区域のうち、法光寺遺跡がこのトレンチの北東約200ｍ、蔵元遺跡が同じく西300ｍと、共に法光寺跡に近接の位置にあり、関連する成果が期待された。

基本層序（第１図）

三遺跡の土層堆積状況は、同一段丘上にありながらも一様ではなく、部分的に緩やかな谷状の窪地があるなど、段丘原地形の高低によると考えられる変化も見られる。

第１図は蔵元遺跡をもとにした層序の模式図である。基本的には、上からⅠ表土、Ⅱ黒色（黒褐色）土層、Ⅲ黄褐色土層（漸移層）、Ⅳアカホヤ火山灰層、Ⅴ暗褐色



第１図　蔵元遺跡基本層序模式図

硬質土層、Ⅵ淡褐色粘質土層（ややシルト質）、Ⅶ白色粘質土層（部分的に堆積）、Ⅷ段丘礫層となっている。

Ⅰ層表土は、水田および畑地の耕作土であり、水田では下部に数枚の整地層（床土）がある。Ⅱ～Ⅴ層は火山灰母体の土壌。Ⅵ層は漸移的ではあるが、Ⅶ層とともに水成堆積物と思われる。Ⅱ層以下については、農地開墾時の削平の深浅や地形の高低によって残存度が異なる。

Ⅱ層黒色土は古代～中世の遺物包含層である。

法光寺遺跡では、このⅡ層に茶褐色味があるため「黒褐色土」とし、さらにａ・ｂ・ｃの三層に分けている（第15図）。Ⅱａ層は灰色味の強い濃褐灰色で白色の軽石粗粒を多く含んでいる。この軽石粒は火山灰分析に供していないため時期や噴出源が不明で、混入の原因も人為的な撹乱によるものかどうか判断できなかった。そのため、ここではⅡａをⅡ層に加えているが、厳密には分層区別すべきと思われる。Ⅱｂ・Ⅱｃ層は通常のⅡ層の上層・下層に相当するもので、下層が硬くしまる自然層をよく残しているのに対して、上層は概して軟らかく遺物片を含み、白色軽石粒を含む部分もある。下層は褐色味が強い。これら二層それぞれの厚さは一定していない。

Ⅳ層のアカホヤ火山灰層は、二次的な堆積状況は観察されなかった。

Ⅵ層は礫層直上に堆積しており、礫層の窪地のある箇所では厚い。

Ⅶ層はさらに限られた窪地内にのみ堆積していることが、礫層に達する遺構の壁面で確認できた。

中満遺跡では、調査区北半部にⅥ・Ⅶ二層がほとんど確認できず、Ⅴ層直下に礫層が現れるという状況であった。また、同遺跡では、調査開始時の試掘で表土から黒曜石製石鏃１点が出土したが、縄文時代の包含層は、三遺跡とも確認されなかった。

調査の概要

三遺跡の調査方法は、次のようなものである。

調査面（遺構確認面）は基本的にアカホヤ面とし、Ⅰ～Ⅲ層は重機により除去した。

包含層のⅡ層が比較的厚く残っている部分（蔵元Ａ区北端部、法光寺Ｃ区西部）については、上層部に生活面や浅い遺構が含まれる可能性が高いものの、やむを得ず調査しないことにした。ただし、法光寺Ｃ区北東端部の区画では、表土除去後、Ⅱ層（厚さ15～20㎝）の手掘りによる遺構・遺物の検出を試みている。

遺構を含む調査区内の実測作業は、調査員の指導のもとに経験のある作業員らが行なった。その内容は、調査区内に設定した10ｍグリッドをもとにした、平板による遺構分布図作成と20分の１縮尺の手実測である。遺構の内容や時間的制約上、中満遺跡Ａ・Ｂ区と法光寺遺跡ＳＫ18・19については、平板を用いた50分の１縮尺の実測のみ行なった。

遺構の埋土や調査区境界およびトレンチの土層断面の記録は、調査進行の都合上、すべてについて実測することができなかった。また、記録した土層断面図も、本報告中ではかなり限定して掲載している。

法光寺・中満遺跡では、ピットの埋土の記録にも留意した。

以下、各遺跡の調査成果について簡潔に述べておく。

蔵元遺跡は中世の集落の一角で、多数のピットと溝状遺構、粘土採掘土坑などが検出された。

法光寺遺跡は古代の集落で、掘立柱建物群が検出された。遺物中に墨書土器１点と布目瓦片１点が含まれ、法光寺跡との関連が注目される。

中満遺跡は近世～近代初頭と比較的新しい時代の遺構が検出された。当時の民家の跡地と考えられる。

２．蔵元遺跡

１．調査の経過

蔵元遺跡の調査は、農道および水路用地の幅６ｍ長さ180ｍ の区間（Ａ区）と、工事区域内で削平による影響が最も懸念された農地部分（Ｂ区）について実施した。

Ａ区は、作物植え付け状況や調査中の農道確保の都合上、数ヶ所に分断しつつ調査せざるを得なかった。Ａ区南端部については、重機によりトレンチを掘り下げ土層を確認したが、南に向かうほどアカホヤの残存度が悪くなり、また、礫層がすぐ現れたことから以南の調査は不要と判断した。しかし、工事中、トレンチより約３ｍ南の５ｍ角の範囲で再びアカホヤ層が確認され、原地形が南に浅く落ち込んでいることがわかった。ピット３個が散見されたが特記すべき状況はなく、簡単に記録するに留めた。

Ｂ区は、トレンチャー跡が縦横に入るものの表土下すぐにアカホヤが現れた。遺構検出状況によって調査区を拡張する予定だったが結局果たせずＡ・Ｂ両区の溝状遺